

演劇会議

発 言	1
なかまの素顔 5	2
働くものの演劇をめぐって(2)	4
状況—観客—劇団 <東リ演オールド学校の討論より>	7
■劇 評■	
「おれは雷」を見て	19
「泰山木の木の下で」「ヤケクソ組合願末記」 「分裂気質」	20
働きながら創るということ	24
地域に根ざした活動を見聞して	26
演出へのある疑い	30
劇 団 通 信	34
東西リ演・道演集のうごき	41
■戯 曲■	
「星をみつめて」	45

心をゆたかにします

HOLP

HOME LIBRARY PROMOTION
家庭の図書室づくり

- 1. 児童文学の名著 10冊
- 2. 児童文学の傑作 10冊
- 3. 児童文学の選集 10冊
- 4. 児童文学の全集 10冊
- 5. 児童文学の選集 10冊
- 6. 児童文学の全集 10冊

1. 全巻先着払いでお申し込みと同時に全巻揃えてお届けします。
2. 全巻先着払いでお申し込みと同時に全巻揃えてお届けします。
3. 無条件で返金保証。お申し込み後、お申し込みの通り届かない場合は、お申し込みの金額を返金いたします。

本誌 図書月販

〒100 東京都千代田区千代田 1-1-1
電話 03-260-2401

演 言

日本の各地点で活躍する
劇団・演劇サークルの仲間のみなさん！
東・西リ演の総会・ゼミナールに結集して
学びあい、励ましあい、確信をもって
創造と普及の運動を、大きく発展させましょう！！

8月9—10日 東リ演第9回ゼミナール 於熱海
↓
10—11日 東リ演第7回総会 文化服装学院
(連絡先=静岡市沼津町289-2 演劇音楽センター内・東リ演事務局)
TEL・静岡 71-7337

8月16—17日 西リ演第8回総会 於広島
(連絡先=大阪市河内野区文ノ里4-18-6・関西芸術座内西リ演事務局)
TEL・大阪 621-2112~3

70年安保廃棄をたたかう演劇行動 (’70演劇行動) 参加の創作戯曲を 東西のセンターへ集中してください！

- (1) 企画のテーマは「安保条約の廃棄」です。モチーフは作者の自由。
センターでオムニバスに構成し、70年4~5月に全国一斉上演の
予定。東京演劇アンサンブル「ベトナムを見ている」を参考。
- (2) 作品の長さは10~40枚。60部をプリントにして7月末日までに、
それぞれのセンターへ送ってください。問合せも下記へ。

東日本センター・岐阜市西野町1・劇団はぐるま内・TEL 岐阜 65-1852
西日本センター・大阪府茨木市駅前1丁目9-21・劇団未来内・TEL 茨木 23-3539

前号のあとがきで簡単にふれましたが、東・西リ演の「七〇年安保廃棄をたたかう演劇行動」の共同企画は、双方の運営委員会の積極的な賛同をえて、東では岐阜の劇団はぐるま、西では大阪の劇団未来に、運動をすすめるセンターが設けられました。

すでにセンターからは、各劇団内外の書き手に七月末目標で一〇、四〇枚の戯曲の生産を依頼するとともに、全劇団が来春四、五月の一斉上演に参加するよう要請し同時に本誌も九月定稿化されるこのオムニバス作品の掲載による特集号を計画しています。

一方、五月二九日東京で開かれた、全国労演中央ブロック企画会議へのそれを皮きりに、創作活動と上演活動への援助、例会実現あるいは共催によるこの行動への参加など、全労演への具体的な要請をおこしており、その中からは、東・西リ演未加盟の劇団と労演の提携によって、行動をスタートした地域もでてきています。

本号「劇団通信」トップの福井の劇団ひまわりが、独自に安保廃棄・沖繩返還を主題とした合同公演の企画を報告していることでも察せられるように、この演劇行動は、きびしい今日の情勢と広大な日本人の願望を正しく反映する全劇団の、統一的な要求にこたえる企画だといふことができます。六〇年の安保斗争が、東・西リ演を誕生させた根柢の力であるとすれば、いま私たちが、未加盟の劇団、労演の多くのなかまをふくめた創造的な

統一行動をおこせるところにこそ、七〇年への斗争の明瞭な人民の力量の 에스カレーション があります。私たちは確信をもって、援助励ましあい、一〇ヶ月後に開幕するこの大事業を成功させたいとおもいます。

そのためには、第一に、東西センターの意志と計画を隙間なく一致させ、統一司令塔の役割を果たしてもらわねばなりません。加盟劇団ばかりでなく、未加盟の劇団や個人、とくに全国の労演のなかまに企画内容を充分理解してもらい、創作の募集から脚本の配布、上演計画からその実施にいたる、濃厚な協力を獲得する必要があります。

第二に、各ブロックと劇団が、この行動の重要な内容を討議によってふかめ、劇団員ひとりひとりに行動参加の意義を、しっかりとつかんでもらうべきです。そこから一人でも多くの書き手をつくり、戯曲の完成をたすけるエネルギーが生まれますし、全国の仲間と連帯しての一斉上演が、劇団の独特の要求と正しく結びあつて、いきいきとした創造、ぶあつい普及の中で成功的にちかるとるにちがありません。

日本のすみずみから響いてくる、平和と独立、権利と安全を求める無数の声で私たちの創作を満たし、一斉上演とそれをめざす演劇行動の中で、安保廃棄を実現する力をいっそう強めましょう。

なかまの素顔 5



三上和子さん

— 弘前演劇研究会 —

やんを生んですぐ、産後は十五日？もあればいいだろうという演出者に、その時は文句もいわず稽古にできてきている。それも、夏の暑い日だった。

第四回公演の「おりん口伝」では、岩谷たぬめ役として、毎夜、懸命に二人の子供を寝かしつけていた。追いかみになると、稽古場にかけてつけていた。追いこみになると、演出者は事故をおそれ、自転車は禁止する。

そんな或る吹雪の夜、やっとかけつけてみると稽古はちょうど終りで、彼女は泣いていた。泣いていたせと仲間が話していた。

その「おりん口伝」は、青森県演劇特別例会だったので、弘前市以外にも、青森市、八戸市の舞台があった。和子さんは、二人の子供を連れてあるいた。八戸でのこと。長女の生ちゃんが薬屋から見えなくなった。出でない者や労働の人が探したが、見えない。彼女の一番はせまる。生ちゃんは泣きだす。和子さんは、そんな生ちゃんを睨みつけていた。が、やがて黙って立って舞台へ出ていった。あとで佐野巡視頭役のMが、生ちゃんを発見した。発見したら、何故連れてこないんだと云うと、生ちゃん曰く「八戸は最後だから、生ちゃんと終りまで見るんだ」Mに頼まれて観

三上和子さんは「弘前研」創立以来、六年の仲間である。家庭の主婦として、二人の子供（長女六才、長男四才）の母として、もちろん良き夫君の良き奥さんとして、また、地域の、たとえば「新婦人」の活動家として、じつに多忙な人だ。最近、市に保育所を確保させるまで、自宅を保育所に解放し、自らその責任者として働いていた。ところが、そんな多忙な和子さんが、創立以来の「弘前研」の舞台を、「キューボラのある街」いがい全

部ぶんでいるのである。主婦子持ち演技者にはあとも二人いるが、これは大変なことだと思ふ。こうやって書きはじめてみて、じつは私の立場上いまだ更だらしのないことなのだ。が、うーんと正直なところ唸ってしまう。

第一回公演の関口潤作「太陽の民」では、お米役を演じ、妊娠五ヶ月の妊婦だったと、あから聞いた。この子が長男の学ちゃんだ。

第二回公演は、木下順二作「山脈（やまなみ）」村上天さま役を演じたが、この時も学

客席の最前列の彼女のところまで行った、労働の係の人の伝言であった。そうだと書かないと正確でない、私はほとんど後日談として聞かされる。子連れの場合であるが、はじめ御主人がはずかることになっていたのだが、文字どおり運わるくジで入院してしまったのである。よね役のAの子供も二人子役として出演するので、じゃアということになったので衣裳のこともあり、Aの母親まで一行に加えての旅だったのである。

それほどまでして、芝居を演りたいか？と大きくと、和子さんは「うん……」とうなずく人である。頑張りやである。しかし、なんといっても御主人の熱い理解が、今日までの彼女を支えてきたと思う。「おりん口伝」の合評会とき、子供が病気で出席できない和子さんのかわりに出席し、出演の感想や反省を彼女からの伝言として挨拶してくれる、御主人である。

御主人の三上孝夫さんは、青森銀行の労働者だ。一九六二年、松川事件無罪要求の全国行進でも青森県代表の一人として参加したが、そこで私は、はじめて孝夫さんと進った。メガネをかけた好青年であったが、やせていた。この膝で、袖台まで歩きとおせるのかい

な、とその時思ったが、彼も私のことを弘前はまたなんでこんな細いのを、おくりこんでくれたのかいなと思ったそう。

この行進団に支援にきていた多くの団体のなかで、人気のあったのが、不当解雇で闘っている青森国鉄バスのガイドさんたちだったのだが。休憩地で話しあったりすると、どうもそのうちの一人だけ、孝夫さんと親しげである。それとなく他の人に聞いてみると、彼女は、ガイド労組の執行委員長だという。明朗でもよびり強情そうな、和子さんの独身時代であった。もちろんその時は、やがて一緒に演劇運動をやりだすなどは、お互い思ってもみなかったのだ。

高校時代から、彼女は演劇に興味をもち、一時は声優になりたくて、上京も考えたそうだが、事情がゆるさず断念。しかしそんな理想が、卒業するとバスガイド募集に、華やかな期待もあってとびつかせたのだという。

ところが就職してみると、現実は大変な人権無視の職場であった。さっそく仲間たちと組合をつくる。彼女は執行委員長にえらばれた。とたんに全員解雇である。

それから長い闘いの日々、うたごえ運動にも参加し職場演劇協議会の舞台へも出演、そ

ういういと活動のなかで、当時、青森銀行労組の専従者であった、孝夫さんとむすばれるのである。

先日、「弘前研」の新人歓迎会があって、旧人たちは、創立以来の思い出なんか話していたが、和子さんはしみじみ話してもいられない、若い人たちがこうしてはいつてくる、此の人たちに私達は責任があるんだと話していた。ほんとだ、ほんとだと私は思った。

彼女の家へ、どやどやと仲間でおしかけていっばいやると、例の五〇〇円ウイスキーのおまけのタンブラーがならぶ。へえ、孝夫さんもやってるねえ、と私が喋ったら、そばで誰かが、違うちがう才嬢のほうだという。

これからの「弘前研」での和子さんの活躍を、演技者として、もうひとつひやくの時期だと思つて、私は期待している。それも「おりん口伝」にむけて。

しかし、やっていくには、これからの毎日もしかしたら苦しくなりこそすれ、楽にはならないだろ。だが、それがどうしようもない私たちの現実であるなら、それも斗いだ。そこでへばちまったら、芝居もクソもない。頑張りや、和子さん。県演の仲間たちが待っている。《弘前演劇研究会 作問雄二》

働くものの演劇をめぐる (2)

関 き よ し

前号のおわりでばくはこれから「それぞれ
の劇団の創造にそくして具体的に考えていき
たい」と書きましたが、今日までの間に「働
くものの演劇」として、劇団埼玉の「おれは
雷」(四月二七日・川口市民会館)しか見て
いません。本稿はまずそれから。

早乙女勝元原作・相沢嘉久治脚色のこの劇
は、一九六五年に東京芸術座で初演されたも
のですが、久しぶりに見て、中小企業に働
くごあたりまえの若い労働者たちをいき
と手ぎわよくえがいてはいるものの、独占
下請という企業系列の構造的把握の弱さと、
類型的な人物像が、舞台化にあたってあまり
にもあつさり見すごされているのが気になり
ました。東京芸術座初演ではミュージカル仕
立ての軽い娯楽作品としてけっこうたのし
めたのですが、それはまだ当時めずらしかつた
表現上の新鮮な工夫とともに、はじめから「

つくりもの」という安心感があつたせい
かもしれません。埼玉の舞台はさすが登揚する
労働者たちにリアルな存在感があります。それ
だけに劇の内容、つまり機構と人間関係の
かわりあいのたよりなさが目だったといえ
ます。埼玉の演技陣は二十年からの舞台経験

をもつ人たちを中心にかなり層の厚い集り、昨
年の「日本の幽霊」や、県南演劇集団当時の
「消えた人」などでは状況をささえる情感と
人間同志の葛藤をかなり鋭く重厚に
くれました。つまりこれは、悲劇より喜劇の
むづかしさともいえませんが、ひょっとすると
ここの人々には「政治」や「支配」とい
いわけば大項目の課題をとらえるのにはな
れても、身近かな労働者の生活と意識の矛盾
をとらえることが、案外おろそかになつて
るのではなからうかという推測もおきる
ので、それにしてもこの舞台を客席から眺めて

抛棄となり、形式の単純化に通じるもので
す。それはテーマの単純化をうむ危険もあり
ます。形式とテーマの短縮による一面化は芸術
的せつちかちのあらわれというものでしょう。
「敵が複雑に攻めてくれば、私たちも複雑に
たたかう」(前号、黒沢報告)という「働く
ものの」の姿勢をあくまで現実にとくしてと
らえる努力がのぞまれるのです。

ついでに、やや飛躍するようですが、東西
り演がその内部で創作方法の討議を重ねれば
むろん「一致」はしないでしようが、「統一」
の方向にむかうでしょう。しかしそれは表現
上のスタイルを「統一」させるものであつた
り、「画一化」にむかうものであつてはなら
ないでしょう。一九六二・三年に成立した東
西り演の現在までの発展が、マスコミの巨大
化や電話のダイヤル化、新幹線や高速道路の
開発に規定されるというのは馬鹿げていま
すが、それとまったく無関係だということも
軽率でしよう。「芸術の形式は、与えられた時
代、与えられたる社会の労働の形式を結局に
於いて規定する所の生産力(技術)の発達に
よつて規定される」(蔵原惟人「プロレタリ
ア芸術の内容と形式」一九二九年)というの
は正しいのですが、やはり「芸術に於け

る形式は、生産的労働過程によつて予め作ら
れたる形式的可能と、その芸術の内容を為す
所の社会的及び階級の必要との弁証法的交互
作用の中に決定される」(同上)ということ
でしょう。

最近またプロレタリア文化運動の再評価、
継承ということが問題となりつつあり、前号
黒沢報告や十号西り演一般報告でもふれられ
文団連主催「安保と文化問題」討論集会の報
告などでも強調されていますが、どうもその
「革命的伝統」の継承、評価にかたよつて、
その「民主的」側面が見落されがちのように
ぼくには思えるのです。「プロレタリア文化
運動」というと、統制のきびしい「画一化」
の運動だという印象を与えています。その
指導理論であつた前掲の蔵原論文も、豊かな
様式を生み出す可能性をひらいているものだ
と思えますし、たとえば「プロット」(プロ
レタリア演劇同盟)の「演劇サークル」(観
客の組織)や「自主劇団」への方針は、当時
の情勢からくる性急な一面はあるにしても、
統一戦線の自覚と、観客と創造団体との正し
い関係の認識の、かなりはつきりした基盤の
上にたつてゐることを、とくに見落してはな
らないと思います。それは「革命的」である

現実の勤労者にのしかかっている「合理化」
という名の圧迫がここ数年來ことのほかはげ
しく、皮相や風俗ではとらえられぬほど内
面的に進行していることを思いしらされます。
たとえば劇のたて糸となつてゐる主人公イカ
ズチとノッコという女の子との結びつきは、
「挫折・失意」を通じてであり、その見かけ
のカッコ良さとはまったくうらはらにつきま
とう心情的な暗さが、やはり作品の弱点とし
てうつつてくるのです。

ところで、この数年舞台表現の新しい手法
が工夫され、輸入・移入されて試みられて
います。プロセニアムの破壊は日常茶飯となり
観客はまったくそれになれてきています。こ
れは舞台のこと以前に、日常生活の中でし
よつちゅうテレビなどでCMによびかけられ、
ニュースや「ドラマ」で時間と空間の飛躍を
体験し、意識の多層化と、「物語り」になれ
つつあることと関係しています。埼玉が現代
の観客にアピールする新しい表現の発見をく
わだてるのは当然であり、その意図は大いに
みとめていいと思います。ただそれが、観客
の要求を「気易さ」とうけとり、テレビを茶
の間で見るような気楽なたのしみを与えるこ
ととなつては、新しい形式を追求する努力の

だけでなくきわめて「民主的」な性格をもつ
ものであり、文芸協会、自由劇場からはじま
る日本の近代演劇が、はじめて大衆である鑑
賞者と創造者とが対等の立場として成立する
という画期的な運動であり、たとえその後挫
折があつたとしても、前者が後者を生み出す
契機をつくつたのです。そこに現在、観客運
動、自立演劇運動をふくめた演劇運動にとつ
ての重要な価値があるのです。決して上から
「与える」だけの、「プロバガンダ・アジテ
ーション」だけのものではなかつたはずで
す。演劇が観客を前にしてはじめて本格的に成立
するものであるかぎり、「アジ・プロ」だけ
で記録に見られるような劇場の感動・興奮・
熱気が生まれるはずはないのです。ぼくらが
当時の運動を知るのには関係者の話を聞くほ
か文献・資料にたよるしかありませんが、それ
らはおおむね、演じる立場、組織する立場か
らのもので、その時かぎり消えてしまつた
際の上演の状態は想像するよりほかありませ
ん。そこからは創作、組織の方針からせいぜ
い創作過程しかわからないという上演の実態
ぬきの研究による片よつた判断がうまれる傾
向があるのです。一般に芸術論というものが
そういう傾向をあらわしているものでしょうが

演劇論の中に観客論が述べられる危険はとくに大きいのです。

「プロット」は一九二九年の結成当初から「労働劇団の全国的調査及びそれへの援助」という方針を明記していますが、三〇年四月の第二回大会では、新スローガンとして、一、演劇を工場へ農村へ、二、プロレタリアートの刻々のスローガンを生かせ、三、労働者農民を先頭とする観客の組織へ、四、職場を中心とする労働者農民劇団の結成へ、の四つをあげ、基礎的な三つの活動形態の中に「労働者農民劇団による活動」を加えています。

プロレタリア演劇運動が大衆的な基盤をもったのは、演劇同盟と改称しIATB（国際労働者演劇同盟）加入をきめた一九三一年十月の「プロット」第四回大会からですが、「プロレタリア演劇運動の弁証法的唯物論的確立へ」を中心スローガンとして、「あらゆる工場・農村・学校・社会に演劇サークルをつくれ」「労働者農民の自立的演劇の成長」をうたっています。加盟劇団十三、同盟員四〇〇であった「プロット」の影響下の「演劇サークル」は一六四サークル、二二二二人と発表されていますが、「演劇サークル」「自立

演劇」が運動の中ではっきり位置づけられたのはこの時が最初と見ていいでしょう。（ちなみに、八田元夫氏の話によれば、「サークル」は蔵原惟人氏、「自立」は杉本良吉氏のそれぞれの訳・造語だという）この方針は村山知義「プロットの新たな方針と新組織の其後の展開」「其後の組織上の諸問題」「プロット」一九三二年一月二月号）にくわしいが、「演劇サークル」「自主劇団」については次のようです。「演劇サークルはそれ自体の活動力をもっていない。それ故、そういうサークルをつくるのではなく、まず労働者農民の自立的劇団をつくり、しかる後にその擁護団体を

作るべきだ。そしてこの両者を共にプロット内に組織すべきだ」というベルリンからの勝本清一郎の意見を批判して、「専門組織としてのプロットと大衆的演劇組織である演劇サークルの二重組織は」「統一戦線のための組織として正しい」として「我々は決して労働者農民の自立的劇団を演劇サークルから切り離しては考えていない。サークルは自立的劇団の生誕成長のための温床となるべきであり自立的劇団はサークルの拡大強化に役立つであらう。」と述べています。

この基本方針は「プロット」内につくられ

状況 — 観客 — 劇団

—— 東リ演オルグ学校の討論より ——

日時 一九六九年一月二日
会場 福島県郡山市 国保館

黒沢参吉 (京浜協同劇団)
若尾正也 (名古屋演劇集団)
山崎欣太 (劇団 静芸)
田村 賢 (劇団 はぐるま)
荒井敬寛 (劇団 労芸)
阿部能明 (仙台小劇場)
緒方浩司 (劇団 新劇場)
池永保夫 (名古屋演劇集団)
井岡栄二 (劇団 静芸)
細田寿郎 (京浜協同劇団)

◆ 複雑な状況ということ

山崎 こばやし、黒沢二論文(本誌二一号掲)

載)を心に、運営委員会と事務局のオルグ学校をすすめたい。最近われわれの中で、どういう劇団が必要か、それをどう構築するか問題になっている。専門家の間からも、千田氏のもの、民芸の宇野、滝沢氏の対談など、問題の重要性を反映している。一方、上野やすがお、南大阪など各劇団が地道な探求をすすめているわけで、このオルグ学校での多くの経験に学んで集約し、理論化することだとえば弱い地域を援助する必要があるとおもいます。

黒沢 オルグの役目は、現状をどう捉えるかに加えて、どう打ちかの見とおしをもつことだ。劇団の強化は最大級の課題だから、全員がこの一点に集中して話合いたい。

山崎 専門家の劇団論は、トップ級の頭でこ

た自立劇団対策委員会できらに具体的に発展させ「プロット」一九三二年六月・七月号「自立劇団の問題」に発表されますが、おそらくこれが最初の自立演劇論といっているでしょう。

紙数の許すかぎり抜き書きして見れば、「労働者農民の演劇愛好者をただ芝居を見るものという方面からのみ考えてきた。しかし我々は彼等の中には芝居をやりたい連中がいるという事を忘れてはならない。そこで労働者農民の自立演劇(素人芝居)が問題になるこれが又演劇サークルに一つの自主的な活動を手えるための重要なモメントの一つだ。」

▲まず自立劇団を作って、それからその支持者を組織するVという様に機械的に考えるのではなく、自立劇団を作るためには、まずサークルというような形でその為の準備活動が必要だろうし、又自立劇団を作るといって考えなしにも演劇サークルが生まれてくる」

「自立演劇の場合、創造的活動をする者とその観客者との間に、はっきりした境界線をつけることはあやまりだ。サークルの全員の意志を自分に反映する様なものとして、自立劇団なり、自立的演劇活動なりが持たれなければならない。」

紙数がつきましたが、ここかに鑑賞と創造の基本があるように思えます。(未完)

しらえた前近代的なものという気がする。

また西リ演の一般報告にも、現実の劇団論と充分結合していない弱さがある。新しい創造の新しい革ごるもとしての劇団組織が必要だ。そこで二つの論文だが、こばやし論文は劇団はぐるまとしての問題提起か。田村 これは、劇団に対する、こばやしの問題提起ということだ。

黒沢 自分のものは一月七日、札幌での報告に加筆したが、全部文章化できていない(一一号掲載の内容を口頭報告)

山崎 日本の新劇史をどうみるか、指導階級としての労働者の観点にたつて、従来の把握のよわさを指摘しており、京浜で三〇年活動した黒沢の体験からの労働者演劇の伝え方とおもう。大きくは統一できて、一つ一つの現実認識は違おうし、その中でやりとげていないことは明らかにする必要があるということだろう。

(このあとテーブの欠落で若干不詳の部分あり)

緒方 北海道演劇祭出演の浜益村青年演劇の「潮鳴り」について、われわれが批評すればする程舞台は角がとれて、スマートに観よくなるが、逆に最初の荒いエネルギーが

響をよめる。こういう傾向がでてくる。そこから東京の新劇の下敷きではダメだと思つた。平沢一労働劇団がどうやられたか一労働者は見当つくが、ほくらの劇場のそれとちがう、とりすましていない活気にあふれた舞台と観客だらう。このところをいよゆる新劇史の視点からでなく、つかむ必要がありはしないか。

田村 平沢計七については名前しか知らないが、オッベケペー以来民衆が演劇に生活を反映させ、斗いの武器にしてきたことはわかる。しかし、労働劇団が秋田、土方氏たちを感動させたことを、今ここにもちだしてきても何ともなるまい。六〇年安保でも砂川斗争でも、たとえば「赤トンボ」の歌をうたえば鳥鼠のたつような連帯感が生まれるというように、全体を統一できる文化手段があった。はぐるまでも「三池の斗い」のような報告劇もやったが、あれでは今日の普遍的な題材にならないし、いまだにそこに力点をおかれては具合が悪い。樺美智子さんの死についても、あれが全学連を潰滅においこんだという評価もあれば、一方三派系の学生や労組内の反戦青年委員会も否定しがたく存在している。この辺が六

で、観客に感動を与えるものが、黒沢の単純明快な方法でいいのか、別のアプローチがありはしないのか。

●観客の求めているもの

山崎 ナップが生まれる以前にも、日本に個々の文化運動はあったが、日本共産党の二期的な文化政策がだされて、それ以前とハッキリ違っている。プロレタリア階級の世界を要革する方法として、文化がとらえられた。文化芸術の運動は階級斗争の一翼という考え方が集中的にあらわれ、政治と文化のかかわり、我々がこの中でどう闘うかの政治的立場一党派性が明確になり、プロレタリア階級と密着して斗っていくようになった。また形象化の対象として働く人々をとりあげたのも、これ以降のことである。それまでの文芸作品の主人公は、何万分の一のエリートが対象だったが、藤森さんの作品などから発して「郡上の立百姓」のように、名もない農民が我々の主人公になった。さらに、文化芸術をつくりひろげる対象として、組合や居住、職場サークルなどに求めたのも、新しい状況であらう。

黒沢 われわれとしては、演劇運動の中で、

〇年と現在のちがいで、階級矛盾がオールドマイテイではない。ルポルタージュドラマが普遍的な統一への投石になりうるか。

黒沢 六八年の注目すべき活動という場合、「ゼロの記録」「ヒコシマについての涙について」というように、創作の舞台がだされるが、この視点は正しいだろうか。甲府では「泰山木の木の下で」をやリ、京浜では「コンペア野郎に夜はない」をやっている。その年生まれたオリジナルだけで日本の演劇状況をおさえる感覚は狭小だらう。さらに、われわれの観客のトータルは一体何人なのか、それは新劇など観たこともないおびただしい人たちの何パーセントなのか。その僅かな観客めあてに書いたりやったりしながら、演劇状況を云々するのは客観的には滑稽でしかない。巨大な人民大衆の水面に浮く一滴の油では、創造をふかめるといっても本質につきささららない。

田村 問題は評価の価値基準にある。労働者階級のたくましさ、創造性などと云つても言葉の空転だ。東大問題でも組合運動でも状況は複雑だ。紡績の女工さんが不当裁罰され組合からも見離され、長い裁判斗争に入る。劇団でもがんばればとカンパをして、

平沢の労働劇団がそういう観客との対面を意識的にやった、という点をおさえておけばいいのではないか。

若尾 こばやし論文のいう複雑な状況は否定できない。今の労働者に窮乏革命はない、というのだが、たとえば演集の観客はホワイトカラーが多いが、この人たちは飢えたり窮乏したり追いつめられたりはしていない。給料も小企業の社長のぼくより、トヨタ自動車の古い労働者の方が多し。ところが、そのトヨタの労働者が収入の少ないうちの照明のごとに移ってくる。なぜかときくと、トヨタでは働く意欲がわかないし、先がわからないという。そういう形で収奪され、人間でなくされているのが今の特徴だらう。つまりご飯のことより、人間の生き方の問題なのだ。ほくらの芝居は、そこにこたえる必要もあるのだ。平沢の労働劇団は、東京南葛でのかたまりとして評価できる。労働者とその家族の中で労働運動を実践していたかれが、芝居やるからみにこいといえれば、皆がワツとよってきて熱気をつくりだした。秋田、土方の感動もその熱気にくらたれてのことだらうが、それではこれを南葛以外の、たとえば築地小劇

やつと勝つた。ところが職場に受けられる要素がない、仕事も与えられず同僚と切り離されて、一ヶ月位で衰れた姿でやめていってしまう。これで勝利といえるか。「ドレイ工場」も製作プロセスには感心するが映画そのものには懐しさは感じて感動はできない。真に問題を衝いていないからだとおもう。もろもろの事件に評価の価値基準をもち、そこから上演一集団のエネルギーをつくることだらう。

黒沢 その価値基準で重要なものは、複雑な状況という云い方で現象と本質をゴチャゴチャにしないことではないか。労働者の闘い方をみても、未組織の職場に組合をつくる場合、個人加盟の方式をみだすというように、古いパターンの踏襲ではない新しいスタイルを生み、いわばズル賢くたかっている。しかし、それは搾取関係の本質の変化ではなく、複雑な攻撃には、複雑に反撃しているということだ。

山崎 田村の発言は大切な問題をふくんでいる。「赤トンボ」が砂川の連帯の中では闘う歌になった。しかし六〇年安保から政暴法の闘いの中では、荒木栄の歌が大きな役割をはたした。いま、七〇年へという段階

場へもっていくことができたか、できなかったらう。そこから先駆座がそれをとりいれ、トランク劇場にも刺激を与えるというように、専門の人たちとの結合が出ていしかし、平沢に学んだとしても、そのままの形では移植はできなかった。ホワイトカラーの観客と現場労働者のどっちが観客の志か、といえは後者だらうし、その比重を大きくしたいが、前者を度外視することはできない。東リ演の各劇団が、つかんでいる観客とのつながりを大切にすべきだ。しかし、いつも集まる一〇〇〇人、それだけではいけないので、本公演以外の観客と接触していく努力が必要であり、「泰山木」や「島」もやらねばならぬが、一方で「ピカの蔭から」を入れていくことも必要になる。労働者階級に依拠するという原則が、川崎では具体的にみえていとおもうが、ほくらには市役所、銀行、保険会社などからコッソリ観にくる人たちが多くみえる。そして、この人たちは肌合いはちがっても労働者階級の一部なのだ。従って労働者階級の指導ということの大切さは、よくわか

黒沢 自分としては精神的な空洞ということ

とあわせて、具体的な飢餓状態があることを強調したい。労働災害で労働者が殺され軍事合理化の進行の中で生命の安全が脅かされているのだ。ホワイトカラーと現場労働者のどっちに、ということではなく、劇団の創造方針の中に、労働者階級の指導という思想が統一的に入っていることが重要なのではない。複雑な状況ということをおもひ、ということだ。

黒沢 複雑にはちがいない。しかし、それを腑わけて対応していくなら、本質は簡明だとおもう。

山崎 平沢については、これ以上共通の認識をつくる材料がない。

黒沢 歴史的な位置づけについてはその通りだ。ここでは、劇場芸術の原型——という土方与志のおさえ方、労働者の共感と熱気がその感動の土台ということで、いいのではない。ただ、インテリ観客が多いという状況だけで、われわれの課題はたてられない。労働者がサークル活動を軸にする、という場合、それは労働の創造的な課題とかみあうから重要性をもつのであり、現在の

観客との接点だけでなく、われわれの側でつくるわれわれの状況という視点で、平沢の労働劇団を創造的な原点の一つとして考えたいのだ。

荒井 討論の根底は、劇団の民主化につながる必要がある。その点で、黒沢の報告は机上の討論という気がする。現実にははぐるま、演集、静芸、京浜すべて観客が減少している。この現実にはたまたまと空論になる。東り演の理論の体系化とか指導部の理念統一といっても、観客をメキにして創造を論じても何にもならない。東り演の創造論は観客をわすれ、本質を忘れていないか。

黒沢 空論ではない筈だが……

山崎 現在の具体的な問題をどう克服するか——それが必要ということだろう。原則的なことだから、さっきの続きに入るが、天皇制のきびしい抑圧の中で、党は天皇制を打破して人民の側に権力をとろう、そのために統一戦線をつくろうと提起している。これが戦前とだけ必死なとりくみだったか現在もつとシャープにつかむ必要があるだろう。文化も又、社会変革のためのものがあり、文学をはじめそれが大切にされたが

われわれもここに立ち戻ってやっていく必要がある。

田村 ぼくは、「カンカラ広場」まで伸びてきた静芸が、現在ぶつかっている苦悩の方が大きいたい、とおもう。

山崎 その状況とからんで云いたい。社会変革と自己変革の統一——その観点ですすめないと我流になるし、不必要なくりかえしを重ねる、静芸の停滞もそこに原因がある。劇団の団結、創造論の統一がどうなされるべきか。東り演以前からも運動はあった、それをうけつぎ発展させることで不十分だったとおもう。劇団の統一は、内部をみるのではなく、今の観客にどうこたえるのか——が中心であり、わずかに意見がちがってもそれは劇団とはいえない。その一致をちとっていくプロセスが劇団活動であり、指導部だけでなく全劇団のスタイルをつくるだろう。これは劇団員の顔色をうかがうといった矮小化されたものではない、劇団員を大切にすることは大切にするためではなく、活動のため、運動の発展のためだ。これをキリに、歴史を正しくうけつぎ、組織運動上の実践によって検証していく中で法則的になっていくだろう。日本の演劇運

動を革命的な立場でつらぬいた先輩は、いま分散されて固まっていけないが、やはり良心的であるわけで、その正しい伝統を学んでついでいく必要がある。ただ、無批判なうけつぎ方とは袂別すべきで、とくに指導者と全体の関係という点で、まちがったうけつぎ方があり、団結のためにということ、内部が蜂の巣をつついたようになる状態を四一五年くりかえした。観客の要求とあわせて有機的に団結の問題は追及しなければならぬ。

田村 終戦で一等国から転落して、その後芝居の中で社会変革と人間の復興ということを叫んできたが当時は敵がわかりやすかった。今はわからなくなっている。とくに若い人には、理屈で入ろうとしても経験がないから肌こない。こぼやし論文は、劇団の紅衛兵出でよーということだ。

黒沢 状況のとらえ方ではわかる。わからないのは状況をつくりだしている根底への認識だ。状況をそのまま劇団にぶつけておいて、後半で後援会づくりや討論をよびかけても、全劇団を奮起させるモメントがはつきりしないで、どう活動できるのか。指導部の創造運動の統一的な理念が明確でない

としたら、状況にふりまわされるしかない。居芸の滝沢、宇野対談も運動体、創造体としての劇団がぼくにはみえない、今の若い者は——という愚痴にきこえる。

● 劇団指導部について

山崎 問題はいいところへ来ている。われわれは演劇運動の本質について、教えることには熱心だが、教わることには不熱心だ。条件つきでしか教わらない。という指導部の尻尾は労働者階級の思想ではない。どう自分を変革するか——の位置、立場が不明だ。とくにわれわれには、自分の才能を特別にみるボヘミアンの要素がよい。ひとつのことはそうおもわれないが自分のことは得がたくおもう。明治一〇〇年以來のこの古い尻尾を、皆の中で切っていく必要がある。

田村 劇団の古い支持者から、TVや映画のはんらんの中で、潜在認識にあるものを舞台でみせられる非演劇的なものに魅力はないといわれる。映画におけるメカニズムのように、舞台の機構構造でしかできない演劇でなければ観に行きたくない、という。黒沢 他の観客はどうか。舞台でしか表現できない魅力はわかるが、メカニク的な機構

が先行するというのはちがいはしないか。田村 表現の多様性として、メカニクもその一つだろう。

黒沢 勿論舞台芸術の独自性は追求されるべきだが。しかし、演劇はテーマを人物にふりわけ、機構の助けをかりてうごく戯曲紹介機ではない。舞台つくりのプロセスをふくめて、人間の変革を描くことに重点がおかれなかったら、舞台機構や効果が芝居の主役になってしまう。

細田 論義が拡散して、何にむかっているのかハッキリしない。労働者演劇ということでは東り演のリアリズム演劇への一つの方向としてでているとおもうが、かみ合っていない。田村の論点は局面が一般化している、三派のいい分もどっちのいい分もわかるといふことでは、複雑というところでおさえるしかなくなる。大学は敵の権力がつくった、だから破壊しかない、という三派の否定論でいいのか。こぼやし論文でも、複雑な状況を全局面であらえて整理する指導者としての立場がないと、やることは一杯あるで終って論義になりえない。

黒沢 京浜では郡山問題が局部的には尾をひいている。かなり進歩的とおもえる人から

も、個人の汚点でクビ切ったという見方をされたが、郡山に自己改造を要求することは、実は同時に劇団指導部の原点への立脚をもとめることだった。この斗いの中でわれわれは創立メンバー三名をふくむ八名を失ったが、その痛手よりも原則にたつて統一を守れたことが、劇団の展望をつくつたとみている。

細田 劇団にとって、指導者や指導部分でなく、統一された指導部というものが鮮明になつた意味は大きいとおもっている。

山崎 指導者が全体の予測もつかないことをバツと出す、というのでなく、集団の追及の中で劇団の方向をだしていく指導部の役割はハッキリしてきた。東リ演の理念であるリアリズムの基礎は科学的社会主義であるが、自己変革を社会的責任でやる場合、まさに戯曲紹介機ではない、労働者階級に学んで世の中をかえるために自分をどうかえるかーが重要になる。また労働者の斗いの原型を、典型としてつかみ、働く人々の本質的に収奪されている状況も明確にししかもそれを変えていく立場としてリアリズムによって描きだしていくことだろう。

的にまちがいがなかった。民主主義リアリズムということがだされ、指導部分で若干の論争がおきて、その体制の中でやつてこられた。松原氏が亡くなって、劇団を名古屋でどう存続させ発展させるかの使命感の中で、指導部分はまとまった。松原氏はいないけれど、創造理念も体質も単一のリーダーの名残があり、ほく自身いつとなくその身がわりになっていた。松原氏の生前にも、みんなの劇団にしたいという民主化の要求があり、それは単一の指導者ということへの矛盾をはらんできた。そして、単一の指導者で考えたこともないし、集団主義的な指導をということも云いつつ、四、五年たつてしまった。去年一年いろいろ考え、よその仕事もみる中で、自分の古さに気づかされるが多かった。五〇代の人達が戦前新劇のワクの中でつみあげたもの、黒沢のいうプロセニアムの内側での完結という古さがほくにも残っている。松原氏にもプロセニアムの拡大という考え方があつたらうとおもいますが、やはり、新協、新築地以来のものに学ぶことが中心だつたそこで矛盾はわかっているが、単一の結目目で強引にひっぱつていく考え方になつ

● 指導部分での亀裂について

山崎 大きい目標はわかつた。指導者交代論といった問題もふくめて、各劇団から具体的な意見をだしあおう。

荒井 芸芸では「蒼氓の宿」以降停滞があつたが、劇団十五人会以来一五年の劇団と東リ演活動の矛盾と考える。具体的には「蒼氓の宿」の団内反省の中で演出と作者の評価のくいちがいが感情問題にこじれたので、演出は欠陥は創作にあるとし、作者は演出演技をふくめた三巴の欠陥と主張したそこで約二ヶ月、労働者演劇とは何かを勉強しようとして東リ演の諸資料をはじめ、古いテアトロ等を読み、五月末劇団で学習をひらいて徹底的に話合つた。その結果、創造の問題でも普及の問題でも観客の中へどうふかく入っていくかが、重要だということになつた。従来五〇枚位しか売れなかつた切符を、ぼくは三〇〇枚にのぼした。観客の中へ入らなければ売れないし、指導部の中でそういう格差がでてくると、亀裂をつくるとおもふ。

黒沢 専従者として切符を三〇〇枚売るといふ活動が、劇団全体の昂揚の中で、与えら

れた任務としてあるのか。むしろ、皆を引っぱつていく、独走的なガンバリとして、彼はよくやる、俺たちはとても彼にはかなわないーでは分岐がでてくる。

山崎 芸術上の意見のちがいで、全体的にもつと謙虚に、観客に対してどうなのか、芸芸の問題は何なのかを話合う必要があるとおもふ。欠陥は誰にもある、それを全体の中でおおしてもらうには、集団がどうなればならないかーがでてくる。

黒沢 指導者が自分を整理する、ひとり整理したもので全体をひっぱつていくという考え方もありうる。しかし、劇団の危機の中で、そこから外れて考えているのは誤りだ。それで考えがスッキリしてみても、そんなものは組織の中へ戻れば元へかえつてしまう。一緒に観客に對めんし、泥まみれになつて、幼稚とおもうところとも行動をともにしなければ整理も生かされない。

田村 バカスカ芝居やつた方がいい。ジャンジャンやつた方がいい。動いていると、苦勞ばかりが出てこないとおもふ。

若尾 演集では松原氏が生きているころ、彼を指導者に付属した指導部分があつた。創造方針からすべて一本の頭があつて、具体

がその経験は生かさねば損だ、正しい指導部でこそ、それは生かされるのではないか。

黒沢 その通りだとおもふ。

阿部 仙台小劇場は二年位職場演劇祭出演で慎重にすすめ、四年目「カンカラ広場に集まれ」で大きくふくらみ、組織強化の三ヶ年計画をくむにいたつた。問題は指導部の指導にあつた。三年計画の中で、運営委員の一人が職場斗争のために手をひき、別の一人も「陸橋」の中で落ち、そのあとひとりリーダーでしよつていくことになる。中堅をつくるという課題が、課題におわつたが、これはリーダーと新しい人の落差が大きく、教え教えられる関係ができ、全体からはリーダーの個人指導への反発、リーダーからは全体の自主性のなさが対立的にぶつつけられる状態になつてしまった。

細田 黒沢は指導者とおもふが京浜でうまくいっているのは彼と書記局、演出部のチーフでつくっている常任委員会が、機能として指導部をなしているからだ。黒沢に全権があつたらよくない、常任の積極的な拘束によつてここが頭を並べていくことで、運営委員会の民主的性格を保証している。

緒方 北海道の各劇団も指導者が多くいる。

道演集がうまれてから、劇団間の交流が活発になり、そこから指導者への批判も生まれてくる。以前はリーダーのミスも小さく収められたが今はそういえない、亀裂も出てくる。満たされない人はやめて行つたものが、今は内部で爆発する。古い劇団はこの矛盾は明らかにしている。小樽の劇団新芸はあたらしい劇団の典型だが、この落合氏は古い指導者でなく小さいことまで全体の意志で動くというようにやられている。道内の劇団が集まって、本当に劇団強化のためにどうするか、慰さめあい、こぼしあいではなく、内情をさらけだしてぶつつけあう必要がある、各劇団がそれを求めている。この会議の味も皆で検討し、それを又東リ演にかえしたい。

● 劇団の倫理—人間関係

緒方 新劇場についてだが、リアリズムの追求、観客との結合ということで民主的な運動との共闘ということが、やや機械的にとられ、デモや諸集会への参加を積極的にやった。この中で、団員は励まされ、劇団活動も新しいひらけ方をしたが同時に外の運動にひきまわされて創造集団として

の立場が曖昧になり、それにあきたらぬ人は劇団をサボった。一方で行動を中心に結束もできたが、核をいくえにもとりまく全体の統一がつかれず団内の断層ができ、新しい人は何をやっていいのかわからず核が劇団を支えることになり、先進部分で討議は充分やっても、劇団へもちこむときは機械的に結論だけをおしつける、結論は正しいのだが、全体の討議にはならないという悪循環ができ、劇団を細いものにしてしまった。この中で、演出者が創造の上でも組織の上でも実質的な指導者になっていくので、三人の演出者をつくり、運営の非民主性を打破するよう努力している。去年の夏、その指導部分の一人が倫理上の問題でやめて、劇団は足もとをすくわれた。彼が事実上の指導者であり、運動との結合を創造に優先させる傾向がよかつただけに、

その退団以後、中堅がバラバラになり創造問題でもひ弱なため、運営委員会などなくして全部を全体で討議した方がいいという一種の清算主義が克服しきれない。そして、創造的な不満を高校演劇の指導にそそいだり、職場活動に集中したりしている。これと同じようなことが、道内の別の劇団

にもおきており、そこでは不信をもった若い層が別の劇団をつくってしまった。劇団指導部の誤った倫理—品性の問題は、劇団全体の発展を阻害し、打撃的なマイナスを与えるとおもう。

黒沢 京浜の場合でも、彼の私生活の乱れを特に指導部分が、協同劇団以前から知っていたが温存してきた。あたりまえの神経では考えられないことも、長い連綿の中で磨滅していた。その爆発だといえよう。劇団の倫理を鮮明にし、無原則的な自由主義の風潮をたちぎるには、全部解明し、批判の目にさらす必要があるとおもう。

緒方 個人の攻撃ではなく、劇団の問題であり、事実をキヤッチできなかった人間関係の薄さ、民主的運営のなかつた点を明らかにしたい。

山崎 芸術家の特権で、いい仕事しているのだから—と自分の判断で許してきたものが多い。そういう尻尾をもつてはつくれない芝居、とびこえてはつくれない。ポヘミアムードでは真にいいものをつくる集団にはなれない。

同時に、長い経歴をもっていれば、古い根もふかい、自分の決定だけで動けば誤り

もおかすが、それを打撃するのではなく共にどういう指導部をつくるか、辛棒ぶよくすすめるべきだ。

黒沢 我々の場合、かこまれている観客から学ぶということが大きくある。

荒井 観客を知ることが重要だ。それが創造理念を左右するだろう。

黒沢 さらにその観客に積極的に拘束される必要がある。

細田 京浜では団内を六つのカマラードに分けているが、そこから組織的に考える可能性がでてきた。一人の劇団員への評価が少数の好みのグループでやられた場合、尾ヒレがつき重んで本人に伝わる。いまではカマラードでめんど向ってフランクに批判するから、ストレートに本人に届く。カマラードには運営委員が配属されていて、運営委員会の討議過程もここから入っていく。総会の議案もカマラードごとに討議していくから、新しい劇団員も比較的問題の核心がわかって参加できる。カマラード組織の優位性は大きい。

● 地域劇団と労演

山崎 創造思想ということだが、一つの創造

のために皆で納得できるきまりもその中へ入るし、体験も又せまい意味での創造思想といえる。その辺はどうなのか。

黒沢 ベトナム民族のエネルギーは、ベトナムの歴史と人間のエネルギーの総和だが、たとえば斎藤隆介氏の「ペロ出しチョンマ」などは、この民族的なエネルギーが、日本人の中にあることを描いている。細分化、矮小化がおこなわれている中で、このタテにつらぬく民族的なエネルギーをどうしごととに生かすか、大事なテーマだろう。

田村 民族解放戦線のように—という黒沢の発言はどういうことか。

黒沢 討論で肉づけしたいとおもう。いま必要なのは自分の地域について精通することだとおもう。自分の街、自分のまわりの人たち、それを自分の体のように熟知したい。それなしに統一戦線はつくれない。又、われわれのレバトリをたてることもできない。広大な人たちがぼくらの芝居を待っている筈だ、芝居そのものが斜陽だなどと考えるわけにはいかない。

田村 稽古場が建ち、劇団員も増し、スタッフのしごと固まったはぐるまでは、これを有利な条件として生かさない法はない—

と云っているのだが。

黒沢 はぐるまは、われわれの中での「高度に発達した劇団」だ。斗う武器も単発の小銃から、キャノン砲へ発展している。その大砲を、どこへ打ちこんでいいかわからないのは困る。

田村 それから、岐阜では労演のことがあるはぐるまの客のとりあいがおこっている。労演は統一レバ六本をきめるのだが、これは八百屋の店頭に並べた芋で、選べるがつかりだす自由はない。サークル活動ということで合評会もやるが、ここにも血肉のこよった指導がない、菓子を食べ、茶をのみ云いたいことが云えるだけ。はぐるまも同様で職業的なプロデュースでは客は減ってしまふ。

山崎 はぐるまと岐阜労演の関係は、普遍的なものではない、一つの都市で大多数の観客をもつてしまった劇団、岐阜に根ざして創作中心にすすめてきた劇団があつて、労演はあとからできてきた。これは民芸と東京労演の関係にも似ていて、劇団は労演に依存しなくてもやれるぞ—といったものをチラつかせるような特殊性がありほしくないか。こぼし氏が代表するはぐるまと岐阜

労働ということではなく、東リ演として一定の課題をたてて考えた方がいいとおもう。

若尾 もう少し、具体的にききたい。

山崎 たとえば議長、副議長が岐阜の双方と話し合ってみたらどうか。本来労働の誕生がはぐるまの発展になる筈だし、そこで積極的に東リ演としての考え方をだしていく必要がある。

細田 それは岐阜の特殊性だろうか。京浜でも劇団から労働へ運営委員の一人を休団させて副会長におくりこんだところだが、競合の問題をふくめて今予測できない危険はあるとおもう。

若尾 地域劇団と労働の協力がうたわれていても、具体的にはお互いのマイナスもあるわけだ。地域ごとにとりかかるとなると、東リ演として労働の運動をどうつかむかがまず必要とおもう。

池永 そのことは演集の場合にもいろいろ出てきている。やはり、東リ演として統一したものをだしてほしい。

若尾 岐阜は劇団がつよいが、多くはその逆で、中には労働の大国主義の押しつけ傾向もある。地域の文化―演劇をどうするのかそこでの原則をつくり、それに特殊なもの

もふくめて話し合っていけばいい。相互に交流をつくるべき時期にきているとおもう。

緒方 北海道には労働がない。観客の要求はあるし、ほくろも欲しい。しかし、お客をどう分けるかみたいな市場分割の考え方は日本の文化状況のシワヨセとしてでているもので、やはり地域劇団、労働それぞれの目的とその共同行動として、敵の問題、文化戦線の問題を東西リ演で話し合っ、態度きめないといけない。われわれの舞台より民芸の方が面白いということはあるし、それも否定しないが、労働をつくる以上、道内の演劇活動を前進させるものでなければならぬし、目的を鮮明にし観客と結びあ

ってつくりたい。具体的には、準備会の中へ道演集としての問題をだしていきながら東リ演としての方針を明らかにしてほしい

黒沢 演劇会議九号で京浜の労働と劇団の話し合いをのせたが、これを青森、名古屋、岐阜というように継続し、問題を発展させた。要は一緒に地域の文化状況をつくりかえていくこと、特に分岐の部分の解明して攻めあげることだろうとおもう。

田村 八百屋の陳列式はこまる。外国の芝居が安全な再演なのか、これでは新しい作家

黒沢 四月の創作会議の主旨は、去年の作品の評価に、この仕事の企画を加えることで積極的になるだろう。事務局で早速準備にかかっている。若尾 ここで共通したものが、劇団の討論の中で整理されていくだろう。

山崎 積極的なプランもでてくるとおもう。黒沢 西リ演によびかけて、実質的な日本断の演劇行動にしたい。

緒方 劇団での七〇年問題の討議が、具体的に

若尾 オルグ派けんのやり方だが、該当地域での自主的なセミナーへ参加するのか、講習会にして専門別にやるというようにする

黒沢 北海道では演劇祭前夜の懇談会で話し

山崎 先方の要求と合致するのが大事だ。この討論から学んだもので接点をあきらかにすれば、実践のたのしい参考になる。

黒沢 従来の経験では組織上の問題、劇団を強化したいという要求がもっともつよいし多い。今年の重点は東北―北陸だが、山形については自主的な演劇祭と結んで、そ

を刺戟するどころか逆に足をひっぱることにしかならない。

黒沢 演劇サークルの人たちが、なめたような仕上りの専門の芝居を観て、内容には不満だが仕上りの綺麗さに太刀うちできないところから、自分たちの創造活動への確信を喪っている。労働がそういう一側面をつくっているのも事実なのだ。

山崎 労働も東リ演も綱領ははっきりしている。個別にどういう問題があるのか、いま直ちに障害は排して、個別にあたって一つ一つの解決していくのが重要だとおもう。

若尾 地域の労働、劇団がもっと具体的に

あがりあうこと、すでに地域劇団が例会に身が運動としてどうのばすか、八百屋の陳列をどう変えていくか、サークルの多くはホワイトカラーだが、一部では創造運動としての高い認識もうまれている。そこをのばしていくことが重要なので、そういう具体的な話し合いをもっとほしいのだ。

◆ オルグ活動をめぐって
若尾 オルグ学校の具体的な問題として、オ

こへ参加する形でできよう、これは劇団山形と仙台小劇場があるから。新潟の場合は労働とタイアップして企画してもらい必要があるのではないか。地域の条件と要求をキチンとつかむこと、いつ何処でどういう内容で―を具体的に設定して一歩一歩すすめることが大切だ。

田村 近郊の青年演劇の人たちが、稽古場ができてからは泊りこみできていろいろ教わっていく、この人たちは東リ演というやり難くなるが。

黒沢 はぐるまこそが東リ演である。ただ東リ演の看板をしょって行き、キッチリ運動の味をつたえ、そこに拠点劇団をつくる

若尾 受入れはどうなっているのだろう。経費のことも向うにまかせ放しでは無理だろう。自主的にもたれるセミナー、オルグが参加する姿勢もつたらどうか。今度四日市

へ山崎が行くのもその一つだが。

黒沢 新潟にしる青森にしる、渡りをつけて向うの行動を起爆させる、要は事務局だし事務局が具体的な計画をもつことだ。

阿部 主体になる劇団が少ないので何をどうやっつたらいいのか、何を中心にするか

ルグ派けんの中味を話したい。

山崎 すでに黒沢はじめオルグとして動いているが、東リ演運動の理念について運営委員事務局員がそれぞれ勝手なこと云々では困るので、最低原則の一致が必要。七〇年を見とおす中で、内外の重要な問題、組織原則等を二つの報告にそくして明らかにしていこう。

田村 劇団として、七〇年にむけての同一レベルによる全国一せいで上演を提案する。どの作品にも七〇年はふくまれている、というのでなく意識的に統一作品をつくって、それをやろうということだ。

黒沢 いい提案だ。全劇団の協力で、「ベトナムを見てみる」のようにオムニバス形で書き、劇団の力量条件に応じて全部または部分上演をしたらいい。

山崎 夏の総会をまたず、ただちに全劇団へ問題提起する方がいいとおもう。

若尾 賛成。劇団単位では七〇年についてもバラバラに考えてしまう、「泰山木」も「ピカ」も七〇年につながるという決め方ではなく、われわれの統一した考え方で、この時点でこの作品という、超課題から上演形式まで東リ演としてだせたらいい。

のなかなかわからない。劇団の強化、劇団員を続けさせることで頭が一ぱいだ。東リ演では五年間、交流を軸にやってきたが劇団の状況をきくだけでなく、状況をどうきりひらくかにもっと力をそいでほしい。緒方 劇団さっぽろが道内の学校公演をやっているの、道演集では各地との連絡や状況の把握をひきうけてもらい、各劇団もさっぽろの公演に協力する。青年劇場も道内を巡演する中で、道演集の活動の一翼をになってもらっている。東リ演の強力な専門劇団として、オルグの任務は負担だろうけれど、これは青年劇場の活動にとっても大切だともう。

黒沢 それは青年劇場の総会でも、方針としてでている。オルグについては、夏までの目標として山形、青森を定め、テーマを仙台小劇場のいう劇団の強化にすえたい。勿論、要求は多様だから、勝手気ままな集まり方でいい訳だが、その結果から劇団個々の問題、戦場農村サークルの協議会活動、中心劇団の意味、いろいろその先にでてくる。

細田 東リ演加盟の劇団は、受入れに責任をもってとりくんでもらう必要がある、その

意味で、仙台小劇場と弘前演劇研究会がテコになってほしい。若尾 山形は演劇祭を観て話してやることでもいいのではないか。

黒沢 演劇祭へは三年位連続行っているが、もう一つ積極的な課題をたてないといけない、東リ演の話をしにきたーというわれわれの姿勢が必要だろう。山崎 積極的に話合いたい、ということ、申し入れ、すずめでもらおう。決定を守る観点で財政と結合しなくてもやるのが先決だ。

若尾 北陸も、秋のこととして考えたい。池永 きめてから却々動けない、今から手をつけないと難しいとおもう。

黒沢 長野については、松本の信濃小劇場を中心に考えよう。仙台小劇場は山形と協力してがんばってほしい。

山崎 各劇団の斗いとなってきた組織上の成果から大きい教訓を学んだ。この学校で到達した統一的な見解を全体共通のものにしたが。

黒沢 二つの論文とあわせて、演劇会議へ紹介はかくつもりだ。山崎 皆でかく必要がある。自分の課題をも

劇評

「おれは雷」をみて 田中久文

仕事が忙しい、疲れる、それに輪をかけて入場料がずいぶん値上がっている。そんなこんなで最近好きな新劇にもなかなか接する機会がなかった。だからだろうか、卒直にいつて、初演を見たあと新鮮な感動をおぼえた。しかしそれは内容的にすぐれていたというよりスタッフ一同の新劇運動への燃えるような情熱が舞台を通して感じられたからではないか。だから「そう、それでいいんだ」ということで観客の一人として自己満足してしまつたら、スタッフ一同に対してはなはだ失敬なことだろう。

東働演春の行動の一環として今回上演された、早乙勝元作「相沢嘉久治脚色」塚田恒夫演出による「おれは雷」は、普段新劇など見たことのないような観客にも親しみやすさ、身近かさ、わかりやすさを与える、という点でもってこいの作品だった。

前回の公演「日本の幽霊」で大変好評を得た場芸が、今回「おれは雷」を取り上げた



意図を積極的に評価したい。

○名ほどの組合のない工場に働く若者、通称イカズチは、ふとしたことから馬場さんが首

つ黒沢に書かせていいのか、どうか。黒沢 事務局でやってもらえれば、その方がいい。それは、演劇会議の次号か東リ演ニュースで出るようにしよう。山崎 では、これで終りたい。

★ ★ ★
この座談会はかなりぼう大なものですが、テープの復原にあたって整理しさらに誌上採録では、紙数に見合せて、再整理しております。出席者ならびに読者のご諒解をえたいとおもいます。(黒沢)

●劇団通信にも見うけられますが、十一号のこぼやし・黒沢論文、および赤松レポートは大きな反響をよびました。そのため十一号は品切れとなりました。これでも、重要な問題提起の必要性は分りますが、本号で予定した、田畑実氏の「リアズム演劇試論」が、原稿着到が切に間に合わず、残念ながら次号おくりになりました。(萩坂記)

になり、それが自分のせいだと思ひ込む。仲間と相談するのだが、組合はないし手のほどこしよがない。思い悩むイカズチのヒゲはのび放題。ふとイカズチの頭に「工場中ヒゲだらけになったら」。次の日からイカズチは「ヒゲの会」を作り、仲間を一人一人くどいて入会させていく。このヒゲ作戦は一見突拍子もないやり方にみえたが、工場中徐々にヒゲが増え、会社もついにこのヒゲ作戦を無視することができなくなってしまう。

私はかつて同じテーマをミュージカル「青春の歯車」で見た。軽快なテンポと集団的な歌と踊りの中に、働く若者の楽天性とエネルギー、団結の力を感じた。それを演劇というジャンルでどのように表現するのか。

三幕二十六場、目まぐるしく変化し、集団的演技の場面が多い。これを十分こなさしめることは大変なことだ。

初演から受けた印象では、どうもその点が不十分だったように思えた。俳優一人一人を取上げるとみんなそれぞれ役になりきっている。なのにどうして全体としての印象がそうなのか。その原因は「ミュージカルを見た」という先入観もあるが、どうもスタッフ一同の練習不足にも大分あったのではないか、私

にはそう感じられた。ちょっとしたことでも大きなミスをしてしまう。「あーどうしてこんなところで！」、そんな場面に何度もぶつかると、今まで舞台にすいつけられていた視線をそらしたくなる。

劇評

「泰山木の木の下で」

『ヤケクソ組合顛末記』

『分裂 気質』

五月二十四日、土の会の「泰山木」をみたその少し前に、よこはま青年座・創芸の合同公演の「泰山木」をみた。あれは、昨年の十月だったか、甲府のやまなみの「泰山木」をも、ぼくはみていたのだった。

関東プロックだけで、半年余りの間に、同じ演目に、三劇団でお目にかかるということも珍しいことだった。

小山祐士の「泰山木の木の下で」という戯曲には、いま、競うようにして上演されるにふさわしい何かがあるのだろうか。しかも、近くは名古屋演集でも上演されるとあっては一そうその感が深くなる。実際何なのだろう

こういったものが、どの程度改められるものだろうか、そんな期待と楽しみもあって二週間後に上演された舞台を見た。たしかに努力のあとがうかがえた。わかりやすい大きなミスにぶつからず、初演にくらべ俳優の動き

萩坂桃彦

(労芸)

ひろく知られているように、この戯曲は、原爆の悲劇と戦争の傷あとを抒情的に、瀬戸内海の風物や人物に托して綴られた一種の絵模様である。テーマにそくして、はげしく抗告するというよりも、しつとりと溶けこませて余情を残すといった工合のものだ。その余裕のよなもの、折目の正しさといってもいいが、どこか礼節にかなったようなもの、それが、あの、ひどかった戦争や、むごい被爆の悲劇を、過去のものとして忘れさせようとする、こんにちの泰平ムードの中で、良心の咎のよくなこととして、劇団や観客の心にならうのだろうか。どうやら、そうであるらしかった。

しかし、問題は、ぼくたちの場合、それが名作鑑賞のようなことであっては困るのだった。この戯曲を起点として、どれだけ観客に対してアクティブになれるか、はげしい現実の中で、眠っては困りますよと揺り起す働きをこの戯曲で、どう果すか。実は、そこに、この戯曲故にの、上演での、厄介なむづかしさがあったのだが、それを、自壊作用のようなこととして、とりあげた劇団は、やはりなかつた。

かかすらえばかかすらうだけ、その術中に陥入るといふ仕組がこの戯曲にあつたからでもあろうが、その意味では、逆説的だが、土の会の舞台がぼくにはおもしろいことになつたのだった。小山戯曲と働くものの演劇がどうきり結ぶかという、演出者の命題があつたのだが(山村金平・倉多真の対談)、そうはならないで、つまり、きり結ばないで、むしろ対置させたぐあい、木下刑事を、一途な

まじめな人物として終始させ、コーラスを立体的にくみだてて、よほど社会的なドラマのニュアンスを色濃くしてみせたということでは、アクティブではあつたのだ。そこで、客席からの拍手は、素材な現実性をおびることになったのだ。

やまなみの舞台(中川恵司演出)は、前にも書いたけれど、俳優以外の要素をたつぷりととり入れて、抒情性をかきたてて別途に目的を果そうとしたかにみえる。現象的には、土の会と軌を一にするが、土の会を荒事とすれば、やまなみが和事であるくらいの違いはあつた。どちらも、これを、ヒューマニスティックな戯曲としてとらえようとしたことには、かわりはない。

それにくらべて、よこはま青年座・創芸の舞台(梨地四郎演出)は、正確に云えば、際立って、小山戯曲そのものに、近かつたといえる。そしてそこに現れた現象は、俳優を通しての、ギリギリのところでのテーマの把握という問題である。とくに、夫婦で、広島で被爆し、生れた子どもが奇形児であるという設定の、宿命的な木下刑事が、俳優(河住靖一)にとっては、主題の重荷が耐えがたいほどになつていたということ。

どだい、この作品での木下刑事の捉えにくさは、この人物のリアリティの捉えにくさとしても格別であつたようだ。横浜の舞台でみられた職業的なイメージや土の会での、実直志向型(よしだ・はじめ)は、それぞれ適切な一面ではあつたろうが、むしろ象徴的に、その全貌のごときものを語ってみせたやまなみの木下刑事(梅津幸三)が、ぼくには灼きついている。あの成功は、ほとんど偶一的でさえあつたと今にしてぼくはおもう。

また、例の、モグリの子おろしの、神部ハナという婆さんにしても、やまなみ(山岸英子)と土の会(立花由紀)が二十一才位、横浜創芸の矢島登志子が、初演の頃でやはり二十一才位。当然そこでは体当りということになり、被れて悔いなしで、そのひたむきな姿が客にむかえられたということも同じであつたが、この大役は、それぞれに若い女優さんたちに芝居根性を植えつけるようなことでは確実な効果があつたようだ。とくに矢島君の二十四才になつての再演の舞台は、部分的な完成への傾斜はみられたとしても、みごとにその性根の据つた出来栄えとなつている。こうして戯曲の人物に立ち入ってゆくのでは、まさに術中におちこむ感じであつて、挙

句の取捨も、すこぶる心許ない。小山戯曲の人物は、いわば水彩画のように彩られていてつつましくそこにトマツてみせることだけでも、実は大へんな芸ごとであることがわかる。土の会の木下刑事の同僚須崎刑事(大和ひろし)がその意にかなない、警察の小使(岩本浩平)などが、全くその意に添いかねたことなど、これは劇団のアンサンブル以前のこととしてありそうである。つまり、「泰山木」という戯曲の局限状況の問題としてもそれはある。

だから、「泰山木」によりせい、のつて見せたところでの仕事ではなくて、この戯曲の内奥そのものに挑み、血の出る切口をえぐりだしてくるような姿勢であつてこそ、ぼくらにとつても、「泰山木」は、素材たり得たとおもうのだ。

顔面半分ケロイドを残し、保育所の保母などもしてきて、しかも売春婦でもあるという、被爆した、若い「髪をたらした女」などの所在は、だから、どうしても、問いつめ、追いつめて明らかにされなければならぬことになる。この一人の人物をとつてみても、この戯曲との対応のむづかしさがわかるというものだ。

「卒直に云って、やはり芝居が消費的な藝
素を持って上演されていることに、不満を感じ
たのです。どちらかと云えば、名作と云わ
れるものが特にそうであり、観客を極めて文
学的な状態におき、対応する時間を消費的な
時間にしてしまっているのではないか、しか
も発想が極めて私小説的な発想であり……、
舞台の上の人間の真実性など、もうやはり私
小説の発想ではだめで、やはり集団的に、人
間対人間の関係の中でこそ、リアリティを発
見することが大事なことであって、その登場
人物の過去や思惑などにリアリティを発見し
ようなどというのは、小説の世界であって、
やはりそれは近代劇の残骸でしかないような
気がします……」

これは、断りなしに引合いに出した、全通
の芳地院介氏のぼくあてへの私信の中の一節
別な面からの「泰山木」などへの、いらだち
のあらわれとして、あたらししく、ぼくをとな
えているのである。

現象的には、「泰山木」などに対したのと
は、マ反対に、くつろいだ、屈託のなさで見
られた舞台上、京浜の新作、黒沢参吉作「ヤ
ケクソ組合顛末記」があった。(五月二十八

というのではないが、セリフや人物の腑分け
からそれを喜劇へと構築してゆくしごととは、
もう一押し、乾いて、メカニックである必要
があったとおもひのた。素材さや熱演や心情
的な傾倒は、どこまで行っても、喜劇には仕
上がらぬのである。

その意味では、警察官、監督署の役人、親
会社組合幹部の三つの役を、マイムで演じた
中沢研郎の演技に、この戯曲を練り上げてゆ
く手がかりをみたようにおもった。

喜劇性がストーリーにあるのでは、まだ底
が浅い。現実社会の機構にくいこんだ、階級
や人間のからみ合いがそれをつくるのでなけ
れば、説得力をもたぬだろう。

今日に息づくこのホットな新作が、じつは
あまりにも今日的につくらぬことを、逆に
ぼくはねがう。

紙幅はないが、最後に青年劇場にふれる。
演劇会議の広告とりで、未来社を訪ね、即決
とはならず、何となく呆んやりした状態での
掃りみち、あれは四月七日、農協ホールで、
「分裂気質」をみたのだった。黒沢氏も一緒
だった。

劇団協同の黒田利夫氏などが応援出演にか

目、川崎高津公民館で所見)。それは川崎も
ずうっと奥の、北部の、小さな公民館でだっ
た。軽音楽のバンド演奏のあとでもあったり
して、和んだ客席からは、さかんに、この芝
居にむかって、笑いやら拍手やらが、湧いて
いた。まだ、本も舞台も練上ってはいず、そ
のあたりで批評のごときは困るということも
あったかもしれないが、しかし、現に、こうし
て客にまみえたことでもあり、また、ほぼ、
この芝居づくりの根幹のようなものは出てい
たことでもあるので、とりあげてみたい。

話はこうである。電機部品の下請会社。待
遇の悪さに、ひよつとしたキッカケでストラ
イキが起き、組合ができる。組合ができると
会社はあわてて第二組合をつくり、第一組合
の全員解雇を宣告する。この第二組合への誘
いは、職制や暴力団をつかって、おどし、す
かし、たぶらかし、現ナマの誘惑などで、大
半が陥落し、元気の良い若者が八名ほど残る。
暴力団を使って、この八名を寮から叩き出す
ところから芝居ははじまるのだが、残った八
名の美事な結末は、別に思想的団結というの
でもない。首にされる理由がないというメン
ツと、会社のやりくちの卑劣さに対する腹立
ちと、乗りかかった船みたいな意地である。

けつけていた。

青年劇場は、脚本選定のいきさつなどでは
目くばりがきいていて、台本の抄本などを配
って、ひろい範囲から意見を徴する。そのこ
とで、公演の準備に入る頃には、こんどのレ
バはどんなものか、などは知れたるのだっ
た。

「分裂気質」は、吉開那津子の小説「世の
中へ」からの脚色(勝山俊介)ではあったが
殆んど、それはオリジナルな戯曲になってい
たようである。

十七才の少女が、電子工学の大企業の中で
試用者として、無邪気に働いていると、理
由もなくクビ切りを云いわたされる。理由も
なくというのは、勿論少女の側からの云分で
会社はそれなりの理由はあるわけで、入社試
験のテストにあらわれた、たとえば、文章完
成法の出題に、「私のお母さんは……」という
のがあって、少女は「お祖母さんの娘です」
(かの女は早くに母を失い祖母に育てられて
いた)などと答えていることが、異常であり
トランジスターの石などをつくる細密な仕事
にはむかない、という処理になる。

この少女は、宮城の農村から胸をはずませ
て働きに出てきた天真らんまん娘で、世渡

つまり、「ヤケクソ組合」というわけだ。こ
の斗いの中で、労働者本来の自覚と真実のた
めに気おくれせぬ勇気とにめざめるといふの
が戯曲の主題だが、この筋だての、テンポと
トボケ加減、課長や工場長、暴力団などの、
大分にカリカチュアライズされたあしらいな
どから、「喜劇」と銘うたれたわけである。
その限りでは、この喜劇は、かなりありふれ
たレパートルになっていたのである。

ぼくが問題にしたいのは、演出(細田寿郎)
演技のあらわれかたが、この「ありふれた喜
劇」の段階から、いかほどにも洗い上げてい
ないということなのだ。実は自身そのも
のは、生活といい、ある時期の人間をまるごと
と、そこに晒しているようなシリアスな事件
なのである。このシリアスな、云ってみれば
悲劇的構造をどう喜劇にくみこむか。

チェホフの「桜の園」が喜劇であったなど
と大げさにここでひき合いに出すこともない
が、何も、ピンからきりまで、ごたごたと喜
劇的であるのが喜劇ということでもないこと
は云っていい。テレビの画面で躍っているコ
ント55などの掛合は、もはやあれは笑劇です
らない。

京浜の「ヤケクソ組合顛末記」が、そうだ

りの計算など全くできない。よく喋り、誰か
れとなく話かけ、そして、なかなか茶目っ気
もある。

だから、少女に対する会社の、この仕打ち
は、むごい。王侯が奴隷の女をかきかして
気に入らなければ棄てさるといった類いのも
のだ。

ほんとうに、「分裂気質」なのか、という
ことになり、組合の書記長や女子寮の室長が
一しょになって、この少女の鑑定を県立の精
神病院にとりつける。それは副院長の門倉和
也だったのだが、「異常なし」と診断する。
——そして、この事件は裁判にもちこまれる
ことになる。

戯曲の構成は、この裁判の実況を展開して
ゆき、その緊迫した、云わば、肩のこる話を
ほぐすかのように、宮城にすむ少女の祖母が
裁判のあとさきを、地方民話を巧みにおりま
ぜながら、客席へ語り次いでゆく。そして一
方、担当弁護士坂上京子などを中心に、この
少女を守る組織が、雪だるまがまるびつった
てゆくように、運動そのもののセリ上りの状
態も見せ、真実のために、科学の正しさにお
いてくじけまいとする門倉和也の苦悩なども
別のこの戯曲での大きな部分となっているの

である。

演出(瓜生正義)は、この入りくんだ絡み合いを手きわよく処理し、問題点のあり様もかっきりと組みこんでいて、とくに、裁判の場面での捌きの確かさなどにそれが感じとれたのだが、逆に、そこから、セリフの応酬劇としての単調さをも見ることになりはしなかったか。

会社側の弁護士(西沢由郎)とか、本社の重役格(森三平太)などに演技者としての青年劇場の逸材たちを配しながら、生臭いリアリティは賦与することが出来ずにおわっているのである。

わずかに、私生活をのぞかせるスペースを与えられていたせいか、組合側の弁護士坂上京子(小竹伊津子)の切味のよさや、少女高野ふみ子(矢沢邦江)のその役びつたりの躍動的な演技や、室長(勝山春子)、労組書記長(上甲まち子)などの、役がらの手ごたえを見せたあたり、どうやら、この芝居では、男優群が押し切られたらしいというような妙な話にも落ちつく。

もちろん、ぼくは、そんなことが云いたかったのではない。云いたかったのは、祖母(浅井世津子)の語りくちのうまさに、どうし

てこの芝居がしめくられようとしたのか。それが舞台成果として、まともれば、まともただだけ、この芝居として見せてほしかったこと、つまり、あの仕打ちの中で、少女が何を感じ、長い孤独や連帯のたかいかいをおして何を身につけて行ったか、その、熱いもの

劇評

働きながら創るといふこと

第一九回広島演劇祭をみて——高田美智

五月十五日、十六日の両日にわたって、劇団木々の会、劇団月曜会、国鉄演劇サークル電通演劇サークルの四団体参加による、演劇協主催の演劇祭が開催されました。四十二年から自治体の援助がうち切られ、この演劇祭を演劇協独自の力で創りあげはじめ、今回が四度目だということ。その成長と創るものの意気こみに期待をもって、二日間四つの舞台を観ました。

まず最初に報告しておきたいことは、三十九年の演劇祭を最後にとどえていた電通サークルが、再建登壇したということ。木下順二の民話劇から八十二夜待ちVが

を飲みこんだようなものとして、ぼくらの胸に落ちてくるものを、結果的には、削ぐようなことになりはしなかったか、という疑念である。作品や舞台が、いかにも作り上手だっただけに、ぼくはこういう野暮を云いたいのだ。

選ばれていました。主要人物が三人ということ、単純な筋がきでその普遍性もあって、楽しく安心してみられる舞台に創られていました。主要な役をもった三人の意外なうまさもあって、電通サークルの再建に心から感激の拍手をおくります。この参加をきっかけに、職場から芽びいたこのサークルが、ひいては広島文化活動の強力な担い手として成長することに期待をもったのです。

これと対照して考えてみたいのは、演劇祭参加歴十年をもつ国鉄演劇サークルの舞台でした。現場労働者の創作劇AよせがきVは、

職場の合理化と過密ダイヤの過重労働から事故がおき、怪我した仲間が入院中に死んでしまった。死んだ原因は何なのか?そこで病院の中でも人員不足による過重労働に苦しんでいる仲間があるみに出る。一人の労働者の死によって、二つの職場の共通の問題にめざめAよせがきVを通じて働く者の連帯が芽ぶきはじめる!という一幕ものです。

職場の合理化と過密ダイヤの過重労働がも



たらす労働者の実態を、とにかく書いてみた一念からかきあげたと作者は云っています。その熱意には感服するのですが、どの登場人物も観念的で、体制側の合理化攻勢がどんなものなのか、具象化されていない作品の欠陥と、舞台づくりの指向が統一されていないことがあいまって、観客に充分納得のいく説得力がないうらみがありません。

無骨な丸太ソンの体で、荒けずりでもない野暮ったく泥臭くたっていい、一日のしんどい労働に目を落ちくぼませ、何かを求めて薄暗い観客席ですきっ腹にパンと牛乳をながしこみ、幕のあがるのを待っている私たちに、うん、そうなんだ!と心底云わせる芝居を観せてほしいと考えるのです。

職場内の身内での公演ならいざ知らず、一般観客にみせる場合、やむにやまれぬ気持でつくりあげた作品であればあるだけに、職場の実態を納得のいくものとして、舞台形象してほしかった。

今年で十年を迎えるという、劇団月曜会のA星をみつめてVは、私にたいへんな衝動を与えてくれた舞台でした。現在サークル演劇が、というより働きのながら創造を志向しているサークルが、一様にぶつかっている問題を一つ一つ具体的に提示してくれました。この土屋清の手になる創作劇は、この作品が作者自身の創造活動のあゆみの中から、書かなければならないから書いたその突きあげが、観ている者に強い感動を与える要素ともなったといえるでしょう。

国鉄労働者のみならず、広島の民間企業にも合理化の波が押しよせています。加えて新入社員教育、中堅幹部教育という、労働者が労働者本来の姿を見失うような教育によって企業に都合の良い人間づくりがすすめられている今日の状況を考えるならば、それだからこそ、国鉄労働者の戦後二十年の闘いの実践にたった思考方法で、観客にやむにやまれぬ一念を納得させてほしかったのです。

私が職場演劇サークルにそれを望むのは、無理な注文でしようか。一日の仕事に疲れた体を押しして、貴重な時間を潰りだして集まった者は欠席者に憎しみを感ずります。集まりが悪いから充分な稽古ができないと、ボヤキます。他の活動に奪われていく仲間たちのこと。これらすべてのうらみつらみVの混乱から、俺たちの演劇は

？の設問は続きます。そして、原因の一つ一つが解き明されながら、全体が発展の方向へ動きはじめます。

考えてみると、舞台からの問いかけに私自身も解答をみつけたそうと努力していたようです。舞台で演じる若者たちの真摯なエネルギーに胸うたれ、今日の退廃的刹那的な文化の氾濫のなかで、自分たちの求めるものを自分たちの手で一つ一つ削りあげていく。それが俺たちの夢だ！と云いきるひたむきな姿。そこには、人間の素晴らしさ、美しさがありました。

劇団木々の会A煙突のあるオアシスVは、劇団若手陣による芝居で、脚本の選定にも問題があったのでしょうけれど、何処にでも居そうな働く若者を描いていながら、その若者たちが躍動しなかったのは何故なのでしょう。A星をみつめてVは、劇団という特殊な小世界を描いているにもかかわらず、劇団にかかわりのない第三者の胸にも確かに息づきました。それはどこに起因するのか？創造活動の末端を担う今後の私の課題にも通じる問題です。

労働者を描いてあるから、ただそれだけに

に廃物利用されエリヤの器具としておさまっている。

然し、何よりも驚いたのは、客席である。八百人程の観客の半数位が、地区労関係の労働者であるのはうなずけるが、私たちが教訓としなければならぬのは、あとの半数の構成である。

それは、おいやん・おぼんと呼ばれる年配の人であり、小・中学生である。駄菓子や弁当持ちの人もいる。移動公演の中で、客席の前列に陣どった子供達が、ドラマの高揚部で走りまわったり泣きだしたりして数々な経験をもっている私は、小・中学生割引料金が印刷してある「いこら公演」のチケットは、何とも奇異に感じられたのだが、これは全くの思い過ごしであることが、舞台の展開とともに思い知らされていくのである――。

× × ×

開演間近に、五十過ぎの職人風の男の人がとびこんできて、前から二列目に陣どっていた、私の左横にわり込んで腰を下ろすと隣りの同年配の人と話をはじめた。その会話が突に面白く、しかも、私達のリアリズム演劇運動の本質をとらまえている。

□ 芝居は、前の席やないと、おもしろくない

寄りかかって創造活動を続けるのでは、そこから発展と展望も見出せないし、本来演劇のもつ観客に働きかけ変革する意義を見失ってしまうのではないだろうか。

木々の会は四十二年以来、A金魚修繕記V

劇評

地域に根ざした活動を見聞して

―劇団いこら『呑んだくれ』観劇記― 森本景文 (劇団 未来)

白い花を一杯につけている紀州平野のみかん畑を汽車がぬって、和歌山より一時間半……有田郡の商業の中心地、人口一万八千の湯浅町の駅頭におりたのは、五月十八日の夕暮れどきであった。

差別に反対し、民主主義をまもるために、演劇をもって、和歌山県下で巾広く活動してきている『演劇サークル・劇団いこら』の根城はここにある。

私は、食生活とくらしを守る有田郡市食糧共斗会議の主催する、劇団いこら公演『呑んだくれ』観劇のために訪問したのだった。

『呑んだくれ』は、昭和四十二年に劇団内の宇田貞三氏によって創作され、昭和四十三

A鳥V Aイルタック物語V等のすばらしい上演記録があります。劇団の古参陣の中にこの若手陣がどうくみ込まれるのか、この処女地の今後に期待したいのです。

(日本民主主義文学同盟広島支部員)

年一月に、和歌山勤労者演劇祭、その年の夏には、高野山での部落問題夏期講座で公演されたものを、更に五月十一日に御坊市で、五月十七日は地元湯浅町でと、連続上演を企だてられたものである。

小学校の講堂を使った臨時の劇場に入ってみて、殺風景な講堂が芝居小屋らしくなっているのに、まず目をみはった。

歌舞伎によく使われる三色の引き幕が、何ともしっくりとまわりの風情にとけあって、緞帳として下っている。地区労からのカンパだというハリゾント幕もある。アッパーハリゾントとしては、学校給食の空き缶が、見事

から――(と、とび込んできて、隣席の人に)まだ、はじまつたらんのけ？俺、風呂も入らんと、とんできたのに……。

× もう始まるやろー。おれ、この芝居はじめてやけど、これ、おもしろいけ？(面白いかな？)

□ おもしろい、おもしろい。今まで、二回観たけど……歌もうまいし、芝居もうまいし……立て役の役者はおらんけど、ええこといいよ。何ちゅうても、よう考えさせてくれるわ。……字野重吉な、あれら、こういう劇団から、よってんで。

× ふーん。実演(ドサ廻りの芝居のことか？)と、どっちや。

□ それ、これに決つとるやないか。おまえ観ておもしろいおもうたら、俺今日、帰りに一杯、おごつたるわ。おーい、はよ幕あけよ――(と舞台に呼びかける)

それに、呼応するかのように、場内が暗くなり拍子木の音が入り、幕と景を示す行燈に灯が入り、上手袖にたった解説者が、芝居の前提条件を語っていく。その語り口は、多少新派調で、始めは浮いたような感じだったが未解放部落の娘が、同胞に怒りをぶつけていく内容と相まって、観客の胸の奥の斗いの火

に次々と点火していく、導入部としての効果をあげていた。

そして、太鼓のリズムに合わせて、緞帳があげられ、芝居が始まっていく――。

× × ×
「呑んだくれ」(三幕四場)は、西演劇曲研究集でも、とりあげられた台本であるが、内容をご承知ない読者も多かるうと思うので、公演パンフより、「あらすじ」を引用してみる――。

昭和二十八年に和歌山県下を襲った、いわゆる七・一八水害は、有田川で特に大被害をもたらした。流れ土工『弓部石松』は、その復旧工事にやってくる、川の瀬部落に住みついた働らき者――。が、いつ頃からか、村の駐在である大上巡査の手先となって、喧嘩や交通事故の示談、朝鮮総連・解放同盟・労働組合などの情報あさりなど……酒にあけくれる日が多くなり、部落からも爪はじきされる存在だった――。

ある日、借りている家にボヤをだし、たまりかねた家主の『かね』から、立ち退きを言いわたされると、腹いせに、酒の勢いをかりて『かね』をのしる――。

解放同盟・川の瀬支部の信夫や源次は、石松を何とか立ち直らせようと努力するが、酔いしれた石松は、逆に信夫や、仲にはいった朝鮮人工工「高山」を「エッタボン」「チョウセン」と罵り、信夫はたまりかねて石松をなぐる――。

警察では、直ちに暴行傷害事件として、信太山自衛隊事件斗争の中心となっていた信夫を逮捕しようとする――。

だが、村人や地区労の結束した力で、信夫逮捕に失敗した警察は、逆に「石松」を捕えることで事件の結着をつけようとする――。

石松は、事ここにいたり、はじめて、誰れが本当に自分の味方だったかを知る――。盆おどりの太鼓の中で、石松はひかれていく――。

観客から「〇がんばれよ」と役者への声援がとぶ。アルコール中毒の「石松」が、駐在の巡査からもらったウイスキーを飲む場面では、「飲んだらアカンノ」「飲んでまたらしまいで――」「しっかりしい」という悲痛な観客の願いが乱れとぶ。舞台と客席は一体だ――。

石松は、差別的な言辭をはき、未解放部落

の人や、朝鮮人を差別している人であるのに、観客は、誰れが本当の味方で誰れが敵であるか、ということに敏感にかぎとっているのだ。終演後の交流会で聞いた話だが、交通警官の、未解放部落の人や、朝鮮人に対する態度差別はひどいものだ。単純な交通違反で取り調べられている時、住所や名前から、未解放部落の間であったり、朝鮮人であることが解ると、とたんに言葉使いまで乱暴になるというのだ。

誰であろうと人間として、尊ばれることが憲法で保障され、差別されるべき何の根拠ももたない人間が、国家権力を傘に着た末端の手先から、常に差別されるという現状の中から、警官というものの本質を見ぬいているのだ。

そのように秀れた観客のど真ん中で、演劇を創造し、普及している劇団「いこら」は辛せだと、うらやましくもある。

話を舞台にもどそう。西り演劇曲研究集会で、台本の欠陥のひとつとして出た問題だが――部落の人達が、警察の仕組んだワナに気づき、結束して立ち上っていく、モメントになっている――、その時点での夫の考え方や行動からみれば意にそわないのに、石松の妻

「みつえ」が、夫が警察に使われていることを部落の人達に告発していく過程での描写の不充分さが、観客の願いと観客の中にある、日頃の警察権力へのにくしみによって見事に補われている。戯曲を読んだ時に何とも納得のいかなかったことが、素晴らしい観客とともに隣りあわせて、舞台を観ている中では、すんなりと理解できるのであった。

『演劇は、観客とともにつくる』といわれ。その最も基本的なことを、肌で再認識させられた。現在では、特権階級のものになっている歌舞伎も、もとはと言えば、このような客席との交流の中で創られたものに違いない。

三時間近い舞台が終って、客席の電気がつき、劇団代表者の栗原さんの挨拶が終り、長い長い拍手――客席と舞台の織りなす熱気に押されて、しばらく立ってないような気になっていた私に、右隣の恐らく七十才に近いと思われる見知らぬ「おばん」が、「よかったね」と声をかけてきた。声にでない感動が、私の心を通り、私はコックリとうなずいた――。

開演前に私の左隣りで話していた□×氏が早速観劇評をはじめた。

□ どうやった？

× おもろかった。俺が、今晚一杯おごるわよ。よかったやろ。けどな、まだ演技が固いなあ。型にはまっているところがあるやろ

。もっと、普通にみえな、ほんまもの（本当のもの）やあらへんのや。とくに女の人の手の芝居は、ぎこちないなあ。

× おまえ、そんなこというけど、よかったでえ。

□ そら、よかったわい。せやけど、もっとええ芝居やってほしいから、言うてるん。

小生なんか、生半可な劇評をするより、適確であると思った。女性陣の演技についても全くその通りであるが、その上に蛇足をつけ加えれば、中年のおばさんを演じているのに指先にマニキュアをつけたままになっていることが気になった。先程の□氏の指摘を考える上で、衣裳やメイクの細かい点にまで観察者の眼をもってみつめていくことも一つの方法かとも思う。

× × ×
終演後のバラシには、中学を卒業して電気屋に勤め、劇団の照明を担当している最年少のヒトン君から、現在六十二才である、最年長の中村のおいちゃんまで……黙々とやっている。誰れが、どう指示するでもない。女性

軍は、小道具の整理やら、幕をたたむやら……と自分から積極的に仕事をさがしてやっている。美しい光景だ。

会場近くの栗原さんの家におじゃまして、劇団の方達と、明け方近くまで交流会――。

翌日は、稽古場を觀せていただく。劇団の藤本さんと、湯浅の町をあるいていると、幾人もの人達から、「昨日観たよ、よかったよ」と声がかかる。

あるいている私達の横を、自転車にのった数人の小学生が通りぬけていく――。「よかったよ、おぼちゃん」と声がかかる。

「おぼちゃん」とは、湯浅町職員組合委員長、劇団いこら運営委員・藤本第二さんの愛称だ。藤本さんに聞くと、その子供達は、稽古場が建っている未解放部落で、部落解放同盟が組織している「こども会」の会員であり、昨夜の公演を、不思議にも終始おとなしく観劇していた小学生のグループなのである。会場に入ったとき、小学生に大人の劇が観れるのだからと私がいただいた疑問は解けた。日常のたゆまざる努力の上に、次の世代の劇団「いこら」の要員と、素晴らしい観客をつくりだすための「こども会活動」があるのである。

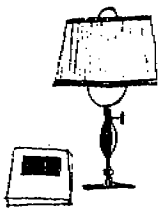
劇団「いこら」の代表者栗原省さんが、「演劇会議第八号」の劇団活動レポートの中で△劇団員の職場の斗争をきっちり踏んまえて有田の職場や地域の要求を、有田の労働者・農民、子供の言葉で芝居にして、有田の人達にみてもらいたいと思うのです。

「呑んだくれ」もそういうつもりでつくりました。私達は、「いこら」を有田の人民各層にとつてなくてはならぬ必需品にしたいと思えますV――と書いています。

まさに、その実践をこの眼で確かめて、すぐにも私達の劇団活動の糧にしていきたいと思う。

劇団「いこら」の仲間、とりわけ、素晴らしい観客の仲間、ありがとう。

(一九五九・六・十)



演出へのある疑い

— 関西芸術座「花咲くチェリー」を観て — 中谷 稔

(大阪自演連—劇作家)

1 公演に先立つ何か月前のこと——
「ウチの劇団が『チェリー』をやること、どう思う？」と、ある女優さんからきかれたことを思い出す。その問いかけにまつわるあいまいさを逆にききただして、僕なりに理解したあらましは次のようなものだった。

……劇団創立以来既に十一年。第二十四回公演（児童劇を除く）を迎えて、劇団の内外には固定的にイメージづけられた感の深い、いわゆる「閑芸路線」というものがある。

その路線、つまり、労働者の生活と密着しつつ、その解放に役立つ芝居づくりを目指して、これまで「はたらき蜂」「湿地帯」「書けない黒板」「おりん口伝」等々の舞台で、示してきたそれと、ロバート・ポルトの「花咲くチェリー」とでは、ひどく違ったものに受けとられはしないだろうか？……

その女優さんに見れば、気安さにまぎ

りだつたのだが——
だがその質問は、ある沈鬱さを伴う気がかりとなつて僕の記憶に残っていた。それは——そのような危惧があればなおさら、劇団内部ではこの作品の上演の積極的な意義なり意図について、先刻討議済みであり、その意図を実現させるための取組みが行なわれている筈だと、期待する反面の気がかりだった。

2

「花咲くチェリー」——云うまでもなくこの戯曲は、働く者を取り巻く矛盾にみちた体制を、その根底からくつがえそうとする課題の下に、その変革への主体的な参加を誘うことを意図するような戯曲では、毛頭ない。

現代のイギリスの社会的状況——それはまた「花咲くチェリー」の時代背景でもあるのだが——を要約してよく云われる「階級的な独特の身分制度をその内部に頑強なまでに秩序

僕は理解したいし、また、取り上げた以上は今日僕等がおかれている状況と本質的には変らない状況下の「高められた悲しみの生活」の横断面を、その解放に向う方向性においてではなく、登場人物の痛々しく生きる姿をありありと豊かに表現することによって、この状況下を積極的に生きるための否定的な媒介に供すべきだったと、僕は思う。

もとより、その大筋において演出者（小松徹）の意図は喰ひ違つていなかったかのよう

3

舞台（初日）を観た。それは期待に反して密度の薄い舞台だった。

チェリーを中心に、かなしく、ぶがいがなくきびしくおりなされる筈の心理的な葛藤が客席に迫つてこないのだ。それを極端に云い切れば、個々の演技が、他の個々の演技とからまり、もつれ、発展していかないもどかしさがあった。

なおも印象批評風に綴ることを許してもらえば、そのもどかしさの不満は、まず、チェリーを演じた酒井哲の演技に向けざるを得なくなる。西欧人的風俗を表現する技術の拙さはよくとしても、その大仰な外面的身ぶりか

づけた上で成立させている資本主義体制下の「福祉国家」——そのもとで、ポルトの「花咲くチェリー」における劇作的関心は、働くということの中に、経済的な必要性を除けば何の意義も持てなくなつた、ホワイトカラーの無気力な中年男を選びだす。そして、この主人公が自らの人間としての尊厳を保つために捨てきれないでいる果樹園経営の夢（彼自身その実現への努力を抛棄しているのだが——）のために、家族に向けての自己偽購を、更には痛ましい自己道化をも誘ひ、遂には家族からの愛のすべてを失うばかりか、自らを死に追いやるという——人間の余りにも弱い姿を、かなしく、暖かく、しかしそれなりに厳しく描きだしているのだ。そこには、この体制下でおしひしがれたある種の人間の悲しみの姿が写しだされるという意味において、確かな

今日性を見ることが出来る。
だからこそ、近作の「わが命つくるとも」（テアトロ五月号掲載）においても一貫しているポルトの、社会的な参加への姿勢で云えば、小市民の保守的な立場を一步も踏み出すことのないというその限界を承知の上で——つまり「閑芸路線」からはみ出される運命にあるこの作品を——あえて取り上げたのだと

閑芸の過去の舞台において、劇的主題の中に含まれる政治的テーマが色濃くあり、他方、観客の期待意識の中にそれと合致する部分が強いときに、始めて舞台がそれなりに高く評価されてきたのだとすれば、いわゆる「閑芸路線」上の演劇は、政治に恥じなければならぬ。

しかも、僕等を取り巻く政治状況が——それに対応する文化状況また——日増しに複雑化しつつあるいま、そしてこの先、僕等の演劇は、政治的課題を含めた劇的課題を、なお一層、明快に、強く、打ち出す必要があるのと同時に、この状況下で疎外されつつある人と人とのかわりを、正しく秩序づけ得るものとして生き生きと表現すること、を強く要求されているのだ。つまり、主題を明確に伝えるすべと、登場人物の豊かな実在性を示すすべとを、真実をあらわにうし出す命題の下で、早急に統一的に探求しなければならぬ。所以が、そこにある。

そういう意味においてであったかどうかは推察できないが、現に「花咲くチェリー」上演の課題意識の中には、過去の閑芸における演技形象上の不充分さを反省し、「魅力ある人間像」（註、公演パンフレットによる）

を形象するための努力目標が、切実なものとして大きな比重を占めていたようだ。

4

「花咲くチェリー」に戻ろう。観劇後、僕のもどかしい思いは、演出への色濃いつい疑いを呼び起していた。

その疑いとは、一つには、戯曲で展開されているチェリー一家の生活の細部への丹念な観察に、不十分さがありはしなかったかという疑いであり、さらに、その観察を創造に転化させるためには、当然、演出者および演技者の日常的な生活体験への（疎外からの回復動かせる）きびしく新たる点検を抜きにしては形象の真実性を獲得し得ないものである以上、演出者が演技者個々に対して、その観察と点検を促す方法を、どのように探し求めた駆使したのだろうかという疑問に繋がっていく。それは、今回の公演に限らず、過去幾つか観た閑芸の舞台に、きまって不足していた演技のリアリテイを、どう回復していけばよいのかという問いに対する、僕なりの一つの提起でもある訳だ。

もう一つの疑いは、チェリーを中心とする登場人物相互間の、「愛のつながり」を回復

らぬ真摯な努力とその集中についてはうたれはするが、ありながら、他の演技者との対話的乃至動作の融合、対立、葛藤の際にもみられる不安定さが、この舞台でもゴゴチなく見られたこと。さらには、この公演での収獲の一つであったと思われる二人の新人トム・斎藤寺忠雄と、キャロル・小西由貴の新鮮な演技の中で、時として単なる風俗的の形象が、必要以上に誇張され、浮き上った演技を誘ったこと―等々については、何よりもそこにさきふれた意味での演出上の欠陥があったと指摘せざるを得ない。

5

この文章の始めで、僕はこの戯曲を取り上げたことに対する劇団内部の、ある不安のことについてふれた。あとで聞けば、ここ数年来、児童劇運動を精力的に取り組んで、という劇団事情の中で、直接の創造上の制約もさることながら、経営上の困難性もあって、いま、閑芸内部では労演例会にのせ得る舞台は別として、いわゆる本公演活動なるものを全体の演劇活動の中で、いかに位置づけ、いかに実践するか、苦慮せざるを得ない段階にさしかかっているという。逆に云えば、全体の演劇活動を、さらにどう発展させるべきか

せんとする総過程―それは、遂には絶望に迫いやられるが―を戯曲の展開過程にそって、個々の人物相互間に細やかに生き生きと影響しあうさまの形象を、個々の演技者に、どのように、どれほど、追っていったのかという疑問だった。

叙述の順序が逆になった思いもないではないのだが、ここでジュディ役の綿岡好枝の好演を一つの例にとりあげてみたい。

一步誤れば類型的な演技を誘いがちな、歪められた性格を持つ役である。だが、役の性格を適確に示しつつ彼女はそうは演じなかつた。そこには、テーマとのかかわりにおいてジュディの生活の周辺の細部をみつめる眼の確かさがあり、さらには、演技者自身がジュディという娘を脳裡に描きふくらませていった過程で、自己と役との間に常に一定の距離を保たせながら、なおその生活の中身と形式に対して強く感じたであろう悲しみやあわれみ―だからこそ私はこの役を演じるのだ―とも云いたげな感性的な迫り方があったのではなからうか。

だからこそ僕は、彼女の舞台から、ジュディの意識下にある「痛み」までもを感じることができたのだと思う。それは決して、舞

についても、重要な局面にさしかかっているということになる。

それを推察し得るものとして、公演パンフレットで小松徹が次のようにふれている箇所がある。

「人間疎外の時代、拡散の時代と現代を規定する人がいます。ある意味で、それは射ていると云えましょう。そして劇団もその範疇の内にあります。小沢栄太郎さんの俳優座退団事件があつてから、改めて新劇団というものの成り立ちについて論議がひとしきり起りましたが、閑芸もまた現在その成り立ちの根源について問い訊きなければならぬ時期にあります。その詳細については、そういう場でもないで融れませんが、魅力ある人物像を形象し得なかつた事実ひとつをとってみても、具体的な創造の場での集団的なせめぎ合いが不足していたことを認めざるを得ませぬ。」

「花咲くチェリー」は、そういう意味合いで、まさに象徴的とも思われる戯曲の取り上げ方であつたと僕は思う。一見「閑芸路線」上からは消極的に過ぎると判断されるかも知れないが、実はその創造の底辺において、積極的な実践に転化し得る可能性を秘めた取り

台から客席へ強引に押しつけていく―或いは自己と役とを零距离に等しくなるまで引き寄せて熟演するようなつくり方ではなかつた。

閑芸の演技陣の中では数少ないと思われるこのような形象への方法が、先の第一の疑問を解く手がかりの一つの実践例であると思うのだが、劇団内での評価は果してどうなのだろうか？しかし、他方で皮肉な眼の向け方をすれば、ジュディに関しては舞台の始めから終りまで家族への対し方が一貫して変らないという戯曲の設定のために、全体の中でそれなりに充実し安定した演技部分を構成し得たのかも知れない。

ということは即ち、第二の疑問が生れてきた根源に移る訳だが、引き続き個々の演技を例にあげれば―イザベル役の河東けいの場合高められた悲しみの場面での演技に美しさを感じることができたが、一貫しての演技形象に細やかなふくらみが得られなかつたこと―。(意志的な強さが勝ち過ぎた欠陥についてはイザベルの緊張の読み違いがあつたのだろう)あるいは、ギルバート役の寺下貞信における、戯曲全体の中で占める自己の役の位置づけの確かさと、その具像化に際しての性格描写の巧みさ(その方向性でのいつに変

組みであつたと評価したいのだ。

しかし、自己を取り巻く小状況を閉塞的に受けとめる時、創造のない手は、ともすれば心情的に傾斜し易い傾向があるように「花咲くチェリー」において演出者が意図した「人間どうしの愛に充ちた繋がり」の回復」という課題への接近に際して、そういう側面がなかったかどうか。極端に云い切れば、日常生活の細部への徹底した観察のみがとりえの戯曲の特殊性をおさえ切れず―ということ、それを素材として「現代」へ積極的に迫るために必要な、この状況下に生きる自らをも含めた、創造への営みの源泉となる日常生活へのリアルな、鋭い、微視的な観察をなおざりにする側面がなかったかどうか……。

蛇足をつけ加えれば、ここまでは演技者のここからは演出者の領分でもいうような自らを安住させる演出態度がなかったかどうかと「集団的せめぎ合い」の実体を掴めぬもどかしさがそういう問いを切り返したくなるのだ。なお、念のために註すれば、微視的な観察の必要は、この舞台の如く「近代劇」的形式で貫かれている創造の場合にのみ必要なのでなく、舞台の真実性を支える基礎的な創造態度なのだ、僕は信じている。

劇団通信

劇団ひまわり

○市内のうたごえサークルなど幾つかの民主的な団体に呼びかけ、安保破棄・沖縄返還をテーマにした合同公演を実現すべく、目下準備をすすめています。今までもこうして共同で仕事をすることがないためかなりの困難が予想されますが、七〇年を前に是非成功させねばと、各団体の役員が企画をすすめています。

○来年七〇年は、劇団ひまわりの十周年にあたります。この年を契機に内外共に飛躍させるべく、団をあげて学習活動にとりこんでいます。

○昨年暮より県下の三劇団（福井劇の会・福井青年劇場・劇団ひまわり）が集まって、演劇懇談会をつくり毎月一回定期的に会議をひらいています。（しばの）

△福井県武生市緑町九・井上方V

劇団からつかせ
現在「ピカの蔭から」の再演、七月二七

日浜松公演をかわきりに地域で公演をうため稽古中。八月四日～五日上演を予定。第五期生の発足が六月一四日、「ベトナムの炎は消えない」の上演と、「ピカの蔭から」を同時上演の予定。

七月五・六日、東海ブロックセミナー日浜松開催を準備中。

来年度五～六月の公演に「北方の記録」の上演を内定。その後、児童劇を上演する。

△浜松市板屋町三二五V

劇団月曜会

★広島演劇祭に参加した「星をみつめて」の再演を検討中です。なお、戯曲の余部が五〇部ばかりありますのでご利用を。一部百円。

★六月二（土）三（日）と、広島で中国プロットの創作学校を開きます。福山と広島各劇団で実行委をつくらせて現在準備中。

★八月五日夜、広島県の県立体育館で第一五回原水禁世界大会記念の文化集会が開かれます。只今準備台本を作成中。広島演劇サ西リ演各劇団にも協力を要請する予定です。全国の仲間が、世界大会めざして沢山集まって下さるようお願いいたします。

△広島県北千二百目二二二八V
演研てくのぼうの会

編集くろうさま。てくのぼうの会は、春の第二回本公演を左記のように決定して、現在追いこみ中です。

「根っ子」ウエスカー作・柘植洋演出
六月二八日六・一五時・二九日一時・五時
南図書館ホール。

普及面がおくれていますので、一千名をめざしてがんばる決意を新たにしています。

それから、名古屋演劇八月例会に地元劇団（名劇協）合同による「ベトナムを見て」に参加することを決定、話し合い、キヤスティングなどを続けています。

ともかく実動一五人程度の会員で、やるべきことが多いので苦勞しています。

△名古屋南区大機通三二二二V

関西芸術座

★「牛鬼退治」（かたおかしろう・作 道井直次・演出）

五月にスタートをして来年三月まで、小学生を対象に劇場や学校を巡演する。六年ぶりの再演で、教師の要望によって再演が実現した。五月下旬より六月上旬にかけて

米子・倉吉・呉などの地方公演も行なう。

★「仏さわざ」（東川宗彦・作 岩田直二・演出）

九月の大阪労演の公演に決まった。農家を舞台にした喜劇で、あくの強いエネルギーッシュな作品である。同じ作者の「はたらき蜂」以来久しぶりの作品である。

△大阪市阿倍野区文の里四一八一六V

劇団すがお

いつもいつもご苦勞様です。第一一号は小林論文、赤松レポートとも大変役に立つ記事でした。劇団でも学習会を一度ですがもちました。これからも、実践に役立つ編集をお願いします。

《活動報告》

□「夕鶴公演」・桑名市民会館自主事業、照明展協賛特別公演・六月五、六日PM六・三〇。

□劇団後援会友の会が組織化・劇団五ヶ年計画の一環として後援会組織劇団友の会を結成しました。その例会として六月六日「夕鶴」を公演しました。

□第三回文化団体フェスティバルに出演・市内七つの文化団体が参加して行なう共同

発表会です。六月八日（日）PM一・三〇桑名市民会館、劇団は「列外三名」をもって出演。

□「夕鶴」の移動公演・七月五日（土）真井地域公演・北勢中学校、七月三日（日）県演劇祭・県文化会館。

△桑名市大福二二九一 後藤和義方V

劇団信濃小劇場

六月一日に、一九六九年度劇団員総会をひらき、黒沢議長を招き二時間ぶつ通しで話して頂き、今年度は創造集団としての確立を中心課題とし、今秋公演、来春七〇年一斉上演では移動公演を劇団拡大強化計画を完遂し、文化戦線の先頭にと確認し合いました。

今秋の公演作品は、東リ演の各劇団のご協力を得て現在選定中ですが、正直なところ我々の力にヒタリと合うものがなく、創作の必要を感じさせられております。

栗木英章作「はだかの王様」を次の三会場で上演。四月一九日△合唱団やまなみ発表会△厚生文化会館（三三〇名）・五月一日△日△松本労演交流会V義民会館（六〇名）・五月二四日△長野県内労演交流会V福祉

会館（六〇名）、今まで要請があってもできなかった文工隊小編成公演が、今年度初めてできたことは大きな励みとなり、各地とも好評を得ました。

劇団事務所に電話を新設しました。〇二六三四（三）九一〇六です。

新しい仲間が増えつつあります。創造理念と劇団中心の生活を知ってもらうための研究期間を設け、上記「はだかの王様」上演の中で二名の研究生が増えました。三月に一名、四月に三名、五月に二名と春の募集もますますでした。

「演劇会議」も八部から二五部に定期購読者が増えました。長野、上田地域にも定期購読者ができ、長野県内で五〇部近くに近づいています。

総会前日五月三十一日に、松本労演と共催で演劇研究会を開き、黒沢議長を講師に約三〇名が集まりました。（横山伸記）

△松本市深志二丁目六一八V
劇団生活舞台

私も今年七月劇団創立十五周年を迎えます。八月十七日、創立記念としてH・Bゴーゴリ原作・徳永瑞夫脚色「外套」を公

演じます。劇団員一同元気に張切っています。それにやっとな、本当にやっとなという感じですが、西リ演に加盟し演劇に於ける福岡での役割を痛感しています。

〈福岡市警署二一九一八〉
劇団やまなみ

二月一八日、六月本公演台本、小林金三作「ベトナム日記」より劇団員の中川恵司が脚色「ベトナムからの便り」、同じく劇団員の小谷道雄作構成詩「沖繩からの手紙」それに「ベトナムを見ている」が決定した。稽古と平行して「俳優の仕事」について学習会を行なう。

五月二日、第二期卒業公演「エントツのあるオアシス」動員三五〇名。表方裏方すべて卒業生自身の手でおこなわれた。総会の方針にもつき早くからカリキュラムを作成し、計画的に教育したことが大きな成果を生んだ。五月九日、劇団員と卒業生の話しあい。脚本に対する抵抗、劇団に対する要望など率直に出されたが、劇団に入ってからよくなったという意見が圧倒的、今では劇団の大きな力となって活動している。

七〇年の前の年として、このだいじな問

題をもっと突込んで良いものにしたという事で、六月公演に「ベトナムからの便り」「沖繩からの手紙」の二本にしぼることに再度決定。公演日六月一四日、一五日の三回公演。尚七月五日、同じものを市外市川大門にて公演の予定。

〈甲府市青沼一八五・梅津方〉
劇団労働芸術劇場

東西リ演の仲間の皆さん、お元気で活躍のことと思います。私たちの近況等をお知らせします。

〇二月「制輪子物語」(鈴木元一作)を無事打ちあげました。

〇三月二三日九段会館において、三光労組大決起集会に、構成劇「車の斗い」(荒井敬亮作)をもって参加、三光労組その他多くの全自交の仲間と共に出演し、二千名の大集会は大成功をおさめました。

〇五ヶ月間の研究期間を終えた六名の新人が正式に劇団員に迎えられ、一同大張切りです。

〇現在、舞芸小劇場との合同公演で、第九回公演「硝煙なき戦場」(青木慧作・荒井敬亮、渡辺波江共同脚色)の稽古に突入

しています。公演日は予定よりおくれてしまいました。最終的に次の如く決まり、一同頑張っております。

九月二六・二七日川品川公会堂

九月二九・三〇日豊島公会堂

△東京都品川区南大井一―一四―一六V

劇団「風」

働く仲間呼びかけ、よりよい文化を皆で育ててゆく「仲間の小劇場」に、多田徹作「花刃」を発表、七月下旬予定。

△大阪市東成区中道元町二一九六

八坂神社内V

劇団静芸

六月二四、二五日午後六時より静岡市県民会館において、浅見祐治作・京浜協同劇団潤色の「メコン・デルタ」を上演致します。劇団は目下(六月五日現在)その成功のために全員力を尽して闘っています。

運動としての基本的方針は、当面七〇年をめざす第一弾の気組みをもって、

(一)静芸はこの何年かの消極性を漸回復しつつあるが、普及の第一の観点に、普及の行動を最優先し普及にあたっては大胆卒直に、文化芸術の斗いも今や反動と民主主義

勢力の妥協のない苛烈な斗いであり、敗けられないものであることを訴え、諸斗争と

結合し、公演斗争も皆さんの力で必ず成功させなければならぬことを確信をもって訴えること。行動による自己批判を普及の中で展開する必要性です。これは各方面に共感をもって迎えられております。

(二)次に「メコン・デルタ」上演の意義を、現情勢の中心の中で正しく位置づけて、婦人・青年を重点に「ベトナム人民支援演劇行動」を前面に据えて、今こそ支援を、と、安保沖繩を闘いベトナム人民に応えよう、と矢張り正確なベトナム現勢を話し「メコン・デルタ」を見る斗いとして判ってもらうこと。

(三)特に普及に当って「大学立法」反対の斗いをもりあげて行く全民主勢力の統一の力に、自主的民主的演劇の果たす役割は、敵としてのトロツキストの輩の「情緒化」「衝動化」に誘われた退廃文化支配に対するトリデであることを確信をもって訴える。

(四)これら二のことを深めていくためにはケイコの中で情勢の勉強、理念の学習を重視し最終段階まで団員の教育に努力する。行動

！学習！学習！行動！

以上、これらの方針がどれだけ深まり発展するかです。この自覚が必ず舞台上の成果に現れなければならないと思います。

第三七回(次回)公演予定は一〇月二八二九、三〇日県民会館で、伊藤与四郎作「さよの苦汁」(民主文学三月)を会津悌一の脚色で上演、これは静岡相互銀行の斗いをえがいた作品です。

七〇演劇行動には作者として、小島真木会津悌一が参加します。

△静岡市昭府町二八九―二V
劇団未来

前号で三月より二班活動の予定と報告していますが、劇団内外の情勢から全員が自立劇団合同・大阪労演二〇周年記念公演「怒りのウインチ」(長谷川伸二作・寺下保演出)に参加しています。六月二七・二八日夜サンケイホール。

毎土曜日は一―号に掲載された、こばやし・ひろし氏の論文を討論していますが、日曜祭日も休みなし連日稽古のため、参加状態はよくありません。公演後もっと深めてゆきたく考えています。

小型公演の出演依頼も多いのですが、現在の劇団の力量では公演体制に入るとほとんど参加できない状態です。

△大阪府茨木市駅前一丁目九―二―V
人間座

東・西リ演のみなさん、編集部のみなさん連日の奮闘ご苦労さんです。

わたしたども人間座は、昨年一〇月京都府教育会館の火災によって、劇団の事務所・稽古場を一切の道具類ともに全焼してしまいました。一時的に一定の経済的困難を生じましたが、みなさまにもご心配をおかけしましたが、さいわい「藪の谷に」も以後道具類など一切新調の上で、巡回公演を重ねています。どうかご休心下さいませよう。

△京都市北区紫野・大徳寺電停前
京都視力センタービル四階V

劇団虹の会

(一)虹の会小公演／六月二―日釧路市公民館
林黒土作「筑豊の少女」宮本研作「人を喰った話」

(二)辺地公演／八月中旬(釧路管内浜中町の予定)多田徹作「雨姫」

(三)第一五回公演／一―月創立一〇周年記念

として釧路市公民館を予定。

北沢杏子作「アーニクローニの歌」

（虹の会十年史誌の出版（九月頃）

）大道具倉庫の建設（一〇月頃）

劇団いこら

昨年暮からこの春にかけ、部落差別現象が相つぎ起っています。湯浅町内でも、先進的な組織労働者で、解放運動にも十分理解がある筈の青年が部落差別をしました。労働組合運動が経済主義的傾向におちこみ差別の根源と正しくたたかおうとしない状態の中で、こうした差別事件がおこるのは不思議ではありませんが「いこら」にとつてやはりショックでした。

私達はこの問題について討議の末、急遽予定変更し、宇田貞三作「呑んだくれ」を御坊市公民館（5/11）と湯浅町小学校講堂（5/17）で公演しました。湯浅公演は町内に熱気を呼び作品についての賛否もひとしおでした。宇田はこの批判にもとずき更に作品に手を加え七月再度公演する予定。朝鮮語講座をその間続行。尚地元子供会へ定期に紙芝居、お話、歌などもって入りはじめました。

△和歌山県湯浅一五三四 栗原方V
劇団四紀会

とりいそぎ上半期の活動、下半期計画と神戸の演劇状況を報告します。

上半期の活動Ⅱ一月／青年の旗びらき「沖繩は叫んでる」再演、四月／第六回勉強会「火山島」「人を喰った話」五月／劇団四紀会主催、働く者の演劇教室第一回卒業公演「獅子」

下半期活動計画Ⅱ○小林、黒沢論文をめぐる学習会○第一三回公演準備／候補作「神通川」「神島」「分裂気質」○創作劇の完成○小劇場運動（土曜劇場）の推進／第一回公演七月○兵庫県劇団協議会（兵劇協）第二回合同公演準備。

神戸での演劇状況Ⅱ三月／劇団わらべ「花咲くチェリー」五月／（姫路）姫入座・混沌合同公演「泰山木の木の下で」五月／神戸自由劇場「椅子はどこだ」六月／神戸ともしび「島」六月／働く者の演劇祭（国鉄第二六回演劇祭・職演連第二回合同公演）滝ノ内吉一「三月目の歌」神戸職演連合同、岩本敬作「過熟ダイヤ」岡山県職演集。一九六八年四月、兵劇協（県下一六劇団）

が生まれ、第一回合同公演「大正七年の長い夏」Ⅱ神戸の米騒動Ⅱ県下七ヶ所で公演し、約七千人に普及し、この創造普及両面にわたる成功は各劇団に自信と誇りをひたらし、神戸では小劇場運動（土曜劇場）となつてその成果はみのりつつあります。

（追記）小林論文は大きな刺戟剤になり一号は取り合ひの状態です。私たちが今必要とするものがその中にある場合、このような現象が表れるのかと驚いています。

△神戸市長田区長菜町六一八一大西方V
京浜協同劇団

○一九回公演「ヤケクソ組合頼末記」は四月二五日友の会公演以後、本の改訂を加えながら五月一日鶴見、五月二八日川崎北部と上演、六月二八日には中原、七月二日には川崎中央を予定。地域の実行委員会をかため地域の労働青年の歌ええフォークソングや、構成詩バンド演奏、絵画写真展等をプログラムにふくめた文化祭としてとりくみ、新しい展望をつくっています。

○六月一日労働会館にて、一六期生が自主的に中間発表会をひらきます。

○二〇回公演（一月下旬・労働会館）

のレポートリは七月五日決定の予定。これにむけ黒沢参吉が「ただ、海燕だけが」（戦前地方劇団の活動を劇化）執筆中。

○稽古場建設は六月現在土地七〇坪を取得、八月着工一月完成移転の予定。劇団総ぐるみの募金運動にとりかかりました。

○七〇演劇行動の戯曲執筆には、黒沢のほか城谷護、堤次郎、南雲よしえの若手が参加をきめました。

○一〇周年を記念し、稽古場建設を運動にするため、八月目標に「京浜協同劇団史」を出版の予定です。

○おめでた。六月一日、藤井康雄（四期）丸山よし江（一六期）細田の媒酌で結婚。

△川崎市上平間二二七五V

大阪協同劇場

去る五月二二、一九、二六日の三回、御堂会館小ホールで月曜劇場公演として東京演劇アンサンブル上演台本「ベトナムを見ている」一五景より八景を、友好劇団、学校、職場サークル、個人等の協力を得て上演しました。あわせて会場ロビーで、日本ベトナム友好協会の好意により、ボール爆弾、飛行機の破片、ベトナムの写真の展示

を行ないとも好評を得ました。

次期公演は現在討議中ですが、七〇年安保に向けて創作劇を秋に上演すべく準備中です。

なお、前劇団事務局一辰巳よしのぶは、五月一八日付で除名しました。現在の劇団事務局は左記のとおりです。

△吹田市津雲台五一―一五D五三―三〇七
演劇集団土の会
奥井一雄方V

五月二三、二四日の第三三回公演「泰山木の木の下で」が終了しました。観客からは好評の意見がはねかえってきましたが、作品の中からわたしたち自身のものを充分くみつくしきらなかつたららみが残ります。

わたしたちの願いをこめたコーラス隊の登場には、強い賛意が示されましたが、そのことと舞台の進行とが呼応して、もうひとつ強い力をお客さんの心に届けることが必要だったのだと思っています。

「泰山木」がすんで一息いれる間もなく七月五・六日の小公演「女たちその光のかを」の仕事に突入しました。経験のあるものも、まったくの新人も劇団総ぐるみで

必死の状態の毎日です。小公演は今後もっと整備したいと考えていますが、再演によって確かな手応えのある舞台をつくり、確実に観客と具体的に結びつくことで、運動体としての存在と意義を明らかにしたいと思います。併し、なかなか大変です。

秋の第二四回公演は、十一月一四・一五日豊島公会堂で「なまねこさま（仮題）」ときました。「椅子物語」「女たちその光のかを」の矢野喬の作品で、「東京金魚風土記」につづく東京を描く創作劇になります。

問題といえは、七年目の東働演がたしかに〃曲り角〃にきていることです。経験主義的なすめかたでは、もう新しい価値を生むことができなくなっています。土の会がどういう方針をもつか、迫られているようです。

△東京都港区西麻布四一―五―九V
上野市民劇場

全国の仲間皆さん、ご健斗のこととします。私たちが仲間の皆さんの活動に励まされて奮闘しています。一号の南大阪演劇研究会の活動報告は感動しました。共

にがんばりましょう。

○活動状況 日本初期の目標の創作劇「ホラ太陽が笑ってる」は改稿作業の遅れ、上演体制の不備などにより延期となり、代って演劇会議十号掲載の「テントからの報告」を六月十四日に上演します。今公演は地域の幼稚園で不当解雇された労働者を守る闘いと結合して、公演実行委員会の取組みによって上演されます。私たちは「テント……」がこうした労働者の支援にこたえないの武器となるよう、小人数ながら力いっぱい稽古に励んでいます。

○これからの活動計画 (1) 研究生制度の実施、七月十五日より。(参考資料ご意見をお知らせ下さい) (2) 名張演劇サークル(新に生まれた隣接地区の仲間)と合同で名張市で七月十三日に上演(天満のとらやん) (3) 伊賀地区平和友好祭取組みに参加。○おめでたII劇団の女性メンバーの最古参? 張場明子君この三月に結婚し、早や二重のおめでたで十二月に赤ちゃんが生まれる予定。

八三重県上野市丸ノ内中央公民館内V

青年劇場

(1) 東り演の皆様の後援のもとに、第四回東京公演「分裂気質」も無事終了。誌上をかき手より厚くお礼申しあげます。東京労演の例会、東京地評や区労協の推進後もあって終演後今までにない多くの処で合評会がもたれました。働く人たちが、いかに舞台から真実の統一、団結、変革の形象を見たいと願っているかを痛感、それに応えていかなければと深く思わせられました。

- (2) 東京公演終了後、四月二四―五月二日群馬地方で「オホソックの女」を公演、現在北海道各地で五月六―六月二四日引続き同レパートリーで公演を行なっています
- (3) 七月には西日本労演九州ブロックでの「真夏の夜の夢」にとりくみます。現在演出の瓜生正美は、九州各労演のシェイクスピア・ゼミナールの講師に出向中です。
- (4) 第五回東京公演「若者たち」(山内久原作、堀口始演出)の日程も二月九―三日、厚生年金ホールときまり、その準備もすでに始められております。
- (5) 在東京、公演班相呼応しながら、一九七〇年安保条約廃棄へ向けて、私が安保体

制をどうとらえ、その状況の中で私が演劇と劇団をどうとらえているのか、現実と創造の関連をさらに深く見つめようと今、学習討論を展開しています。関連して報告しますと、六月一九日には私たちが参加している新劇人会議でも、安保条約と今後の展望、俳優の自覚的創造と政治活動、ベトナム・沖縄・本土の軍事基地と演劇運動のテーマを柱に報告と討論を行ない、芸術家として安保体制を政治を芸術を、どのようにとらえるか、たしかめ合おうとしています。

八東京都練馬区下神井一―四九二V 演劇集団 息吹

○四月五月。「天満のとらやん」東川宗彦作「嫌われ者」民謡構成「日本の歌と踊り」の三本を中心に、寸劇、民謡などを組合せて小型移動、十一回。(大阪民主商工会、大阪民青劇場、奈良青年文化祭。堺、神戸、北大阪、東大阪などの地域公演) ○六月大阪自演「怒りのウインチ」に参加 ○七月八月。「河内音頭」「古念仏踊」の仕込。研究生訓練と西り演総会参加。八月三十一日は劇団総会。

(大阪府八尾市堤町一〇四〇)

東西り演・道演集のうごき

(1) 東り演創作会議

四月二二、二三日伊豆多賀の長浜旅館で開催。はぐるま、演集、てくのぼう、すがお、静芸、よこはま青年座、京浜、土の会、舞芸小、仙台小から二〇余名が参加した。

一二日夜は冒頭、「ゼロの記録」で第四回小野宮吉戯曲平和賞をうけた、大橋喜一氏から「戯曲をかく仕事について」話して貰う。戦後、自立演劇運動のなかで、東芝の職場のかき手として登場、「芽生え」いらい一貫して働く人間の視点でドラマを追及してきた大橋氏の体験を中心にした話は、非常に豊富な教訓を提供してくれた。この話の内容と、大橋作品のドラマツルギーの核をつくっている「創作についての覚書」は、なるべく早い機会に本誌に掲載してほしいというたくさんの要求があり、大橋氏も承諾してくれた。

つづいて黒沢から、「こだま」(木村次郎+群馬中芸)、「ピエールとリュース」(風見

鶏介+群馬中芸)、「マージャン野郎」(栗木英章+てくのぼう)、「津軽謀叛人始末」(作間雄二+弘前演研)、「薩州行水御手伝著書」(武藤道保+岐阜戯研)、「山かげの水田」(冬海)、「ハスの実の家」(福井劇の会+江藤寛他)、「オホソックの女」(本山節称+上演・青年劇場)の話について簡単な感想を付して報告。

こばやしからは、六八年度の東り演創作劇は量的にも少く、二ケタの作者がいながらその力量を発揮した作品も乏しい。東り演運動が創作劇運動であるとの認識が、東り演でも出発時より稀薄になっていないか、各劇団もまた創作の問題を自分たちの劇団のワタしにかつかんでいない傾向がある。専門作家たちが、ますます誰にみせるのか不明な作品をかいているいま、新しい創作劇運動をおこすことはきわめて大切だと強調した。

一三日の午前は、前夜の諸報告をふまえてかき手のかかえている諸問題、とくに劇団と

かき手のかかわりについて話合われた。

その結果、(1)劇団が創作活動を正しく認識し、発展のための方法を具体的にたてること(2)創作戯曲の交換交流を組織的に保証すること(3)ニュース、機関誌に創作戯曲のリストを掲げること(4)上演評価をふくめて、作品の批評活動をおこすこと(5)創作学校の課題を明確にして定期にひろくこと(6)七〇演劇行動のような企画をたてて全体の推進をはかること(7)「演劇会議」に戯曲をのせ、又は戯曲特集号を発行すること等が、全体の要望としてだされた。

殊に劇団所属の作家たちは、極めて多忙な劇団活動の中にいるため、日常的なしごとを追われたり、はじきだされたりするし、戯曲をかく仕事での相談相手にも恵まれていないので、岐阜や京浜のような戯曲研究会、創作会議・学校などの場が必要だということが話しあわれた。

午後は、西り演と共同の企画―七〇演劇行動の、とくに劇作のしごとについて討議。名称、センター(岐阜)、選考委員(こばやし・浦・静芸・萩坂)進行日程等をきめると共に、この参加者が核になってかき手を増やし運動を拡大する意志を統一しておわった。

(2) 道演集—釧路集會

北海道演劇集會では昨年一二月の演劇祭に つづいて、二月二二、二三、二四、「演劇の創造 と劇団の組織づくり」のテーマで、釧路市で 集會をひらき、全道から二〇劇団約百名の仲 間が結集した。

第一日は、地元釧路の劇団北芸と虹の會の 合同で「ピカの蔭から」のモデル上演があり 終演後合評會。(今日の状況にたちむかう創 造活動と捉えるより、技術問題中心の審査員 的批評になった)このあと宿舎でストーブを 真赤に愉しく交流。

第二日、朝の気温マイナス一二度、口が動 かない寒さの中で次の分會をひらかれる。

○第一・地域に根ざした演劇活動とは何か (地域とは何かを正しくつかみ、そこに結 びつく創作が重要、日常活動をつみかさね 組織的な普及をはかる)

○第二・演劇活動と職場の問題 (職場合理化の実体、職場で演劇活動の位 置づけを明確に、仲間の理解を得る)

○第三・演劇活動と婦人の問題 (出席女一〇・男一／家庭での信頼、劇団 員同志の結婚で二人の意見同一視される、

男性に甘えず女性独自の能力を開発、子供 も劇団の一員と考へたい)

○第四・劇団の団結をどう作るか

(演劇と劇団の必要性の理解、徹底した話 しあいぶつかりあい、個人の能力生かしつ つ種々の任務を与える、公演活動をさかん にする、おしつけせず下の方から出るよう に、新しい団員と現役の連がり大切に、運 営委員会で討論煮つめて全体へは発表だけ ではダメ、演出と演技・スタッフは任務分 担で上・下関係ではない)

○第五・道演集が北海道文化に果たす役割

(この集會年二回位ひらきたい、モデル上 演問題提起の足がかり、地域プロダク活 動を大切に道演集の目標追及、入場税前納 制の徹底を当めんの目標に、労演組織II学 習で意義をたしかめ個人加盟の組織確立し 実行委くむ)

このあと全体集會は、各分會の司會者か らの報告、黒沢理事長の挨拶でおわる。(時 間が絶対的に足りない、北海道は広い)

(3) 道演集第六回總會

旭川市農経會館でのこの總會について、釧 路劇団虹の會の機関紙「ぶりずむ」はこう紹

介している。

「去る三月二二、二三、旭川市で行なわ れた道演集總會は、各地より五〇余名参加し て演劇祭や釧路集會の総括や、これからの方 針について討議された。今年は劇作・演出な どの研究セミナーを中心に、創造と組織の 強化についてとりくむ。

役員に理事長黒沢(こぶし) 副理事長緒方 (新劇場) 事務局長鈴木(さつぼろ) が再選 された」

總會資料によれば、六八年度の活動記録は

四月一三・一四日・第五回總會(札幌)

六月二三日・演劇講演會II講師茂木憲「新劇

の歩み」(札幌)

六月二九・三〇日・演出セミナーII講師風

生正美「真夏の夜の夢の演出について」(

砂川)

二月八・九日・第三回北海道演劇祭・一〇

集演出演II講師黒沢参吉(札幌)

二月二二・二三日・交流座談會(釧路)

この他に、一〇回の拡大理事會を開催。

六九年度の活動方針としては、前年度の道 演集の方針が各劇団の具体的な活動に十分反 映していない反省にたつて「創造の問題とし て情勢に切りこみ、方針をとらえ行事計画を

考えてゆく」観点から、七〇年問題に演劇活 動としてどうとりくむかを討議のなかでふ かめるようよびかけている。方針は、創造と 組織の強化にかんして、加盟の劇団サークル

へオルグ団をおくってその前進を援助するこ と、創作劇振興をめざす作業をおこすこと、 プロダクションの創造組織活動に重点をおくこ との三点、文化団体との連帯にかんして、多 くの演劇サークル、他ジャンルの文化集団と の協力、それを基礎に地方自治体への文化要 求をつきあげ実現することの二点、観客の組 織化にかんして、地域観客と結合し全国労演 の経験に学んで北海道に労演をつくること、 以上の六点をあげている。

この方針に従って行事の予定左のとおり。

(1) 劇作セミナーの開催(八月・札幌)

(2) 演出セミナーの開催(九月—十一月・砂川)

(3) 交流座談會(第四回七月・北見、第五回一 二月・函館)

(4) プロダクション別研究會(各プロダクション独自企画)

(5) 北海道労演準備會の結成

(6) 東リ演セミナー代表一名派遣(八月・熱海)

(4) 西リ演第六回戯曲研究會

四月五、六日広島市で開催。福岡現代劇場

(2) 宇部若者座(3) 広島月曜會(8) 木 々の會(2) 国鉄演(3) 岡山炎(1) 神 戸四紀會(1) 福山福演(3) 大阪未来(1) 関西芸術座(2) 南大阪劇研(1) 京都京芸 (1) 和歌山いこら(1) が参加。

土屋議長から「七〇年をひかえ、創作戯曲 の必要性和、研究対象の作品は労働者の中身 の問題で共通しているので、充分検討するこ とによって展望をきりひらこう」と挨拶。

作品は次の三本であった。

○八月の陽の如く—大正一〇年川崎・三菱大 争議(神戸四紀會—内田昌夫作)

米騒動の後、日本の労働争議の草分けとし

ての斗いを克明に追っているが今日の時点で 歴史劇としてみつめ直す必要性、権力の描き 方に再考の要があるが、基幹産業の中に働く 作者独特の怒りの目、生きたセリフがちりば められ、更にねりあげて私たちの誇れる作品 にしてほしい。

○山の斗い—一九六〇(関芸—柴崎卓三、南 耕作)

三池斗争を、資本と労働の論理の対立でと らえ、抒情を排し思いきった図式化を試みた 特異な戯曲。しかし資本の側のリアリティに 比し、労働の側のトップ被にたたかいた支え

る労働者のエネルギーが反映していない。今 日の状況にみあう認識のドラマを開拓する作 者の努力が評価される。

○よせがき(月曜會—大峠健作)

国鉄の現場詰所と、病院の看護婦詰所を中 心にした多場面の一幕で、二つの職場への合 理化の進行の中で、共通の敵の発見—たか いへの発展を描いているが、問題のドラマ的 昇結がよわく、セリフなども風俗的にながれ て核心に迫らない。改作の中で集団の英智を 生かすことが期待される。

三作品にみられる特徴点として

①全部多場面の戯曲である。

②それは現実の複雑な状況が一直線ではとら

え難く、歴史的總体的にとらえようとする

あらわれである。

③三作とも観客に何を与え、どう斗いにたち

あがらせるかの点で配慮努力されている。

という共通点にたつて

(A)労働者の生活実感にたち、その共感の中で

認識を深める作品(八月・よせがき)

(B)認識の問題がポイントになっている作品(

やまの斗い)

二つの戯曲追求の型がみられる。私たちは作 者の特色や得手な部分で、更にそれぞれを発

展させていきたい」と強調された。

尚、このあと、東り演から提起された、七〇年安保廃棄・沖繩全面返還をめざす創作と上演の共同行動のよびかけに応え、七月末日までに圧倒的な戯曲の創造をやりとげようと申しあわせ、センターを劇団未来におくことを決定した。

(5) 生活舞台―西り演加盟

生活に根ざしたウツのない芝居を―のスロ―ガンのもと、一五年の活動歴をもつ劇団生活舞台が西り演に加盟した。九州福岡を拠点に、現代劇場と並んで飛躍的な活動が期待される。

(6) 西り演創作学校

広島、山口、福山など中国ブロック中心の創作学校は、戯曲をかこうとする人、更に勉強したい人を対象に、六月二一・二二日広島で開催。

(7) 東り演東北ブロック

セミナー

五月一〇・一一日、山形県上山市で開催。参加は仙台小劇場、劇団山形、酒田演劇研究

会、滝山（山形）青年団サークルの四集団で約二〇名。

第一日は各劇団の紹介とかかえている問題点がだされたが、劇団山形の佐藤君から「劇団結成の頃の熱っぽさがなくなり、劇団からだされる諸問題にも反論しないで同化するようになり、何のためにやっているのか自分でもよくわからない、一緒にやってきた人たちが三年位でやめる場合が多い」という発言があり、その辺から稽古の魅力のないこと、話し合いが多くきいているだけになる、馴れ合いがでてくる、研修がやれず意識のギャップが生じている等の意見がだされた。

第二日は、講師として参加した黒沢、こばやしからそれぞれ発言。前者は、まわりの困難な状況をきりひらくには劇団の強化が不可欠であり、そのポイントには第一に中心部の指導上の団結、第二はどんな小さくとも創造―普及の循環をつくり、そのよるこびから劇団の活力を生むべきだと指摘。後者は一般的な困難に加えて東北の場合、創作劇の生まれていない点をあげ、われわれの演劇運動は創作劇運動であるが、新しい作者と作品をつくりだすために劇団がその視点をもたなければならぬと強調、多くの体験を引用して何をか

くか、どうかくかを具体的に話した。

このあと、前日だされた問題を更にこまかくだしあい、その克服について話合われたが、この地域の活動を発展させる要として仙台小劇場・劇団山形の内部強化と、東り演劇団としての意識的な連帯が期待される。

(8) 東り演関東ブロック会議

五月二九日、青年劇場にて、劇団協同、群馬中芸、京浜、労芸、舞芸小、よこはま青年座、青年劇場、こむぎ（オブ）一三名参加。

（）こばやし論文について討議、今後一―二回重ねてふかめるため、風見鶏介（群馬）の提起で次の問題点を洗いだした。

- 情勢・歴史の把握がいがいはしないか
- 労働階級のかみ方の一面性・小市民性
- 指導部はどう考え何をやっているのか
- 岐阜の客観的な実体を正確に出すべきだ
- データが全体に不足し感覚的だ
- 複雑な支配に対応する複雑な斗いがとらえられていない

○その上で論文に指摘された状況・現象がわれわれにどう投影しているか

（運営委員について、労芸荒井が辞意を明らかにし、劇団協同に担当を期待して次回決定する。



第一九回広島演劇祭参加作品

星をみつつめて一幕

劇団月曜会 土屋 清

人物

とめさん
彦 三
おたけさん
カルメン
ノンちゃん
とん子
キー子
タンクロ
ポッポ
えんちゃん
守 衛

ライトはとめさんにあたっている。

とめさん アポロX号が月に向って飛んでいっても、四百人乗り超音速ジェット旅客機が音速の二倍の速さで地球をひとまたぎしても、地上のどこかでは、毎日なにかで人間が殺されているような世の中である限り、それが本当の人類の夢といえるだろうか、本当の夢というやつは、やっぱり俺たち自身の手でなにかをつくりだして、こつこつ歩いていくとこにしか産まれるもんじやない。と、まあ、こんな風な気持で俺たちは働ながら芝居をつづけている。名前は「劇団こぶし」。僕が演出兼脚本書き兼……まあ早くいえば雑役部長というところだ。俺たちの劇団は、できてからもう十年近くなる。最初はみんなチョンガーで、お互いに美しくもみえたり、たくましくもみえたり、とにかくビチビチしていた。年がたつにつれて「あたし一生演劇をつづけて

みせます」……なんて、喜ばせることになってた奴に限って、嫁さんに行つたたんと例外なしにやめてしまった。男は男で、嫁さんもらって、子供もできると、妻に爺むさくなつて、てんで劇団に寄りつきはしない。たまに真からの芝居気狂いが入ってきたと思うと、いつまでたつても上手くならない俺たちに愛想つかして、さっさとどっかの専門劇団に入ってしまった。そんなこんなで、十年といたつて、最初からいる奴は今じゃ三人しかいない。

別の場所にいる「彦三」と「おたけさん」にライトがあたる。

とめさん 彦三という、あいつ。年がら年中こまかいことばかりガミガミいってる。つまり劇団の大久保彦三衛門だ。アコを抱えている「おたけさん」。旦那はいるけど、洗濯からごはんたきから全部旦那にやらせ

ている。だから、みんな旦那のことを、決して名前を呼ばずに「おたけさんの旦那」と呼ぶ。それと俺。——あとはみんな出たり入ったりでいつまでたっても俺たちの劇団は一年目だ。

彦三 俺も、当分劇団やめていたんだけどな威勢のよかった頃の「こぶし」の芝居観てこりやボヤボヤしておれんと舞い戻ってきたんだが。やっぱりみかけ倒したたネ、大きなことばかりいって内容がともなわれないんだよ。公演すりや赤字ばかりだしナ、二十人の劇団員のうち、実際は半分も動いてはいないしな、第一、公演一週間前になってもまだ役者もそろわずにモタモタしている劇団なんて聞いたことないよ。おたけさんだって調子のいいことばかり云ってるけどな、旦那は毎晩めしも食わせてもらえずにやせ細ってよ。どっか狂っているよ、うちの劇団は。

おたけさん みんな、悲観的なことばかり云ってるけど、いいところもあるんですよ、うちの劇団。ホラ、みて下さい。一生懸命稽古しているポッポちゃん。

ライトは、一段と高いところで、なにやらブツブツいっては同じ仕種をくりかえしている「ポッポ」へ

劇団に入ったのに。あたし、「劇団こぶし」って、もっと凄い劇団だと聞いて入ったのにさ。ちょっと幻滅感じるナ。高校演劇だって、もっとちゃんとやってるよ。

とん子 まあ／そんぎやにええかげんなどこ？この劇団。だってキー子があたいをひっぱったくせにさ。

——短い間——

とめさん たしかに、問題だ。なにもかも。どうして、こんな、バラバラの劇団になっちゃったのか？そりや、たしかに今は大変な世の中だ。仕事してきた身体で芝居つくって行くには、まわりの条件は悪くなるばかりだ。だけど、条件が悪くなればなるほど、本当は強くなる筈だ。働く者の劇団って奴は。それが法則でもんだ。しかし俺たちは……いったいなにが原因だ？どうしてだ？

彦三 リーダーの指導が悪いからだ／とめさん なに？おまえたち若いもんがシャボンとしないからだよ。

カルメン 下手だからよ。演技が。基礎訓練もロククロクしないで。芸術って、こんなもんじゃやない。

キー子 だらしないぞ／ロートルは。ぐちばかり云って。

とん子 爺むさい／この劇団。よそのサーク

おたけさん 最近劇団に入っただばかりで、と金属工。とっても頼もしいんです。それに、劇団員ではないけど、いつもああやって劇団の道具やら、小道具づくりを手伝ってくれてるえんちゃん。

黙々と小道具をつくっている「えんちゃん」にライトへ入る。

おたけさん 彼も金属工です。だからとても器用で、どんな小道具だってうまく作れるんです。二人とも、赤羽根工業っていうところの工員だったんだけど、去年その会社が経営不振だっという理由で工場閉鎖してしまっ、えんちゃんたち、みんな首切られてしまっんです。首切られた人たちは、すぐ争議団つくって工場にたてこもって、行商に行ったり、土方したりして、今でも争議団のたてこもっているその工場を借りて稽古しているの。だから、あの二人は、私たちの稽古場の家主でもあるって訳。それに、劇団きつての美声のもち主で、財政係のカルメンさん。やっぱり新人で、凄い張り切り屋の「キー子」と「とん子」。

たき火のそばで、そろばんをはじいてる「カルメン」。衣装を縫っている

ルに行ってみな。若い子がワンサといえるよ楽しいぞ、歌ったり踊ったり。

カルメン だったらそこへお行きよ／仲良しクラブじゃないよ、こは。

彦三 足もとを大切にしろってことよ。公演前になっついても、バタバタして。借金ばかりつくりやがって

とん子 なにしてるの？古い人たちは？二十人いるいうけどまだ一回もみたことない人だっているぞ？

キー子 そうよ／古い人たちがいけないのよ／とめさんの奥さんだっ、彦さんの奥さんだっ、ときどき出てきてはえらそうなことばかり云ってサ。旦那はなんにもしないくせに。

カルメン 足りないのよ。結局人間が。みんな忙しいんだから、八方美人よ。沖縄カンパ、ベトナム反戦デー、ピラクばり、なんか集会。芝居そっちのけにして／えらい人ばかりだから

ポッポ かしらういう活動もやらんけりや世の中変えんと、ええ芝居もできんぞ。

おたけさん 話合うのよ。たしかに矛盾はいっぱいあるけど。腹うちわって、思っていることとどんどん話しかって、学習して。

カルメン 話し合いばかりしてたって、芝居はできないよ

おたけさん じゃ、どうすりやいいの？

「キー子」。効果器具をいじっている「とん子」。この一団にライト。

おたけさん みんな一生懸命、いい芝居つくるためにやってるんです。ほかに、沢山いるんだけど、みんな色んな事情で出てこれなくなっってしまった。そこに問題があるんだけど……。でも、欠陥ばかりほじくりだしていったって、なんにもならないと思うの。みんな良いところもってるんだから、そこをのばして、仲間を信頼して。今はモタモタしていても、きつと素晴らしいものにしていけると思うわ。私たちの劇団。

カルメン 役者がいなきや、良い芝居はつくれないよ／一体いく人いるの？私たちの劇団に、役者が。男の役者なんて、私たていやしな。役きめたって出てきやしないし、発声もロククロクできない者ひっぱりだしてその場あたりに役につけたり。あたしは嫌いよ／そんなやりかた。稽古に出てこない者なんか当てにしないで、できるものだけでちゃんとやらなくちゃ。

おたけさん そんなこと云っちゃいけないワ稽古にでてこれない人はでてこれない人てみんな理由があるのよ。

キー子 だって、あたいたち損だよ。いつも早くからきて待っていてさ。稽古はじまるのはいつも八時頃でしょ。角折張りきつて

キー子 キーツ／面白くない／とめさん (怒鳴る) やかましい／勝手なことばかりぬかすな／

一瞬ライト消えて、静かになる。ここまでは、いわばひとりひとりの胸のうちのつぶやき、叫び、といったものである。ライトは順に入って、全体の持ち場を照らす。とめさんは、台本片手に中央。おたけさんは、アコをかついで下手はし。下手寄り、奥まったところにカルメン、キー子、とん子。一段高い場所に、作業着のままのポッポ。上手寄り、ポッポと平行線に彦三。といった風に、構図を絵画的に考えること。劇中劇の衣装をつけているのは、カルメンと彦三だけ。討論のようなことに入るところも、対話ではない。それぞれ仕事をしながら、ひとり勝ちにしゃべっている感じが。てんで勝手にしゃべっているのがピタリと静まったところでライトは再びとめさんだけにしぼられる。

とめさん もつれにもつれた糸のように、劇団の内部はこんがらがって俺の思考は停止する。劇団を結成したのが一九六〇年。新安保条約のできた年だ。安保反対の声が、日本中をゆるがしていたあのときも、俺た

ちはさして祖國の運命を気にすることもなく、ただ芝居のことだけを考えていた。それから十年間、世の中の変りようも大変なものだが、俺たちも少しは変わった筈だ。今は、沖組も、安保も、ベトナムも大巾賃上げも、俺たちの芝居づくりの根っこになる大切なたたかいたと知っている。サークル演劇が、働くものの演劇が、日本の未来をつくる仕事とどっかでつながっていると知ったとき、多くの劇団の仲間たちは、演劇だけが目的でないもっと広い分野の活動に勇敢に加っていった。そのことと、俺たちの劇団の力が、だんだん弱くなっているということは、一体どう考えればいいのか？日本の運命を左右するという安保再検討期の一九七〇年を前にして、こんな状態でのいいか俺たちの演劇は？このままでいいのか？俺たちの文化は？

舞台全体が徐々に明るくなる。風の激しい、寒い冬の夜。機械類はなににもないガラんとした工場の内部。風が吹くとめくれたトタン屋根がバタンバタンと大きな音をたて、穴のあいた天井からは星空がのぞいてみえる。上手が工場への入り口。下手奥がこの工場の争議団事務所で、「全員不当解雇〇〇日 目赤羽根争議団現地本部」と大きな貼

紙がしてある。ぶら下った電線にねずみの死がいが一匹、宙づりになっていく。舞台正面に、どこからか借りてきたホリゾント代用の幕。鉄骨から照明器具が三、四コ下っており、一段高く二重を組んでいる場所に、冬景色の簡単なセット。下手寄り手前にたき火用のドラムかん。人物は、序幕の配置とほぼ同じ位置で、それぞれの仕事をつづけている。ただ違っているのは、実に騒々しい。片綱でえんちゃんのひいているノコの音。とん子の鳴らす効果音のビービーガーガー。劇の主題曲を練習しているおたけさんのアコの音。それにあわせてうたりキー子。くるくる歩きまわって発声練習しているカルメンのかん高い声。ポッポはいいかわらず、同じことをしゃべってセリフを覚えていく。彦三は風に向って歩いていくしぐさの稽古。公演前のあわただしい空気である。そんななかで、とめさんは相当疲れて、いらいらしている様子。

一度、さっきのこと！
ポッポと彦三、位置につく。稽古は、久保田万太郎作「北風のくれたテールルかけ」第三幕の一部分。彦三が「宿屋の亭主」、ポッポが「北風」の役。とめさん おーい！みんな！もうちょっと静かにできんのか
すこし静かになる、稽古がはじまる。しかしすこしたつとまたすぐ騒々しくなるのである。

亭主(彦三) さあ、吹け、いくらでも吹けさあ降れ、いくらでも降れ、いくら吹いてこようと、降ってこようと、そんなことにビクともするようなおれさまじゃないぞ。(風ひとしきり強く吹く。宿屋の亭主、危うくよろける)おっとととと、危ない。これはあんまり威張れないぞ。(「北風」だまって亭主の前に立つ。ぎょっとしたがわざと)なんだ、お前は？
北風(ポッポ) おれだ
とめさん 駄目だア！なんじゃポッポのそのへつぱり腰は。そんな蚊のなくような声で聞えるか！なん度いったらいいのかな、実際。もう一度。「なんだ、お前は？」から
亭主 なんだ、お前は？
北風 おれだ。

とめさん いかん！もう一度！
亭主 なんだ、お前は？
北風 おれだ
とめさん (怒鳴る)もう一回！
亭主 なんだ、お前は？
北風 おれだ
彦三、とめさんの方をみてだまっています。

ポッポ おれ、セリフ、まだよう覚えとらんしな、うらだけで精いっぱいなんじゃ。
とめさん そんなこと理由になるか。
ポッポ 駄目じゃな、オレ、やっぱし。誰かに替えてくれんかの
カルメン なにいつてるの！そんな弱気だして、あと四日しかないのよ、公演まで。いままさら替れると思ってるの！
ポッポ ウーン。役者だけは絶対にやらん云うたのにな、劇入るときに。苦手なんじや、生れつき。人の前でしゃべるのは
とめさん そんなことあるか。みたぞ、俺は。どっかの職場で、大勢の前で争議団のこと堂々と訴えてるのを。
ポッポ ありやまた別よ。誰もおらんときにや、やらにや仕方ないしな。それに、争議団のことあ、自分のこっちゃから。
とめさん 同じこつたよ、芝居も。争議団のこと訴えるときは、どうしても云わずにはおれぬことが肚の中にちゃんとあるから、思わず大きな声でしゃべれるんだろ。この戯曲の中味を、訴えたい内容をちゃんとつかんで確信もってやりやできるんだよ。おたけさん。そうよ。普段、あんな大きな声だしてしゃべってるのにさ、できないことないよ。大丈夫よ。

とめさん さ、元氣だして。もう一度いくよ
ポッポ自信なげに位置につく、電話のベルが鳴っている。えんちゃんが争議団事務所にかけて入る。
えんちゃん おーい、ポッポ、電話、電話。書記長から。
ポッポ おう！
ポッポ 電話に走っていく。
えんちゃん お？火が消えるの。
彦三、寒そうに火の傍へ寄ってくる。
彦三 あーあ！「なんだ、お前は？」……口にしたができてさうだ。大丈夫かなア、あの調子で。
カルメン ちょっと可哀想みたいネ。とめさん、あんな風にいこうけど、実生活でしゃべることと芝居のせりふじゃ、やっぱりちがうものね。
とめさん 他にいねえもの、そんなこといって。たつて。
カルメン しんちゃんさえてくれたらねえもうほとんどできあがってたのに、しんちゃんの「北風」。

亭主 なんだ、お前は？
北風 おれだ。
彦三、ブツと吹きます。みていたカルメンとキー子がゲラゲラ笑いだす。ポッポも照れくさそうにニヤニヤしている。とめさんはますます渋面顔。
とめさん なんだ？そりや？まるで歌舞伎のかけあいじゃないか。どうしてそんな風になるのかなア、まったく。

キー子 ポッポちゃん！頑張ってえ！
ポッポ ……そうかなあ。

彦三 どうしてまた急に駄目になったんだよとめさん 夜勤なんだよ、当日奥さんが、赤ちゃんが病氣だろ。しんちゃんが赤ん坊の

面倒みなきや誰もみるものがないんだよ。看護婦さんじゃ奥さんも簡単に夜勤かわつてもらうわけにいかんしな。
カルメン ついてないわね。折角固まりかけた役を急にかえなくちゃならないなんてこのところ年中行事なんだから。
とめさん 宿命だよ、宿命。サークル演劇の

ポッポが帰ってくる。

ポッポ おう、とめさんよ。おれもうちょっとしたら、でかなくちゃなんなくなつたカルメン そーれ、また！

とめさん (不気味に) どこへ行くんだ？
ポッポ うん。北町のタクシー労組がストに入つてんだよ。今日から。八時から起集合開くんでナ。そこへ激れいに行けつていうんだ、書記長が。

キー子 ええ？ タクシーがストやんの？ かい！
ポッポ 馬鹿、かっこいいためにやつてんじやねえぞ。おまんまがかかつてんだ。

キー子 だってサ、ストつて、こう鉢巻しめて、ワッショイワッショイつてやるんでしょ？ あたい一度やってみたいんだ、あれ。

ポッポ おまえ、運動会かお祭りと同違えてんじやねえのか？
キー子 キーッ！ それほどお脳が弱くはありませんよッ。衣料品の売りだと思つて馬鹿

にすんのか、この野郎！
ポッポ そんなキーキー声だからキー子云われるんじや。キーッ！

キー子 イヤン！ おたけさん！ 悪いよ、この子は！ ヘン！ そんな意地悪い奴にはつくてやらねえぞ、衣装。
ポッポ おつ！ できたのか？ 俺の衣装？

ポッポ、キー子が「北風」の衣装を前につぎだしてさつと後にかくしたのをとりあげようとする。キー子逃げる。キーキートキーキート。ポッポ、キー子をつかまえてとりあげひろげてみる

ポッポ うへッ！ 涙えや、これほんとにキー子が縫つたのか？
キー子 あつたりますよ。ゆうべも夜中の二時までかかつたんだから。

おたけさん うわあ！ できたねえ。素適じゃないの！
キー子 でしょ？ どんなんもんだ。

おたけさん ね、ちょっとためしてみようよ。ポッポちゃん早く着て、あそこに立つて。

キー子 とん子！ 扇風機まわしてみなよ。
カルメン よし、あたしが雪ばらまいてやる彦三 あんまり派手にばらまくな、本番で足りなくなるぞ！

キー子 いいじゃないの、ケチ。
ポッポ (衣装をつけ、杖をもって、氣どつ

て二重の上になつた。とん子が後ろから扇風機をふかす。カルメンが脚立の上から雪をバラまく。エヘン！ 俺は北風だア！！
キー子 うわあ！ かっこいい！ 素適！ 素適！ (無性に手を叩く)

おたけさん いいわあ、そでをひろげたかっこうなんて、北風のイメージにピッタリじゃないの。ねえ、とめさん。
とめさん (あいまいに) ああ。

ポッポたち、なお面白がつてやつてい

彦三 いつまでやつてんのか？ 行くのかよ、行かねえのかよ？ ポッポは。

ポッポ お！ 行、く行く。とめさん、すまんピラまいて、アピールしたらすぐ帰つてくるで。

カルメン ねえ、かわつてもらえないの、誰かと。
ポッポ 俺しかいねえんだよ、みんな出払つて。

とめさん 早く行つてこいよ。
カルメン (走りだしたポッポの脊中へ) あと四日しかないのよ！ また鉄砲玉じゃ駄目よ！

ポッポ おう、わかつとる。
ポッポ去る。彦三はバラまいた雪をあつめてい

とめさん (ため息をついて) これじゃ稽古にもなにもなつたもんじやないな、まった

おたけさん 仕方ないワ。ほかのとこ稽古しときましようよ

カルメン ポッポちゃん抜けたらあとでできるところなんかないよ。ノンちゃんがこない限り。

おたけさん でも、待つてたつて時間の無駄でしょ。ノンちゃんのとこ、またキー子に

彦三 ごめんだよ。俺は。もう代役相手の稽古はてんで気分がのりやしねえ。

キー子、ブンとふくれて、再び効果器具をいじつているとん子の傍へ行つてしま

一問一

とめさん 何時だ？ もう

彦三 七時四十分
とめさん 困つたねえ、まったく、おい、おたけさん、一体どうなつてんだよ、ノンちゃん

おたけさん 困つてるのよ、あたしも。銀行には電話してくるなつてことだし、なん

とめさん なにしてるのかなあ、実際。カルメン 芝居のことなんか忘れてしまつて

るんじやないの？ 組合が忙しくて。

おたけさん まさかあ。こんどこそ組合活動と演劇を両立させてみせるつて、あんなに張り切つてたのに。

カルメン だって、米なくなつてからもう一週間以上よ。いくらなんでもひどすぎるわ

おたけさん そりやそうだけど、大変なのよ。ノンちゃんとも。今、組合分裂のまっ最

中でしょう、うちの旦那が云つてたけど、ノンちゃんがこんど配転になつた東町支店

つてのは、ほとんど第二組合員のとこなんだつて。なにしろ貸付係の支店長代理つての

が第二組合の職場委員してらつていうんだもんね。第一組合に残つてるノンちゃん

んか、仕事以外のことじゃ、同僚からも一切口きいてもらえないらしいのよ。

とめさん 敵しいねえ。
カルメン そりや、大変なことはわかるけど

だからつて稽古にでてこない法はないと思つたわ。そんなこといつてたら芝居なんてできる人間いなくなつちゃうよ。どこの職場だ

つて敵しいんだから、今は。
おたけさん 勿論そうよ。だからあたしも昨日おき手紙してきたのよ。今夜からは絶対

カルメン こなきや大変よ。

彦三 こんなことははじめからわかつてたんだろにナ。よく考えて役ぎめればよかつたのによ。

カルメン よしましよ、同じことなん回もいうの。あーあッ！ (叫ぶ) ノンちゃん！ 頼むわよ！ あんたがこなけりや、パーになつてしまつたよッ、公演。

一問一

風がひどくなる。とめさんはさつきから黙然と考へこんだままである。彦三は雪をつくりはじめ

おたけさん カルメンさん。今のうちにあわせておかない？ 暮あきのナレーション。
カルメン いいよ

おたけさん きいててね、とめさん
とめさん (だまつてうなづく)

キー子 ねえ、行こうよ、とん子。
とん子 トイレきや？ ひとりで行け。忙しいんだよ、今。

キー子 怖いもん、このトイレまっくらでとん子 意気地なし！ 待ちなよ、これだけつないどくから。

キー子 早くう！
カルメン (ナレーションをよみはじめ)

みなさん、今夜は。今夜は私たちの劇団「こぶし」が、みなさんに「北風のくれたテ

「ブルかけ」っていう、素晴らしい面白く面白くおくりします。(おたけさんのアコが入る)このものがたりは、遠い北ヨーロッパの国、ノルウェーで生まれたもので太陽の照る時間も短かく、私たちに想像もつかない寒い土地北ヨーロッパの国々。そこに住む人たちは、昔から、きびしい大自然を相手に苦しめたかいつづけなければなりません。だからこそ、貧しい中からも勇気をたたえ、冒険を愛する気持、そしてよりよい明日を強く願うこの劇のようなものがたりが、たくさん生まれたのです。私たちは、日本のこともたちが、「北風のくれたテーブルかけ」の主人公「ブーツ」のようにたくましい冒険心と勇気そしてやさしい愛情をもつこともたちに育つよう、心から願って幕をあけます。

おたけさん どうかしら?こんなところで。とめさん いいだろ。

キー子 ウーン、うまいネ、やっぱり、カルメンさんは。さて、行こか。

とん子とキー子が下手の暗がりの方へ歩きだしたとたん風がひととき強く吹きつけてぶら下がっていたねずみが、キー子の目の前へゆれる。「キーツ」と派手な悲鳴をあげてキー子すっ飛ばすようにとそこへ、えんちゃんがエプロン

ンに芋をかかえてでてきたのにぶつかり、芋がゴロゴロとこころがります。

とん子 どうしたんきやあ?キー子

キー子 あれ、あれみてよ、あれ

とん子 ……? なあんじや。あれ、ねずみじゃやあか。

キー子 ね、ねずみ?だ、だって、あんなとこに、なんだってねずみなんかぶら下ってんのよ。

えんちゃん (こころがった芋を拾いながら)ハハハ、おれよ、おれがとつかまえて絞首刑にしちやったんよ。

キー子 あーあ、びっくりしたア

えんちゃん あのねずみの野郎、一日百円のわしらの食糧はしからくすねやがって。絞首刑にしてもまだあきたらんよ、まるまると肥えやがって。

えんちゃん、たき火のそばへきて、芋を灰の中にくべはじめろ。キー子もひきかえしてやってくる。

とん子 行くんじゃないのきや? トイレ? キー子 いいの、もう、びっくりしたとん子にとまっちゃった。

とん子 人騒がせな子!

キー子 ねえ、えんちゃん。それ、あたいた

えんちゃん、それ、わかからん。

キー子 あたいたちのお店だったら、たった百円の親睦会費だすのにもしよつちゅうもめてんのにさ。どうしてそんな風に見えるのかしら。どうやったらえんちゃんたちみたいな頑張りができるのかしら。

とん子 うち、それ、知つとるど!

キー子 とん子が?知つてんの本当に!

とん子 うん、いつかポッポちゃんが教えてくれた。それはな、カクメーテキ、ラクテ

ンセーちうもんのあるからだって。

キー子 なんだって?なんのこと?それ?

とん子 その意味はな、えいと、なんとか云

よったがの。うん、「労働者は…」

キー子 うん。

とん子 「労働者は…」

とん子 「勝ったときが勝ったとき、負けたときが負けたとき」

キー子 ?

彦三 (吹きだして)あたりまえじゃねえか

ちに焼いてくれるの?

えんちゃん ああ。

キー子 ええ?親切なことあんのね、えんちゃん。けど…あたいたいなら…いいのよ

彦三 嘘つけ、こいつ。食物のにおいのするところなら、どこからでも一番にとんでくる奴が。

キー子 だって、これも、一日百円の食費の中に入つてんじよ。

えんちゃん なあに。こりや、田舎から送つてもろた特配用じや。

キー子 そう、ああよかった。あたいたい、本当は晩御飯まだで、おなかグーグーいってんのよ。

彦三 それみる。

とん子 キー子、そんなつつきまわしてもすぐは焼けんぞ

キー子 わかつてるわよ、うるさいわね、あたいたい、今考えごとしてるんだから

とん子 へえ?考えごと?

キー子 ねえ、えんちゃん。一日百円の食費で、どうやったら食べていけるの?教えてよ、あたいたつたら三百円あつても足りないのにさ。

えんちゃん 人数が多いからな、それに頭の使しよう。へへへ。

キー子 えんちゃんの炊事って、どんなもの食べさせてんのかしら。ポッポちゃんなん

か、あんヒヨロヒヨロしてんの、食費の切りつめすぎじゃないのかしら。

えんちゃん 馬鹿いえ、争議団一の大食いじや、ポッポは。やせの大食い。いっぺん食うてみいここのめしを。うまいどお、争議団名物のカレーに豚汁。

キー子 へえ。それでさ、そいであんなたち争議団でもらうお給料、三千円なんだって本当?

えんちゃん ああ。

キー子 よく我慢できるわねえ、三千円で!ポッポちゃんみたいに働きに出てても?

えんちゃん そりや、働きに出るんも斗争資金のためじゃからな。もううただけ全部だして、あらためて三千円ずつ分けあうのよ

キー子 三千円じゃ、買いたいものも買えないし、かっこいい服も着れないの?それ

で平気なの?文句いう子いないの?

えんちゃん へへ。そら、はじめのうちは何もでなし、けんかにもなったよの。なん回もなん回も討論しての、最後にやみんな納得したが。わしも、いっとき、クリーニング屋にアルバイトに行つたがの、もろた給料はみんな争議団にだすんじやいうたち

クリーニング屋の親爺、眼、丸うしよった。

ポリーナスのときの「おまえ、ポリーナスまでみな組合にだすんか」いうけに、「そらそ

うじや」いうたら、「そら、可哀想じやけ

んに芋をかかえてでてきたのにぶつかり、芋がゴロゴロとこころがります。

とん子 どうしたんきやあ?キー子

キー子 あれ、あれみてよ、あれ

とん子 ……? なあんじや。あれ、ねずみじゃやあか。

キー子 ね、ねずみ?だ、だって、あんなとこに、なんだってねずみなんかぶら下ってんのよ。

えんちゃん (こころがった芋を拾いながら)ハハハ、おれよ、おれがとつかまえて絞首刑にしちやったんよ。

キー子 あーあ、びっくりしたア

えんちゃん あのねずみの野郎、一日百円のわしらの食糧はしからくすねやがって。絞首刑にしてもまだあきたらんよ、まるまると肥えやがって。

とん子 行くんじゃないのきや? トイレ? キー子 いいの、もう、びっくりしたとん子にとまっちゃった。

とん子 人騒がせな子!

キー子 ねえ、えんちゃん。それ、あたいた

えんちゃん、それ、わかからん。

キー子 あたいたちのお店だったら、たった百円の親睦会費だすのにもしよつちゅうもめてんのにさ。どうしてそんな風に見えるのかしら。どうやったらえんちゃんたちみたいな頑張りができるのかしら。

とん子 うち、それ、知つとるど!

キー子 とん子が?知つてんの本当に!

とん子 うん、いつかポッポちゃんが教えてくれた。それはな、カクメーテキ、ラクテ

誌につけといちゃ、会社に報告しとるんじやから勤め先に告げ口されたもんもおるしな、なにいうても知らん顔しとれ。すぐ帰ってくるで。(去る)

キ一子 ねえ、あたいたちのこともみんな報告されてんのかしら。
とん子 いいじゃないか、どこへわかったって。ここに入らするんが、なにかわりい悪いことするんじやあんめえし、そんな御親切こくもんがおりや、云ってやら。「そんじやあんたがわりに立派な稽古場みつくてよ」ちうて。

キ一子 そうだ、いいこというぞ、とん子。
とん子 あんれえ、きたぞきたぞ、ドラ猫があ！
キ一子 まあ、早い御到来。

守衛 守衛が入ってくる。あまりみんなのそばには近寄らずに、しばらくじろじろみている。

守衛 まだついてますなあ。
とめさん はあ？なんですか？
守衛 いや、いや別に。……この者は、争議団の者誰かいませんか？

守衛 守衛争議団の事務室の方へ歩いていくキ一子 誰もいやしないよ今。なんの用？
守衛 みんな留守なの？じゃ、仕様ががないな

て、みんなうたをうたいたす「仕事のうた」うたが次第に高まるとライトは変化して、(非現実の世界となつて)
とめさんが客席を向いて立っている。

とめさん 劇団「ごぶし」の出発点となった芝居、「僕らが歌をうたうとき」俺たちがくりかえしていることをそのまま舞台にしたような芝居。稽古場がない、金がない、残業だ、夜勤だ、日曜出勤だ、病気が、満足に顔が揃うときの方が珍しいような条件のなかで、一体どうやって良い舞台をつくるのか？ひとりの仲間が、芝居をやっているために、クビになる。それでもやりたいづけていくのか？クビになってもやりたい芝居とは、一体何なのか？働きながら芝居をやるその意味は？俺たちに聞いかけてやまないその内容が、出発したばかりの、幼い劇団にずしりとこたえた。困ったとき、うちのめされたとき、もう俺たちの劇団はつぶれてしまふんじやないかと思つたとき俺たちはいつも、この芝居に立ち戻り、くりかえし上演し、同じ問いを、なん度も問い返した。「俺たちは、なんのために？誰のために？どうやって？……。」

光の輪のなかに、おたけさんと彦三が

(立ち去りかけてまた戻ってくる) やっぱり伝えるだけ伝えといてもらおうか、あのねえ、この工場の電気の配線ね、とめるからって今日通告がありましたからね、そのつもりでいて下さい。争議団のも誰でもいいから。(立ち去りながらひとりごとのように) おかしいな、もうとまってると思つたのにな。(守衛去る)

キ一子 ねえ、どういうこと。この電気とめられちゃうの？

とめさん そういうことらしいな。

キ一子 いやだあ！この電気とめられたら稽古できなくなるじやないの？どうする？
とめさん 機械のもちだしの次は、こんどは電気か。畜生！

おたけさん いくら首切られたって工場の人たちがここにまだいるのに、電気とめるなんて、そんな勝手なことができるもんなのとめさん 法的にはな。裁判所は会社側の肩ばかりもつてからな。争議団は首切られたって、まだ争議中だから身分はこの会社の従業員に変わりないってことを認めるといふ訴訟を起してんだよ。ところが地方裁判所は、それを却下してしまつて会社にとつて邪魔な争議団の者を、ここから追いだしてもかまわないってことを認めたのさ。会社側はそれたてにとつて、ここから機械もちだしてしまつて、第二会社つくつて操

入ってくる。

彦三 そして、その答は？結論はなんだ？

おたけさん サークルの前には未来しかないってこと。

とめさん その未来のために、俺たちの未来働く者の未来のために、俺たちは芝居をやつてるのか？

おたけさん そうだ、そうとしか云いようがない。

彦三 じゃ、なにも芝居でなくても、ほかのことでもできる筈だ！

三人が消えると同時に、上手はしに、ひとりの女の子が立っている。ノンちゃん。いかにも初々しい、はつらつとした少女。とめさんたち三人は、ゆっくりと場所を移動して、ノンちゃんの方に近づく。

とめさん おとどの春。定時制高校を卒業したばかりの、ビチビチした女の子が劇団に入ってきた。小川信子。通称ノンちゃん

○銀行勤務。

おたけさん 芝居のために生まれてきたんじやないかと思うほどの熱心さ。稽古場にはいつも、一番早くからきてみんなを待ち、ふりあてられた役はどんな役でも喜々とし

業開始してるんだよ。ほんとにえんちゃんたちのいうように、組合つぶすための偽装閉鎖だったんだよな。争議団に加わらなかつた者はみな、第二会社が雇つてんだからキ一子 キーッ。憎らしい。あいつ電気のついているのがさも残念だといわんばかりにさ、「おかしいな、もうとまってると思つたんだが」なんてほんとにえんちゃんのこと通りだ。あの顔、どら猫そっくり。

キ一子 おかしな顔つきをしてみせてとん子と二人でゲラゲラ笑いだす。他の者は深刻な顔している。

彦三 この調子じゃ、こども長くねえな。カルメン 困つたわねえ。公演ギリギリ前になつて、また稽古場探さなくちゃなんないの？あたしたち……。

とめさん とにかく、えんちゃんたち帰つてきてからでないと、俺たちばかりで心配してたつてはじまらんよ。おい、それよか早いとこ装置の残りだけでもあげてしまおう途中でぶち切られたら大変だ。

彦三 そうだな。よし、やるか。
おたけさん 元氣だしてやりましょみんな！

なんとなく追いつてられるようなあわただしい気分になつて、一同いっせいに動きだす。おたけさんがアコをひきだすと、仕事をしながらそれにあわせ

彦三 忽ち、彼女は、俺たちの劇団になくはならぬ存在となつた。

とめさん 二年たった。あいかわらず公演前の忙し毎日がつづいたある日。彼女は突然こんなことを云いだした。

ノンちゃん あたし、こんどの公演終つたらもう芝居やめようかと思うの。

おたけさん なんだって？どうしたのよ、急に。

彦三 嫁さんにもいくのか？

とめさん なにか、あつたのかい職場で？
おたけさん いやになつたの？もう、お芝居が？

ノンちゃん (深刻でなく、あいかわらずニコニコと明るい) そうじやないの。あたしにとつて、芝居の魅力は増すばかり。それが怖い。このままつづけるのが、今のままのあたしじゃどうしてもいけないって気がするの。

とめさんたち三人、ノンちゃんを凝視したまま消える。

ノンちゃん 劇団の機関紙に、私はこんな文章を書いたのせだ。——私のお家は貧乏で原爆で父を失くして以来、母は銀行の掃除婦をしながら私を育ててくれた。母の苦勞をみてきた私は、銀行にお勤めしながら定時制高校に通うようになってからも、一生

懸命みんなが私を好きになってくれるよう
な人間になろうと努めた。お茶ひとつ入
れるにもその人に合ったおいしいお茶を入
れること、人のいやがることを真っ先にやる
こと。いつも笑顔でいること。定時制高校
で夜は疲れても、朝は一番先に出勤して、
誰にたいしても大きな声で「お早うござい
ます」ということ。母の教えてくれたこと
をひとつひとつ守った。

やがて、私の頭の中がでんぐり返るよう
なことにぶつかった。中学、高校と、好き
でたまらなかつた演劇。卒業するとすぐに
劇団「こぶし」にとびこんだ。入ってすぐ
に、私はいきなり、沖繩返還運動のデモ行
進にひっぱりだされた。原水禁大会とい
うのにも連れていかれた。これが芝居の基礎
だといわれて、本当に私は卒倒しそうなぐ
らい驚いた。間もなく銀行で、私は組合の
職場代議員に選ばれた。ちょうどそのとき
は、私たちの支店出身の組合本部役員の人
が、「会社業務阻害」ということで解雇を
いわたされて、裁判になっているときだ
った。組合の代議員総会で、私は、その人
を組合から除名しようという執行部の案に
堂々と反対意見を述べた。高校の生徒会
のようなつもりで云ったのだが、あとで
人から、「うちの組合は御用組合なのに、
あんなことを平気でいう奴は馬鹿だ」とい

われた。あくる日、人事に呼ばれて、「誰
にああいえと云われたのか」と聞かれて、
またびつくりした。私は、このときから自
分の勤めている銀行に疑問をもちはじめた
そして、銀行のうたごえサークルの人のす
すめ、労働大学というのにいってみて、
はじめて自分の疑問がとけはじめたように
思った。それからというもの、私の世界は
百八十度転換した。昼は仕事と組合活動。
夜は、劇団のないときは銀行のサークル、
学習会——なにかも未知の世界が、私の
身体の中に音をたてて流れこんでくる。無
我夢中の毎日。でも、こんなににもかも
やっていて、本当に責任がもてるのだから
か？日曜日も家に居たことがなく、毎晩十
時前に帰宅したことの無い最近の私。ゆっ
くり話をする暇もないところは母はまだ仕
方ないとしても、銀行の友達に「たまには
前のようにいっしょに遊んだり、話を聞い
てほしい」といわれたときには困ってしま
った。学校時代の友達とは芝居の切符売ると
き以外は声もかけてくれないと怒る。活動
の仲間には「落着いて会議に出席してくれ
たことがない。欠席だけはしないけど、途中
で抜けたら、一言も発言しなかつたり、も
っと身を入れて活動に集中してほしい」と
いう。同じ職場の仲間、最近結婚の約束
を交した彼までが「もつととうるおいのある

二人でなにかを築いていける生活ができな
いのか」といっただいたのはショックだった
でも、公演前の、毎晩稽古がつづいている
今は、眼をつむって通るより仕方ない。
公演がすんだら、こんどこそなんとかしな
ければ。「好きでただで芝居はできない」と
とめさんはいう。「自分の職場を変えて
いけるしつかりした力をつけること、その
ための勉強——それが第一。演劇はそれが
できてから」と、活動の先輩は忠告してく
れる。あれもこれもみんな中途半端になっ
てしまった私。こんどこそなんとかしなけ
れば……。

とめさん ノンちゃんがぶつかった矛盾。
それは、芝居以外にも色んな活動を抱えて
いる者誰もが悩んでいることだった。俺た
ちは一生懸命説得した。なんとかして演劇
活動も組合活動も両立させろ。あつちの活
動もある。こつちの仕事もある。と並列的
に並べて考えて負け腰になっては駄目だ。
矛盾があるからこそ俺たちは成長する。矛
盾よくくらでもやってこい。みんなのみこ
んで成長し前進してやる。そんな気持ちで頑
張ろうじゃないか。と。
ノンちゃん ……そうね。難かしいことだけ
ど、やっぱりやってみる、あたし。劇団や
めない。

ノンちゃん、考えこみながらゆっくり
と上手の方へ去る。心配そうな表情で
それを視線で追う「おたけさん」「と
めさん」「彦三」

彦三 しかし、結局、これからノンちゃん
足はだんだん劇団から遠のいていった。

おたけさん 人一倍誠実な彼女は組合婦人部
の役員もやるようになって、忙しくなる一
方だったのです。

彦三 卒業したつもりなのかね、もう、演劇は
おたけさん そんなんじゃないよ、ひとまわ
り活動の輪が広がろうとしているだけなの
よ。

彦三 現実に、今夜も来ないんだぞ、ノン
ちゃん。やっぱりきれいごとさ。あんな
たちのいってることが。そんな、あれもこ
れもできる筈がない。

二人は云い争いながら光の輪から、は
ずれる。ポツンとひとり、とめさん。

とめさん 俺たちはよくいう。「働く者の立
場に立った、働く者のための演劇」……。
しかし、組合が忙しくなったから劇団への
足が遠のく。ノンちゃんにとって、俺たち
の演劇とはその程度のものでしかなかった
のか？せいぜい年二、三回の公演のために
莫大な時間とエネルギーを費している俺た
ちの演劇がその程度のものでしかないのな

ら、一体どんな意味があるというのか？ひ
よっとしたら芝居なんかやめてしまっ
て、そのエネルギーをほかのことへ向けた方が
本当は働く者の未来のためには役立つんじ
ゃないのか？

舞台全体が明るくなつてもとの場面に
戻る。みんな仕事をづづけている。と
めさんは矢張り同じ位置で、ノンちゃ
んの去った方角をみて考えている。風
がまたひどくなる。雨もペラつきはじ
める。

かなり長い間
やがて、みんなもとめさんの様子に気
づいて（なにを待っているかを理解し
て）とめさんの方に集まってくる。

カルメン とうとうあらわれなかつたね、ノ
ンちゃん。どうする？とめさん

みんなの視線がいっせいにとめさんに
集まる。やがて、挑むように。

とめさん おい、キー子ノ本番で、ちゃんと
やれるように、しつかり稽古しとけ。これ
以上待てん。通し稽古はじめる。

キー子（突然で、とめさんの云っている意
味がのこめない）え？いいの？あたいま
たいな下手くそで。あたじゃ稽古になら
ないってよ、彦さん。

とめさん 稽古用の代役やれといっているんじ
ゃないノ本番もやるんだ、キー子が。

キー子 ええッ？

とめさん あと四日、いや、正確にいうと、
明日と明後日と、二晩しか残ってない。稽
古は、必死でやるんだ。

カルメン かえるっていうの？今から、ノン
ちゃんの役を？

とめさん そうだ。

カルメン 大丈夫なの？そんな

とめさん（大声で）俺が責任もつノ早く位
置について！

一同とめさんの権幕にのまれたように
あわをくらって準備に入る。

とめさん じゃ、一幕の最初から。ナレーシ
ヨンの終りが入る。はいノ（アコが入る）

カルメン 「私たちは、日本のこともたちが
北風のくれたテールルかけのブーツの
ように、たくましい冒険心と勇氣、そして
優しい愛情をもつこどもたちに育つよう、
心から願って幕をあげます。

第一幕。亭主ノ彦三。かみさんノおた

けさん。ブーツノキー子。効果ノとん

子。ごちそうの仕掛けノカルメン。

宿屋。夜。宿屋のかみさんは洗濯物に
アイロンをかけている。亭主は火のそ
ばでタバコをのんでいる。

亭主 月日のたつのは早いものだ。おまえとおれと、この商売を始めても十年になる

かみさん 十年に？
亭主 かんじょうしてごらん、そうなるからかみさん (かんじょうしてみて自分に)ほんとうだ。(亭主に)ほんとうにそうなりませぬ。

亭主 あの時分はおれたちはずいぶん貧乏だった。それを思うと、このごろは、うそのように金持となった。
かみさん ほんとうにねえ。
亭主 だが、まだいけない。こんなことじゃあまだいけない。もつともつと、おれたちはもうけなくつちやいけない。

かみさん そうですわねえ。
亭主 だが、宿屋って商売はいい商売だ。おまえは、そうは思わないか。
かみさん そう思います。一本当にいい商売です。けれど、この四、五日はちつともお客さまがきませんね。

亭主 たまにはこないこともあるさ。一こなくたっていいじょうぶだ。
かみさん どうしてこなくてもだいじょうぶです？
亭主 こんどお客がきたら、その客から、二人分でも、三人分でも、よけいに金をとってやればいいじゃないか。(笑う)一まったく宿屋って商売は、こたえられない商売

だよ。
かみさん ……そう出来ればいいけど。(戸をたたく音がきこえる)
亭主 お待ち、誰か来たようだ。
かみさん そうですか？
亭主 あけてごらん。

宿屋のかみさん、入口の戸をあける。
ブーツ外に立っている。
ブーツ こんばんは。一晩とめていただけないでしょうか？
亭主 いらっしゃいませ。一さあどうぞ…。(立ちあがる)
ブーツ かまいませんか、はいっても？
亭主 ええええ、どうぞ…。
ブーツ そうですか、ありがとう。(入る)
亭主 外はお寒かったでしょう、さぞ。一さあ、火のそばへおよりください。
ブーツ ええ、ありがとう。
亭主 ときに、おなかがはいたがですか？一まだ夕はなまえじやありませんか？
ブーツ ええ、まだです。一これからです。
亭主 じゃあ、すぐ仕度を。一(かみさんに)おい、おまえ…。
ブーツ いいえ、いいえです。一食べるものは、ここに持っています。(かくしから小さくたたんだテーブルかけをだす。)

亭主 それは？
亭主 お待たせ、急な姿勢を崩して坐りこんでしまふ。
おたけさん どうしたの？彦さん。急にやめ

ちやったりして。

彦三 駄目だよ、やっぱり。

とめさん キー子もまだ芝居にのってないんだから、うまくいかないのは当たり前だ。途中で勝手にぶち切るような我まましちやいかん。さあ、もう一度、御馳走のどるところからつづけて。

彦三 ……

とめさん つづけるんだ、おい彦さん！

彦三、かたくなに黙りこんでいる。キー子が突然しゃくりあげて泣き出す。

キー子 あたいが…あたいが下手くそだから…あたいがちゃんとできないから…とめさん (怒鳴る)そんなこといってるんじゃない！ベソベソしている場合か！

なお泣きじやくっているキー子を、とん子が片隅につれていってなぐさめている。彦三は依然仏頂面。けいこは実質的に中断してしまう。

カルメン とめさん、あたしは反対よ。いまさら彼かえるの。

おたけさん あたしも。ノンちゃん、もう絶対に駄目だ。決まった訳じゃないのよ。とめさん これまで待ってこないのは、もうほとんど無理だということだ。万一の場合

ブーツ テーブルかけです。(言いながら、テーブルの上にそれを掲げる)

亭主 なるほど。一で、あがるものは？
ブーツ まだ。一はくがほしいと云わなから出てきませぬ。
亭主 出てこない？
ブーツ ええ。一ほくが、今、何か食べたいと思つたものが、ひとりでこのテーブルかけの上にてできます。

亭主 お客さま、あなた気はたしかですか。ブーツ (笑って)だいじょうぶですよ。一ほんとか、うそか、見ていれればわかります。亭主 (かみさんのそばへよつて)おまえ、そんなことが出来ると思ふかい？
かみさん (首をふって)思いませんわ。
ブーツ ラビット・パイと、あげたばれいしよと、塩つけのくるみと、ジャムのはいったプディングと、レモン水を一本と。一それだけ…。

ブーツ、テーブルかけに向かつてそう云う。一見るまた、テーブルの上、それらの物でいっぱいになる。

亭主 (ぎょうてんする)出た。一出た。…彦三、急に姿勢を崩して坐りこんでしまふ。

とめさん どうしたの？彦さん。急にやめたおたけさん

を考えたところするよりほかに仕方ない。カルメン できる訳ないでしょ、今から。かわいそうよ、キー子だ。キー子だけの間頭じゃないのよ。ひとり入れ替れば、相手の役も全部段どり狂つちゃうんですからね。どうやってまとまりつけるの？二晩や三晩で。絶対反対よ、あたし。

とめさん できんことないよ、俺が責任もつといつてる。
カルメン とめさんひとり責任もつてくれ。たつて仕方ないよ。

とめさん ……(つまる)できなきや徹夜してもやるんだ。それが俺たちの芝居じゃないか。いいか、俺たちみんな働いてるんだ。ひとりや二人稽古に欠けたって、役者が急に駄目になったからといって、それがどうしたというんだ。そんなこと、はじめから覚悟して芝居やってんじゃないのかみんな。相手役がいなきや、自分ひとりでも必死になって稽古するんだ。根性が足らんよ、根性が以前はこんな甘つたれた稽古じゃなかったぞ。できるまでは夜中の二時になつても三時になつてもやってた。最近手加減してんだ、こつちも。

彦三 朝が早いんだからな、こつちは。とめさんみたいに商業デザイナーで、時間が自由になる身分とはちがうんだ。そんな無茶な稽古いつもやられてたまるもんかよ。

おたけさん 誰も寄つてたかって反対なんかにしてないワ。とめさんいらしらすのわかるけど、今からかえてもできるならで、ちゃんと説明してくれたいじゃないの。みんなで相談してきめれば、誰だって納得するわよ。それが集團の民主主義ってもんじゃないの？

とめさん 君たちは木、すぐ民主主義だ、話しあいだつてもちだすけど、劇団というのは、ちゃんとしたその劇団の歴史と方向にみあった理念、芸術上の核があつてはじめて成り立つんだ。劇団員ひとりひとりがちゃんと独立した、芸術家としての魂をもつた人間として存在して、はじめて民

実際！

おたけさん 誰も寄つてたかって反対なんかにしてないワ。とめさんいらしらすのわかるけど、今からかえてもできるならで、ちゃんと説明してくれたいじゃないの。みんなで相談してきめれば、誰だって納得するわよ。それが集團の民主主義ってもんじゃないの？

とめさん 君たちは木、すぐ民主主義だ、話しあいだつてもちだすけど、劇団というのは、ちゃんとしたその劇団の歴史と方向にみあった理念、芸術上の核があつてはじめて成り立つんだ。劇団員ひとりひとりがちゃんと独立した、芸術家としての魂をもつた人間として存在して、はじめて民

主義も成り立つんだよ。
おたけさん 具体的にいつてよ、もつと。
カルメン すぐ難かしいこともちだして、と
めさん。

とめさん 俺がいたいのはね。もつとシヤンとしてくれなきや困るといつてるんだ、みんなが。俺はナ、今晚だつて稽古はじまらまえから、ノンちゃんももし駄目になつたらどうしよう、明日明後日とどんな稽古体制をくめばいいか、あの音楽で果して動くとピタッとかみあうか、照明がうちの劇団で駄目なときはどこへ頼もうか。そんなことばかり考えつづけてるんだ。それをなんだ。みんな勝手なことばかりして。彦三は客観的なことばかりいつてちつとも相談にのつてくれやしなしいし、おたけさんまでがキー子たちといつしよになつてキヤキヤ騒いでるんじゃないか。一体誰と相談すりゃいいというんだよ。かんじんのことになると、どうすんのか、どうすんのかつて、俺ばかり責めやがつて。
おたけさん そうか。とめさんにはかり頼り過ぎていたもんな、私たち。

「間」 みんな黙りこんでしまふ。
こういわれると、なんともものもの云いようがない。さつきから口をとんがらして、なにか云おう云おうとしていた

役にしてしまつて。
おたけさん それはさア、放つといたら、ノンちゃんあのまま劇団にでてこなくなつちやいな状態だつたでせよ。彼女みたいなもの失つたら、大痛手じゃないの。うちの劇団にいつて。そこは考えなくちゃ。
カルメン それがいけないっていうのよ、あたしは。稽古にもでてこない人間をどうして当てるの？ 最世の義務でせよ、稽古にでてくるくらい、劇団員として。それも守れない人は劇団員じゃない。
おたけさん そんなこといつてたら、いつもでてこれる人、なん人もいるっていうの？ うちの劇団に。
カルメン なんんだつてかまやしない。ちゃんと決まつたとおりの稽古には出てこれる人間でキヤスト組めば、こんな問題起らないでせよ。多過ぎるのよ、名前だけの劇団員が、うちには。あたし、財政やつていつつも思うのよ。団費もろくろく払つてない人がどうして劇団員なの？ もう半年以上も団費滞納している人だつているんだからそれも古い人ほどそうなのよ。

タンクログのつそりと入ってくる。ものをおうとするが、深刻なみんなの顔つきに出会つてそのまま片隅の方へ行つて照明器具をごそごそいじりはじ

とん子が必死になつていいだす。
とん子 そりや、とめさんが、この劇団で、一番えらいか知らんが……、一番なんでも知つてるかしらんが、とめさんひとりの劇団じゃないから、みんなの劇団じゃから、こういうことは、みんなで相談してきめた方がいいと思う、やつぱり。

一同思はずとん子の方をみる。泣きやんでたキー子も、そつたといわんばかりに身をのりだす。おたけさんは救われたような表情。とめさんはややくリとする。

おたけさん そりね。なんだか、こんがらかつてしまった。じゃ、聞くわよ。ひとりひとりの意見を。みんなこつち集まつて。来なさいよ、彦さんも。そんなとこつ立つてないで。とめさん。とめさんの気持は、ノンちゃんを全然あきらめちやつてる訳じゃないでせよ？ できるだけの手をうつて、それでも、万一の場合を考えて、キー子にやれといつてるのネ？
とめさん 勿論そつた。
おたけさん と、いうこと。それで、どう？
キー子は？ やれる？
キー子 できるかできないか、わかんないけど……やつてみる。
おたけさん よし！ それで、本人の肚はきま

める。

カルメン それをさ、やれあの人は劇団の創立メンバーだから大切にしなきゃいけないこの人は今職場で大切な問題かかえてるから出てこれなくても仕方がない。誰それは家族もちで生活が苦しいんだからやむを得ないで、そんな条件つきの劇団員ばかり大切もつこに抱えていて、まるでそれが当りまえだつて空気がないの。そんなのちやんと整理すべきだと思つよ。芝居やろつてことで集まつてる劇団なんだから。枯木も山のにぎわい式のやりかたは沢山だわもう。

とめさん 枯木も山のにぎわい？ そいじゃ、ここに人間以外みんな枯木だつていふのか？ 俺たちだけで芝居つくつてると思つたら大間違いだぞ。今は劇団休んでる人間だつて、色んなことで劇団やめていつた連中だつて、それぞれ場所で劇団支えてくれるし、過去一時的にせよ支えてくれたんだ。子供が増えてだんだん芝居できなくなつた連中だつて、今になんとかしようという気持だけもつてるんだ。そんな人間が、あるときには借金しあつたり、器具もちよつたりして、こつちやつて劇団つくつてきたんだ。それを、今眼のまえにみえなからといつてはしから切つていつてしま

つたと。彦さんは？

彦三 わからんね、俺は。
おたけさん またそんな。よく考えてよ。カルメンさんは？
カルメン 反対／あたしは。
おたけさん どうして？
カルメン できると思つてんの？ 本気で。もし失敗したら、どうやつて責任とるつもり？ お客さんに。お金とつて観せるのよ、あたしたち。そんなないかげんなもんじやないよ。

おたけさん そりや、そつたでせよ。
彦三 俺もそう思うね。無理しない方がいいぞ。キー子はやるといつてるけど、どつちみち強行軍の稽古だろ、勤めにもひびいたらどうするんだ。今忙しい最中なんだから。キー子の店だつて、年末ひかえて。
キー子 そりや。

彦三 芝居も大切だけど、仕事だけはちゃんととんとかな。
おたけさん そりやそつた。だつたら、どうしていつてんの？ 彦さんは？
彦三 とにかくな、ギリギリになつて、こんな大騒ぎするよなやりかたが納得できねえんだよ、俺は。いつもこつちやないか。こんどのごさだつて、役きめるときからノンちゃんが難かしそつたつてことはちやんとわかつてたんだ。それを無理に彼女を主

つて、一体どんな芝居ができるつていうんだ。
カルメン 人情論よそんなの。とめさんはさ古い人たちが苦勞して、劇団をこつちまでやつてきたつていつてたいんでせよけど、それが今の私たちにどんな力になつていつていつての？ どうして、古い人ほど、劇団さぼつてもかまわないの？ どうして、とめさんたちのいうよな「活動家」とか、意識の高い人たつていつていつて、劇団にたいして無責任なのよ。とめさん、すぐ劇団の伝統とか、理念とかつてもちだすけど、今の私たちに、それが実感として伝わつてこないよな伝統や理念じゃしょうがないわ

とめさん ……。人情論かねえ、俺のいうことが、わからんな、俺には。君らのいうことが……。そんな考えかたで、四十年代、五十代になつても芝居がつづけていつけるかねえ。わかつちやないんだよ、君たちにや。劇団が今にもつづれそうになつたときどんな気持で俺たちがそれを耐えてきたか折角安定しかけてきた劇団員がやめていくたびに、どんだけ辛い思つたか。いくつ理由がわかつていつて、退屈屈つきつつけられるたびに、こつちの心臓は凍る思つた。借金の伝統ばかりつづつたといつては、君たちは古くからの劇団員を責めるけどな、そつちや云いかけた日には俺くらの年

輩になった連中はみなやめていってしま
うぜ、演劇を。どうしてそう……情けない！
俺は。

一問一

彦三 なんの話だよ？ 一体。いつまでたつても堂々めぐりして。いつもこれだからいやになるよ。

とめさん なにい？ 劇団つくった頃からいっしょにいるおまえまでがな。いつまでたつても客観的な眼で劇団眺めてる。それがたまらねえというんだ、俺は。

彦三 俺だってたまらんさ。こんな話ばかりしてる劇団なんて愛想がつかまるよ。

とめさん ああ！ やめてしまえ、そんなに愛想がつかまるなら！ そういう根性で芝居なんてやる資格ないよ！

おたけさん なにいだすのよ！……とめさんたちがそんなふうで、あたしたちどうなるの？ 結局どうするのよ、それで。せいじや、ノンちゃんができない限り、私たちの公演だめだつてことになるの？ それでいいの？ みんな？

一問一

おたけさん やめてしまおうっていうの、公演を？ みんな苦勞して切符売って、宣伝もしてしまつた今になって……。どうなのよ、みんな！ なんとかいてよ！

重い沈黙。それぞれにいいだしたことが意外な結果をまねいてしまつて、その重さにうちのめさされている。激しい雨。天井穴から雨がもれはじめ。雨もれの水滴の音。急にスッと電気が消える。

キー子 あ！ 消えた！ とうとう。

「おーい！ どうしたあ？ 停電かあ？」

カルメン 速りも選んでこんなときに……。

まっ暗な中で、誰も動く者もない。残り少なくなった、たき火の火だけがチロチロ燃えている。タンクローが、かい中電灯を照らしてやつてくる。

タンクロー おい、どうなつてんだ？ これ？

おたけさん 切られてしまつたのよ、会社にきつと。

タンクロー え？

おたけさんの旦那が、暗がりからニュースとあらわれて、ドラムかんの中にたき木をドサッと放りこむ。燃えあがつてきた火が、みんなの顔だけを赤々と照らしだす。

おたけさん ……？ ちよつと！ きてたの！ あんだ。

旦那 ああ。

おたけさん そいで、寄つてくれたの？ ノンちゃんどこ？

旦那 うん。

おたけさん いた？ あえた？

旦那 ああ。

おたけさん まあ、よかつた！ あえたの、ノンちゃんに！ で、どうだった？ なんていつてた？ ノンちゃん？

旦那 それがねえ。とても芝居の話どころじやなかつたよ。

おたけさん え？ 情けないわねえ。あんな同じ銀行の職場代議員してて、そんな説得もできなかったの？

旦那 もうなんにも考えたくない。どうなつた？ いいなんて彼女はいうしき。お母さんはお母さんで、もう娘は銀行やめさせまうって泣いてるし。

おたけさん そんなひどい状態なの？

旦那 ひどいものにも、この一週間ぶつづけたとよ。支店長と、第二の役員がさ、いっしょに第一組合への脱退届もつて、これにハンツつて、毎晩押しかけてくるんだから。あれじゃ参つてしまふよ。お母さんだつていたたまれないさ、おまえの娘はアカといっしょになつてほかの者を煽動している、このままじゃ解雇されたつて仕方ないなんておどすんだから。あそこの支店じ

や、第一に残つてるのはノンちゃんひとりになつてしまつたからな。支店長の面子にかけても、なんとかして落そうと必死なんだよ。

おたけさん よく頑張つてきたわねえ。たつたひとりで。

旦那 そうなんだ。それに、やり口が汚いよ彼女を落そうとして、先に吉野を口説いたんだな。ノンちゃんが結婚の約束してた彼さ。とうとう第二に落ちてしまつたんだよ。あいつ。

おたけさん ノンちゃんの彼氏が？ 彼女があんなに信頼しきつてた人が……。

旦那 その、彼の脱退届を、ノンちゃんの鼻先につきつけてな。これでも平気かと、ニヤニヤ笑つたそうだ。第二の役員が。それでも彼女は頑張つてたんだ。同じ職場の目と鼻の先にいる結婚相手。せいつまで第二組合員で口もきけない。そんな状態の中でよ。ノンちゃんにしてみりや、いくら相手が第二に落ちたからつて、愛情まで断ち切る訳にやいかなかつたんだらうよ。結婚したら、彼の心だけはどうしても第一にとり戻してみせる、そんな覚悟で頑張つてたそうだ。吉野が、第二に落ちたと聞いた瞬間つたがりこりやノンちゃんもいかれたと思つたからな、俺は。みんなギリギリのところまで耐えているんだ。夜が明けるところにこ

の指でたりないほどの仲間がどんどん減つていく。たてつづけに第一の役員が二十一人も首になる。今日はあいつが落ちるか、明日は俺がやられるか、それはかり考えておかしな気分、みんながとりつかれているときによ。ノンちゃんが参つてしまつたとしても、誰も不思議には思わなかつた。だるうよ。それぐらい異常な空気がんだ。分裂させられた職場つてのは。それで、ノンちゃんな、吉野の奴に、一度二人だけでゆつくり話したいからといつても、あいつ会おうともしなくなつたんだそうだ。それで、昨夜、尋ねて行つたつてよ。あいつの家に。そしたら……あの野郎、ぐでんぐでんに酔っぱらつていて、結婚の約束、解消してくれ、とぬかしたそうだ。もうじき銀行の世話で他の娘と結婚することに話が決まつたからつて。それでいっぺんにガツクリきたんだな。可哀想に、今まで思いつめていた糸がプツンと切れてしまつて。もうなんにも信じられなくなつたつて、ノンちゃん泣いていたさ。

一問一

旦那 いくら第一組合が憎いからつて、ひどすぎるよ、銀行のやりかたは。一日の収支計算で、たつた百円の計算違ひだしただけで三日間の出勤停止処分をくらつた仲間もいるし、坂川支店じや、仲間のことをコー

ルガールだの、共産党の慰問婦だのと同傷したピラを、その仲間の家の扉や、町内の要所へ貼りつけやがつた。若い娘なのに結婚前の。住所、氏名まで書いてた。天下の〇〇銀行がだよ。最新設備の、スマートな近代建築の中で、こんなえげつないことやつてんだ。これが合理化つて奴だよ。カルメン どうして、そうまでしなくちゃならないのかしらね。あたしの会社でも、組合が分裂してからこつち、そりやひどいもんよ。このまえも、みんなの前で課長があたしを名指しでさ、「あんたは労働に入つてるそうだが、労働や労働者のは、共産党の指令で反税運動やつてる団体だそりやないか。君はどういうつもりで入つてんのか」つて聞くのよ。まあ、そうですか？ あたし、そんなこと知りませんでしたから、もう一度よく聞いてみます。つて返事したいたけど。ほんとに頭にきちやうよ。

旦那 そりやな。今はコンビネーターが労働者きき使う時代だ。人間とちがつて、機械は一切ようしゃしないからな、いっただんこいつはあんどきのストに加わつた、欠勤なん時間遅刻なん分と覚えこまされたら最後死ぬまでその人間の評価は機械の記録で左右される。そういうシステムに耐えられる人間にするためにや、経営者は、ひとりひとりの労働者の感覚から神経までまるごと

任もつてこと……ほんとうは大変なことだったのねえ。

とめさん 彦三のいったことあ、大切なことな。馬力のよかった頃の劇団は、いつも働く仲間が、職場のたたかいが、俺たちの芝居を求めている、この劇団が必要とされているという実感に支えられていた。だから生き生きとした。ところが、職場をとりまく状況がこれだけ複雑になってきてみると、ひとくちに働く仲間といってみてもその感情や要求をほんとに俺たちの芝居に汲みあげていくことは以前とは較べものにならぬほど難かしくなってきた。そんなだけこつちが、強く、豊かな創造性をもたなきやならんのにさ、いつまでも「働く者の演劇、働く者の演劇」ってお念仏ばかりとなえてるうちに、俺たちやいつのまにか、ほんとうに仲間の生活が、たたかいが、俺たちの演劇を必要としているっていう実感をもてなくなってしまうんじゃないのか？

おたけさん そうねえ
とめさん そうなると、劇団は停滞してしまう。劇団員は、自分がこの集団にとってほんとに大切な存在だという感じも薄れてくる。おたけの欠陥ばかり目についてきてけんかにもなる。

カルメン そうだワ。
とめさん 俺も、劇団の内側からばかりみて

な。こんなに劇団がしゃんとしないのは、自分のせいだと責めてみたり。どいつもこいつも頼りにならん、何年やっても上手にならん、サイの河原だと絶望的になったり……だけど、こいつは、やっぱり彦三のいったように、支配者の思想に、人間を分散させ、孤立させ、自分のことばかり考える人間にしたあげようとする思想に、俺たちまでまきこまれていた、負けていたってことさ。

おたけさん ほんとだ！
とめさん 世の中が複雑になりやなるほど、本当はみんなもって人間らしい生活と心。豊かな芸術を、奥底じゃ要求してるのだから、現に、おたけさんの旦那も、労働組合も文化方針をもたにやならんと、腹の底から感じるといってるし、ここの争議団の仲間だって、まるで劇団員と同じようにいっしょになって芝居づくりに協力してくれてる。そこが抛りどころだ。出発点だ。なんど失敗したっていいさ、この、俺たちの、抛りどころさ見えなかつたらな。失敗するたびに、またつくりなおしていくそして最後に、きつともくなる。「うん、これだ！」と仲間がいつてくれるような舞台を必ずつくってみせる。それが俺たちの芝居じゃないか。労働者のたたかいだってそうなる、一時的な敗北やら、小さな

キー子 時間延長！
カルメン もち！
彦三 よし、やろ、やろ。
キー子 ああ！とん子。あたいうち我慢できなくなつたよ。
とん子 へ！明るくなつたとたんにまた！世話が焼けるねえ、まったく！
キー子 タイム。行ってくる。(とん子と二人で走りかけたのをすぐまたひきかえしてきて)大変！大変！すっかり忘れるところだったぞ！
とん子 なんだよ、また。
キー子 焼芋／焼芋さ／(ほじくりかえして) あーあ、まっくらよ、どれもこれも。(底の方にほどよい奴が二つ三つでてる) あつた！あつた！
とん子 早くしろよ、キー子！
キー子 待ってよ！困つたナ、どっちを先にしよう？
彦三 知るかよ、そんなこと俺に聞いたってキー子、ま、いいさ。両方いっぺんにかたづけちゃえ！

勝利やら、それをなんともなんとも重ねて最後にほんもの勝利をかちとる。

キー子 (すつとん狂な声をあげる) あ！ソウか！えんちゃんのことって「勝つたときが見通した」って、そういう意味だったのね。

とめさん うん、そのとおりだな。まったく勝つたときが見通しさ、俺たちの芝居だって。はじめから見とおしなんかありやしないうさ、俺たちの芝居には。一回一回幕あけて、それで見とおし開いていく！

キー子 ちよつと、ネ、みてよ、あそこ！星がみえるよ！
おたけさん ほんと！いつのまに晴れたのかしらネ。
彦三 ミエル、ミエル、ミエル！

とん子がコードをひっぱってやってくる。

とん子 なにがみえるのサ？
キー子 お星さまよ、ホラ、あの天井の破れ目から。
とん子 星？あつたりまえさ。雨が降りやザーザー降りの破れ天井じゃ。星ぐらいいみるワナ。
キー子 夢がないのねえ、とん子は。きれいだワ。こうやって、まっくらな中であれみ

もに、ライトの色は変化し、適当な隊形に人物は移動する。以下、コーラスに全員が参加する。

コーラス

A 北は北海道、南は九州沖縄まで。働くものの演劇は、全国いたるところにある
B 俺たちを、機械のひとつに追いやる合理化の嵐の中で、なおこの手で生産することの意味を確かめつつける、職場のサークル。

C 雪どけを待って、ぬれたベニヤの装置をそつといたわりながら、百姓の心をうたいつつける北国(きたぐに)の仲間もいれば
D 人口一万余千の、小さな村を根城に、部落差別のかべとたたかいつける劇団も

E 大都市の労働者、市民を、広く親客に組織して、すでに堂々たる稽古場を完成した劇団もある。

A 大正十二年。われわれの先駆者！日本初の労働者劇団の指導者・平沢計七は、亀戸警察の裏庭で、官憲の手によって、胴体と、首と、手足をバラバラにされ！
E 虐殺された！
E それから、今日まで
D 消えてはまた生まれ、つぶされてはま

てると素晴らしいじゃないの。こんな幽霊のでそんな工場の、廃墟(はいきよ)の中に光ってるからこそ、あんなにきれいにみえるのよ。赤さびた鉄骨と、すすだけの工場の中で息づくあたいたちの青春！赤いピロウドの、じゅうたん敷きの上で産まれる演劇なんかより、もっと素晴らしい私たちの演劇！

とん子 おう！キザ！
彦三 キザ！ホワイトオーシャン
カルメン どうしてそんなとこにコーマーションなんかとびだすのよ！これだからいやになるよテレビ文化にイカれた奴は。

キー子 ウワッ！ついた！
いっせいに、かん声が起る。遠くからタンクロの声。「おーい！ついたかあ！」
とん子 ついたよう！
キー子 ありがと！タンクロさん！
おたけさん よかったねえ！これで稽古ができるわ！

キー子 さあ、稽古だ、稽古だ、ボヤボヤしちゃおれないぞ！
とめさん おい、どうする？もう九時半だ。終バスがなくなるぞ！

た芽をふいて

F あとから、あとから、倒れてはまた火をふく、歩兵の散兵隊のように

G たえることもなくつづいてきた働くもの演劇。

H その、もともとてやまぬもの

I それは、輝く大地を求めるところ

J 地平線のかなたでもなく

I ましてや月や宇宙のかなたの世界でもない

D すぐ眼の前の大地。労働の、歓喜が満ちあふれる、輝く大地を求めるところ

A 朝鮮で、中国で、ベトナムで、働く人民を抹殺しようとしつづけた汚れた手!

B 醜悪な、血のにおいのする、奴らの美の世界が

C きらびやかな衣装と、妖しい官能の美声で、あなたの心をとらえようとすると

D われわれは

E 泥くさいが、すがすがしい土のにおいのする舞台を、あなたの心へ届けようとする。

F いまは、じゅたんのかわりに、草むしりを敷いた客席しかもたぬが

G 絢爛たるどんちゅうのかわりに、シートをたれ下げた幕しかもたぬが

H やがては、おれたちの村芝居が、敵の

槍舞台を圧倒するだろうし、また圧倒しなくてはならぬ

I 一九六〇年から七〇年へ

J 安保廃棄・沖繩返還をめざす、怒濤のような日本人の足並のなかで

A 俺たちの演劇も、きたえぬかれときすまされて

B 敵の心臓に、もつとも鋭くつきささる刃(やいば)とならねばならぬ

C 日本民族の、良心を貫く演劇の、正規軍が中央劇団なら

D われわれは

E 母なる人民の胸深くわけ入って、その心を武装する解放戦線のように

E 地方にあまねく根をはらねばならぬ

A 南ベトナム解放民族戦線のようにノ全員 解放戦線のようにノ

コーラスが終ると、それぞれ衣装を付たり、救果、照明の用意、雪をもって鉄骨によじのぼる者等、各自舞台稽古開始のための機敏な動きを開始する

キー子が衣装をつけ終って上手の自分の出だしの位置にいったとき、上手入口のはしっこに、ノン子が立っているのみつける。

キー子 ……? ノンちゃんノちよつとみんな

ノンちゃん、ノンちゃんがきてるよ!!

一同驚いてそっちへかけより、ノンちゃんをとりかこむ。涙もろいおたけさんは、ノンちゃんの顔をみただけで、もうなんにもいえずに涙ぐんでいる。

口々に声をかけるみんなにたいして、ノンちゃんは無理に笑おうと努めているが、その顔はひきつったように動かない。

キー子 よかったア。ノンちゃん、もうこれないもんと思ってた。みんなで相談して、あたいがノンちゃんのかわりやることになったとこだったのよ。でも、もう大丈夫ねとめさん。これで役はみんなそろって、あたいたちの公演、万・万才ネノ嬉しい!

しかし、とめさんは返事もせず、笑いもせず、ノンちゃんの表情をじっとみている。ノンちゃんは次第に顔を深く伏せてしまう。

キー子 どうしたの? みんなシヤンとしちまつて。さ、早く、こつち来てノこれ着てノ

キー子は自分の衣装をぬいで、ノンちゃんにわたそうとするが、ノンちゃんは受取ろうとせず、固い表情で、重い鉛を吐きだすようにいう。

けるのを待っている。ノンちゃんが、こんどの公演に参加できないのは残念だが、そのうちきつと、もつと涙いノンちゃんになつて、ひとまわりもふたまわりも大きなノンちゃんになって、いっしょに演劇やれる日がくる。それまでに、俺たちの劇団も、もつと強い大きな劇団にしかなくちゃ。キー子、よくみとけ。稽古はじめ。――

第三幕、幕あきから。ハイノ効果スタートノ(吹雪の音が入りはじめ)幕があがります。ハイノライトが入る。

舞台はみるみるうちに雪におおわれた北国のさいはての野原となる。雪が降りはじめ、ポツポツの扮した「北風」がマントを風になびかせて立つ。上手から、一步、一步、雪をかきわけ、吹雪に抗して進んでくるノンちゃんの「ブーッ」とめさんのかたわらで、食い入るようにその動きをみつめるキー子とめさんが客席に向つていう。

とめさん 俺たちの結論は、まだでないしかし、再び、振りだしに戻つて、俺たちはこういう。「本当の夢という奴は、やっぱり俺たち自身の手でなにかをつくりだして、こつこつ歩いていくとこにしか産まれるもんじやない」と。(ほほ笑い)

ノンちゃん あたし、もう、みんなといっしにやること、できないの。演劇なんか、やれないの。それをいいに来たの、あたし。

水をうったようにシンとなる。やはり誰も落たんしている。やがて、ノンちゃんはおたけさんの旦那をみつめて

ノンちゃん どうしてもいえなかった……、さつきは。あたしは、あたしは……。(絶叫する) 脱退届に、ハンをつけてしまったのよ! 裏切者になってしまったのよ! あたしは。(身体をふるわせてむせび泣く)

旦那 (激しく、かぶせるように) わかっていたさ。あなたの家に行つて、顔みたとたんに、俺はそりだとわかつた。それがどうした? ただの紙きれに、つくりもののハンコをおした、それぐらいのことで、俺たちの心まで奴らに奪われてたまるか! ……

誰も、君を責める者はいないさ。責める資格なんかないさ。俺たち、君が第二組合ばかりの東町支店にとばされたとき、落つたとき。第一の仲間が、半数を割ってしまったとき、もうこれまでおれたちのたたか

いも駄目かと思つたりした。本当は、よろこぶべきだったんだよ。君が配転つたことを。第二へ行った連中の心をつかむことのできる人間が、たったひとりでもあの支店に配置されたことをな。ノンちゃん

やめるんじゃないぞ、銀行を。絶対に! とめさん (優しく) 知ってるよ、みんな、ノンちゃんが負けたりなんかしないってことを。君が、その手でハンおした脱退届をとりかえず、破りすてるたたかいを、もう

はじめてるんだってことをな。だから君はここへきた。そのために演劇やめる必要があるなら誰もひきとめたりなんかしない。そのかわり、徹底的にやってくれ。職場でたたかってくれ。……よくきてくれた。ほんとによくきてくれた。さ、みんな、稽古開始だ! 準備はじめてくれ。第三幕。

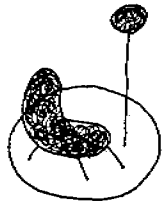
一同黙々と配置につきはじめ。とめさん ノンちゃん、キー子が君のかわりだが、まだ三幕の動き、全然わかつてないんだ。一度、やってみせてくれるネ?

ノンちゃん はい。(はつきりとうなづく) とめさん よし! じゃ、キー子へのバトンタッチだ。はじめよ。

キー子、素早く衣装をノンちゃんにわたして着つけを手伝つてやる。ノンちゃんが位置につくと、とめさんの厳しい声がりんとひびきわたる。

とめさん 今晚・明日・明後日と残された稽古は三回しかない。しかし、どうしても公演は成功させなくちゃならん。仲間が暮あ

- 演劇制作スタッフ派遣 ● 舞台用器材貸出・販売
- 舞台照明操作・プラン作製・一式引受



組合や会社の文化祭・サークルの発表会のとき
 どんなご相談でも気軽にお申越してください。

特にサークルのしごとは、サークルの身になって
 いろいろな経験を生かし、経費の点もご便宜をは
 かります。……………ぜひどうぞ!!

株式会社 第一ステージサービス

東京都渋谷区代々木2-12・西原ビル TEL.03-370-0487(代表)

■あ と が き■

東西リ演の総会を、ともに八月にひかえていますので、その準備号という気持はあったのですが意に充てませんでした。

前号の、黒沢、こばやし論文は、各所でも学習会などがもたれて反響はよんでいるのですが、まとまったかたちでは上って来ておりません。どうも演劇会議をとりまいての関心の度合は、大へんスロ―のようです。原稿の送られ方、誌代の送られ方、現下の緊迫した状態とは無縁のようですえあります。

とって、各劇団の活動には、なかなかそうでない、やる気十分なもの通信などではうかがわれるのですから、ただそれが演劇会議に対して出しおしみされているのかもしれない。

編集も財政もやりくり算段ですが、そんな算段から、窮余の一策土屋清氏の「星を見つめて」を掲載できたのは思わぬ収穫でした。隔月刊への湘踏みもあって、原稿の期日は極力守って見ました。

演劇会議 第二二号 一九六九年七月一日発行

定価 一五〇円(送料三五円)

編集委員

萩坂桃彦・山村金平・黒沢参吉
 仲武司・森本景文・藤沢 薫

発行所

演劇会議 発行所

川崎市上平間一二七五
 電話 川崎 四八八一五

印刷所

幸栄印刷株式会社

横浜市南区上大岡町40